
バトルシティは245年前！？

九条 水菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バトルシテイは245年前!?

【Nコード】

N2990V

【作者名】

九条 水菜

【あらすじ】

神代 花凜は決闘好きでカードの精霊が見えるの18歳の少女。
とある夏の木曜日:こつそり塾を抜け出して『聖闘士星矢LC』
を立ち読みしに行く途中にトラックに轢かれて死亡:のはずだったが、冥界の主・アヌビスの暇つぶしのゲームのせいで、ゲーム参加者100名と共にLCの世界へスリップ。……そこまでは良かったのだが、何故か自分だけアテナに憑依してしまったのだ……。しかも原作にはない事件も起こるし……。このままアテナで一生を終えないためにも:元の世界で生き返るためにも、頑張る話。

プロローグ

…すべての始まりは、あの暑い夏のとある木曜日の昼下がりの事…

アタシ…神代 花凜 はコンビニへと走っていた。

理由はもちろん今週のチャンピオンに掲載されている聖闘士星矢LC目当てで!!!

朝7時から夜の9時までぶっ通し勉強している受験生のアタシにとって、唯一のオアシスだ。

夕方近くに塾を抜け出し、コンビニへ駆け込む。

いや…こんなことしてたら、不味いつて思うよ。

まだまだ点数足りないし…特に物理。

つか、物理なんて興味ないのに……

「国公立行け!!物理なら見てやるから」

とか言いやがっているせいで……。

だいたい、本来ならデュエルアカデミア本校の大学へ推薦進学するはずだったのに、

「まともに勉強せい!ばくち打ちで一生食っていくつもりか!!!」

なんて……。それは、カードの精霊が見える上に、プロ決闘者デュエリストにも負けない…つか、あの不動遊星に認められた娘に言うセリフですか?

……もういいや。言ってもわかってくれないし……
……ばくち打ちには変わらないし……

『いいんかいな？受験生がマンガ読んでも？』

耳元から声がする。

見ないでもわかる。そこにいるのはアタシの一軍デッキのパートナーカード。

『ホルスの黒炎竜LV・4』だ。…アタシの横を飛んでいる。

「いいんだって。これでも、かなり量を減らしているんだし……

NARUTOとLCだけは、立ち読みし続けるから!!」

『……主人……落ちるで……まあいいんやけど。』

ほれ！しっかり前見ないと危ないで!!」

「分かってるって。」

『いゝや！分かっておらへん。あつ!!今赤信……』

無視して突っ走る。どうせ車いないし。

それよりも早くLC読みたいし!!

後悔することになった。

人っ子一人いなかった大通りに、突如！！猛スピードで車が突っ込んできたのだ。

「えっ……」

……全身に言葉で言い表せない痛みが襲う……

状況を理解する前に……

アタシは18年の生涯に幕を閉じたのだった……

……目を開けると……白い空間に浮かんでいた……

「あれ？アタシ……死んだんじゃ……死んだら意識も何も無くなるっ
て思ったんだけど……」

そつつぶやくと、目をゴシゴシやるうとしたが……

「あれ？」

……手足の感覚がない……

「それはそうですよ。お前は魂だけだからな。」

……どこからか、声が聞こえてくる……正確に言えば、響いてくるって言ったほうがいいのかもしれない……

あれか？小宇宙コスモをつかった念話テレパスみたいなの？」

「その通りだ。」

うわぁ……そのとおりだったよ……つか、さっきから人の心勝手に読みやがって……

「それは無論、神だからだ。」

はいはい……分かってるって……どうせアレだろ？

よく二次小説でみかける『転生』ってやつでしょ？……アタシの死因は事故死だし……

「近いな。『転生』というより『憑依』だ。」

……憑依……か……

「ただ、ただの憑依ではない……今回は特別なのだ。」

私は冥界の主・アヌビスだが……最近ヒマでヒマで仕方なくな

……ちよつとしたゲームを思いついたのだ。
適当に事故死で寿命をまっとうできんかった人間から決闘出来る奴
を100人選んで

勝ち残った奴を生き返らせよう…というゲームだ。」

へえ〜…で、なんでそれに『憑依』がいんの？

「普通に私の管轄でやってもつまらないからな。

友人のハーデスが冥界を治める別次元…お前が知るところの『聖
闘士星矢LC』の聖戦が始まる2年程前でやることにきめたのだ。

…さすがに聖戦中は忙しそうなのでな。」

…まてまて…それなら原作の『聖闘士星矢』のほうでやればいいじ
ゃん…LC好きだからいいけど…

「こつちとあつちでは時間軸が違うのだ。」

ふ〜ん……

ところで、誰に憑依すんのかなあ〜。冥闘士のバイオレット？それ
とも鶴座のユズリハ？

「いや、聖戦に介入しては不味いからな。

聖域や冥界の人間に憑依するかもしれないが、雑兵や従者といった
聖戦にはかかわってこない

人間に憑依させるつもりだ。

なにしろ…この戦いで負けた者は…記憶をすべて失い、憑依した
まま生きていかなければならないのだからな。

万が一、杳馬に憑依したが負けて、杳馬が記憶喪失に！！…とい
った展開はあつてはならんからな。」

まあな……となると無名の奴……か……
つてか……そんなルールあんのかよ……
じゃあ、デッキとかはどうなるの？他にルールは？

「デッキはこちらから送る。平凡ななんの特殊能力も持たない人間を送ることは体力がいて100人も無理だが、
デッキ程度なら送れる。お前の決闘盤も^{デュエルディスク}デッキも送るから安心しろ。あとは……向こうの世界の住人に未来のことを教えてはならない。
『未来にはパソコンっていうのがあって、世界中の情報をやりとりできるんだよ』
程度なものならいいが、歴史を変えてしまうような事を言った瞬間、失格だからな。」

なるほど……たしかにね。

「これでいいか？」

おっけー！！ようは勝ち残ればいいだけだし！！！！

「最後にひとつ。これは前聖戦時代全域を舞台にしたバトルシティのようなものだ。

出会ったらずくに決闘といったかんじでプレイしてほしい。

一応、周囲の目には気を付けてな。」

了解！！

「では、飛ばすぞ……」

足元に青い色が広がった。

そのはるか下に聖域が見える。

絶対勝ち残って生き返ってやる!!

その決意を胸に、花凛はL.Cの世界へとびこんだ。

プロローグ（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます!!!

誤字脱字・不明点…あと、その他感想があれば、感想を書いてくださると嬉しいです!!!

これからも不定期ですがよろしくお願いします!!!

第1話：憑依先は女神様！？（前書き）

今回から決闘開始です！！

えっと…今回は出てきませんが、シンクロ召喚を使う時があります。
あと、作者はゼアルをたまにしか見ていないので、エクシード召喚
は使いません。

……やっぱりアタシだ……これがアタシ………なんで……

「なんでアテナ！？あのクソ神は『聖戦に関係ない者』って言うだけだ、こいつは『聖戦の中心』じゃん！！

主要中の主要じゃん！！！！」

「おい！？何言ってるんだサーシャ様よお？」

「ああ！！その名前で呼ばないで！！アタシは神代 花凜！アテナじゃないんだよ！！いや……たぶん身体はサーシャのだと思うけど……」

「？どういうことだ？」

「……だ〜から！！！！ん？……あっ！！アタシの鞆！！！！」

目の端に映ったショルダーバックに駆け寄る。……明らかにこの時代にない素材でできているから目立った。

近づいてみて分かったのだが、……鞆には紙が貼ってあった……

―神代 花凜へ―

すまないな。どうやら、よく分からない力が加わってアテナに憑依させてしまったらしい。

本来ならロドリコ村の17歳の女の子に憑依させるつもりだったのだが……

まあ、今更どうにもできないから、このままアテナでゲームを続けてくれ。

一応、このことは、他の参加者に言ったから狙われる率が高まると思うが、頑張ってくれたまえ。

勝ち残り、その体から脱出できるよう健闘を祈ってるぞ。

- 神より -

「……………ふざけんな！！！！あのクソ犬が！！！！」
「………ってことは、お前はアテナじゃなくて、花凛って奴なのか？」
「……………勝手に読むなよ……………まあ、そうだ。」

鞆の中には決闘盤と自分のデッキが全部入っていた。……………ようは、これから必要そうな決闘グッズはしっかりそろっていた……………数学の参考書とか物理ノートとか見たくないモノも混ぜっていたのは、嫌がらせだろうか？

とりあえず決闘盤を装着しながら、自分の事情をサラッとマニゴルドに説明した。

「………つたく……………よくわかんねえけど……………アレか？ようするにお前は死んだ人間の魂で、生き返るためのバトルのために、ここに来たんだけど、神の手違いでアテナに憑依ってことか？」

「……………んで、もしバトルに破れたら記憶失って一生アテナってこと……………まあ、アタシは負ける気しないけど……………」

マニゴルドはデカいため息をついた。

「めんどーな事に巻き込みやがって……………おい、ここ動くんじゃねえぞ。とりあえず、師匠シジイを連れてくるからよ。」
「ジジイ……………教皇様ヤージか……………わかった。待ってる。」

マニゴルドがこの部屋唯一のドアから出て行った。……………暇なので、

仮眠をとることにする。

最近、ろくに寝てないし……

がちやり

一分もたたない内にドアが開く音がした。

「早くない？……って……」

「やっぱりアテナ様が決闘盤をつけてるぜ。」

そこにいたのは、同じく決闘盤をつけた、この世界では珍しい平凡な顔立ちの雑兵だった。

まあ…雑兵だし。その他大勢の一人だしな……

アタシは決闘盤に適当にデツキを差し込んだ

「……決闘盤つけてるってことは、アンタも憑依者ってことか。」

「そうに決まってるんだろ？じゃあ始めるか偽りの女神さんよお！！」

「「決闘」」

花凜・雑兵ともに LP 4000 手札5枚

うわぁ……なにこの手札……

さすが戦勝の女神…アテナの肉体に憑依しただけあるな……

超チートな予感の手札じゃん……

「アタシのターン、ドロー。アタシは魔法カード『手札抹殺』を発

動。

互いの手札をすべて墓地に送り、その枚数分だけデッキからドロ―する。」

「おいおい…いきなり手札事故かよ？まっ…いいけどよお。

それから後悔するなよ？言い忘れてたが俺は区大会で優勝するほどの腕前だからな。」

なに言っただ此奴……。いきなり手札抹殺したからって勘違いしてんじゃないっての。

「アタシのターンはこれで終わりだ。」

「マジかよ。傑作だぜ！！がら空きじゃねえか！！こりあく勝負あったな。」

いや…この時点ではほどのことがない限り、アンタの負けだから。手札が恐ろしいことになってるし…

「俺のターン。ドロ―カード！……さくつと一発入れてやるぜ。

俺は『ゴブリンエリート部隊』を攻撃表示で召喚！」

ゴブリンエリート部隊

4つ星 攻 2200 守 1500

「バトル！！ダイレクトアタックだ！！そのまま2200ダメージをうけな！！」

「（いかにも雑兵って感じのカードだな……）アタシは墓地のネクロガードナーをゲームから除外することで、相手の攻撃を無効にする！！」

「そうか……さっきの手札抹殺で墓地に送ってたのか……
つち…運がよかったな。一体のモンスターは一ターンにつき一回しか攻撃できねえからな。」

エリート部隊の効果でバトルフェイズ終了時に守備表示にする。
あと、カードを二枚伏せてターンエンドだ。」

……思った通りの戦法だな……

おそらく、この調子だとあの二枚の伏せカードの内一枚は……こちらの攻撃を阻止……または反射させるカード。

もう一枚は、落とし穴みたいにアタシのカードを破壊するカード……かな？

「アタシのターン、ドロロー！！」

アタシは手札から魔法カード『大嵐』を発動！！互いの魔法・罫ゾーンにセットしてあるカードをすべて破壊する。」

とはいっても、アタシは何もセットしてないから、アタシの被害はゼロだけだな。

ちなみに雑兵の伏せてあったカードは読み通り『聖なるバリアーミ

ライフオーズ』と『落とし穴』だった。

「…アタシは、墓地の闇属性モンスターが3体いるとき、特殊召喚！『ダーク・アームド・ドラゴン』！！」

少しメタリック感のあるドラゴンが姿を現した。

ダークアームドドラゴン

7つ星 攻2800 守1000

「だ…ダークアームだと…！？」

「効果発動！！墓地の闇属性モンスター『終末の騎士』を除外することにより、相手モンスターを破壊する！」

ダークアームドの口から吐き出される炎で黒焦げになって破壊されるゴブリン達…

「これでアンタのフィールドがから空きだな。

アタシは、『ホルスの黒炎竜LV4』を召喚。さらに魔法カード『レベルアップ』を二枚使い、

『ホルスの黒炎竜LV8』を特殊召喚！！」

天井ほどある白銀の巨鳥が雑兵を見下ろすような感じでダークアームドの隣に舞い降りた。

ホルスの黒炎竜LV8

8つ星 攻3000 守1800

「ほ…ホルスだと…!?」

「まったく…区大会で調子乗るんじゃないの。」

「ま…まさか…ホルスを使う女と言えば…この間のアジア大会で不動遊星を追い込んだ女…」

アジア大会準優勝の神代 花凜か!？」

「そーゆーことだ。…さてと、アタシは勝たないといけないんでね。」

ホルス!ダークアームド!!雑兵にダイレクトアタック!!!

『ブラックギガフレイム』 『ダークアームド・ヴァニッシャー』!

!…!!

「うわあああああ!…!!」

雑兵LP4000 0

雑兵は糸の切れた人形のようにバタリと地面に伏した。

「ふう…ありがとな、ホルスにダークアームド。」

『おおきに〜』

『当然のことをしたまでだ』

2体のモンスターはそういうとスウツと消えた。

「なるほど……これが君たちのバトルなんだね。」

声のした方を見ると、教皇セージとマニゴールドがいた。

「いつから？」

「最初からだよ。丁度、アテナ様に謁見する時間だったのですね……ここに来たら向こうから不肖の弟子がかけてくるではないか。

事情を聴き、ココの扉を開けた時には、君とそこの雑兵が向き合っ
て『決闘』といているところだったのだよ。」

気が付かなかった……

「うう……」

雑兵が身動きをした。それと同時に、彼の決闘盤が砂のようにサラサラ……と崩れていった。カードだけが床に散在している。

「……ここは……俺は……誰なんだ？」

雑兵の目に光がない……どうやら本当に記憶を失ったらしい……

「……これからお前はどつするんだ？」

セージが呼んだ雑兵が記憶を失った雑兵を部屋から運び出すのを見届けると、マニゴールドが口を開いた。

「そりゃ……元の世界に戻りたいし……アテナで一生を終えたくない

から、戦うためにここをでるつもりだけど……」

「それは止めてもらいたい。」

セージがはっきりと言いつつ放った。

「あなた本来はどうであれ、今はアテナ……。ここを容易に離れるわけにはいきません。

ご安心を。聖域の情報網で『最近、突然記憶喪失になったもの』を探すことにします。

その者の周辺に、あなたの戦うべき相手がいるはずなのでは？

むやみに動くより、その方が効果的かと思いますが……。」

たしかに……。いえるかもしれない……。それに……。ここにいれば衣食住に困ることはないだろうし……。

アタシはうなずいた。

「じゃあ、しばらく世話になるか……。」

「よし！―これからよろしくな……。えっと……。」

さつき名乗らなかつたっけ？

「アタシは神代 花凜。これからよろしくお願ひします！―！」

第2話：ちよつくら散歩に……

I SIDE ネフティスー

えっと……はじめまして。主人のカード……『マスター
ネフティスの鳳凰神』で
す。

今まで出番をあのトリ野郎……いえ失礼……ホルスさんにとられて
しまっていて、こうして出てくるのは久しぶりになります。まあ……
……読者の皆様にとっては、初めましてですけどね……。

あのホルスさんが一軍の顔だとしたならば、私は二軍の顔……ですね。
そこが少しイラッと来ますけど……

さて、そのホルスは今……

「ア……アテナああっ！」

黄金……というより黄色のハサミを器用に握ったホルスが、倒れて
いく花凛アテナ様に向かって叫んでいます……。

そう……花凛様は今、ホルスの奴と、『聖闘士星矢冥王ハーデス十
二宮編』の名シーン……『サガがアテナを黄金の剣で殺すシーン』
を再現しているのです。

うう……もう高校三年生なのに……まあ、無理もありません……
……ここ、4日間ほどずうずうっとアテナ神殿から出ることを許されて
いないのですから……。

なんでも、教皇曰く、危険なのだからなんだとか……

「よしカット！いやあ〜せっかくアテナだし、アテナ神殿にいるから、このシーンをやってみたかったんだよね。ネフティス？ちゃんと撮れてる？」

「……………ばっちりですよ。」

カノン役・兼カメラマン役をしていた私はデジカメの録音機能を停止させると、花凜様に渡しました。

花凜様は、満足げにデジカメの映像をご覧になっています。

…………… ああ…………… それにしてもお劳しい……………

何故、このような小娘の姿になってしまわれたのでしょうか……………。花凜様自身は自覚がなかったかもしれないませんが、歩けば誰もが振り返る美貌の持ち主でしたのに…………… こんな小娘の姿に……………

「ほら！なにボケエっとしてんの？いくよネフティス。」

気が付くと、アテナ神殿を下ろうとしている花凜様。

「えっ…………… ここから出てはいけないのでは!？」

「ちよつとなら平気だつてば。」

…………… それに、気になることがあるし……………」

「気になること…………… ですか？」

まさか…………… 他の決闘者の居場所が分かったとか!？さすが花凜様……………

「雑兵つてどこから来るんだろうつて思ってね。雑兵の抜け道を探すよー!ー!」

…………… 花凜様…………… 年相応の行動をしてください……………

ここ4日間くらい、ここに閉じ込め……っというか…神殿に幽閉されて改めて思ったことがある。

『雑兵』ってどこから湧いてくるんだろう……と。

呼べばいつでも現れるし……それに、原作…聖闘士星矢の十二宮編だって、雑兵・カシオスが突如、5番目の宮・獅子宮に現れていた。星矢たちは、あんなに苦労して十二宮を突破していたのに、いとも簡単に怪我一つなく現れたカシオス……

あいつが十二宮を突破してきたとは思えない。もし、奴が無傷でデスマスクやサガの宮を強行突破して来れたのならば、黄金聖闘士なんていらんじゃないか？

……結果・どう考えても『雑兵専用の裏道』があるはずだ。つてことで、思い立ったら吉日。やりたかった『冥王ハーデス十二宮編再現』も終わったし、さっそく出発したというわけだ。

ちなみに、今のアタシは、原作のサーシャが着ていた薄いワンピースのような格好の上から、純白のマントで身体を覆っていた。理由は簡単。こうでもしないと腕に付けている決闘盤が見えてしまうからだ。

今、この瞬間にも襲われるかもしれない…そう考えると、外せないのだ。だからと言って、コレをあまり人には見られたくない……なぜなら現在の聖域でアタシの正体を知っているのは、教皇とマニゴルドのみ。

いや……乙女座のアスミタにはお見通しかもしれないが……言及されてないからノーカウントで。

「うう…さむ…」

ばれない様に険しい崖のようなところを歩き続けること数十分…
どうやら宝瓶宮のあたりまで下りてきていたようだ。

何故分かるかって？そりゃ簡単。宝瓶宮は水瓶座の聖闘士…デジエルが支配する宮…

デジエルは『知の聖闘士』っていう二つ名だけど、原作のカミュが『水と氷の魔術師』っていうように、代々水瓶座の聖闘士は、氷を扱う聖闘士。ここだけ気温が低くても、なんにもおかしくない。

「あら、アテナ様？」

オナナの人の声がする。見てみると、宝瓶宮の窓から身を乗り出して…たしか…ブルーグラランドに行く前のシーンで出てきていた、花を持っていた侍女がいた。

あ〜〜なんかいやな予感がするな〜。

「え…ええ。ちょっと散歩を…」

「そうですか。では…散歩ついでに…決闘しませんか？」

キタアアア！やっぱり決闘盤をつけてきたよ…この侍女。

まあ…戦わないと不味いしな…

二人は、場所を移動した。…だって、アタシが今までいたところは崖の斜面…そんなところじゃ戦えないっての！

原作でVS氷河戦が行われた場所…ちょうどデジエルは留守のようだ。おもいつきりやれる。

アタシは腰についているホルダーの中からデッキを一つ選択し装着

した。

「決闘」

花凜・侍女それぞれ LP 4000

「アタシのターン、ドロー！！アタシはカードを2枚伏せてブラッドヴォルスを召喚！で、ターンエンド」

ブラッドヴォルス

4つ星 攻 1900 守 1200

まあ、ベタな展開ってことで。手札は…これは二軍だからな……まあ、それでもアテナのチート効果はあるようだ。結構いい感じ。

「私のターン、私はきつね火を召喚。」

「まじで!?!」

驚愕するアタシの前にチヨコンッと現れる小さな狐…

きつね火

2つ星 攻 300 守 200

「待て待て…アンタはデジエルの侍女でしょ!?!」

「あら？炎族デッキでなにか悪いところでも？それを言うのであれば、貴方はアテナなのに、なんで光族をつかわないのですか？」

「……」

「言葉が返せない……。」

「さて、私のターンはこれにて終了です。」

「……アタシのターン……（とはいっても、きつね火は戦闘では破壊されない……それを攻略する手段は、まだ手札にそろってない……）……アタシは『ダンディライオン』を守備表示で召喚して、カードを1枚伏せてターンエンド」

タンポポのようなライオンが現れた。

ダンディライオン

3つ星 攻・守 300

「アタシのターン、ドロ！。アタシはUFOタイトルを召喚。バトルですよ。ブラッドヴォルスを攻撃！！」

UFOタイトル 攻 1400

「……UFOタイトルは破壊されるぞ……なにを呼び出す気だ？」

侍女LP 4000 2600

「私は、UFOタートルの効果発動。自分のデッキから攻撃力1500以下の炎属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができます。
来なさい！『逆巻く炎の精霊』！！」
「マジで!?!」

小さな魔法使いの格好をした男の子が現れた。

逆巻く炎の精霊 攻 100

「逆巻く炎の精霊の効果発動！このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

そして直接攻撃に成功する度にこのカードの攻撃力は1000ポイントアップする。」
「つく…」

花凛 LP 4000 3900

逆巻く炎の精霊 攻 1100

「この瞬間、トラップを発動！『ダメージ・コンデンサー』。手札を1枚捨てることで、その時に受けたダメージの数値以下の攻撃力

を持つモンスター1体をデッキから攻撃表示で特殊召喚する。

「こい！ユベル！！」

「ユベルですって！？」

ユベル 攻・守 0

「でも、ユベルは攻撃されないと意味がないのよ？お馬鹿さん。

私は貴方に直接攻撃するから、ユベルなんていてもいなくても変わらないわ。

……装備魔法『ミストボディ』を装備することによって、逆巻く炎の精霊は戦闘では破壊できない。

ターンエンド。」

「トラップ発動『破壊指輪』！！アタシのフィールド上のカード、ダンディライオンをリリースすることで、

互いに1000ポイントのダメージを与える。さらに速攻魔法『防御輪』発動！

これでアタシへのダメージを無効とする！」

「……つく！でも、どってことないわ。」

侍女 LP 1600

「……ダンディライオンの効果で、綿毛トークンを二体、特殊召喚する。

……ドロー……アタシは、綿毛トークン1体とブラッドヴォルスを生贄に

『ネフティスの鳳凰神』を召喚！」

黄金の巨鳥がフィールドに舞い降りる。

ネフティスの鳳凰神 攻2400 守1600

「なんだありゃ〜!?!」

その時、後ろから声が上がった。……振り返ると、蠍座のカルデアと水瓶座のデジェルがいた。

……が、無視することにする。
アタシは侍女に向き直った。

「アタシのターンはこれで終了。
ユベルの維持コストで、ネフティスの鳳凰神をリリースする。」

「なにしているのかしら? せっかく召喚したモンスターをみすみす墓地へなんて……」

私のターンよ。逆巻く炎の精霊でダイレクトアタック!!」
「くっ……」

花凜 LP 3900 2800
逆巻く炎の精霊 攻 1100 2100

「アテナ様!? これはいったいどういうことですか!?!」

「ってか、なんだよあの化け物……」

「うふふ……心配しているわよ……あなたの部下が……いいのかしら?」

「……構わない。勝つのはアタシだからな。」
「この場に及んで……次の攻撃でお仕舞なのにね……いいこととしてあげるわ。」

プロミネンスドラゴンを召喚！このカードは、私のエンドフェイズ時に、貴方に500ポイントのダメージを与えるのよ。
私はこれで、おしまい。次のターンで貴方は終わりよ？」

花凜 LP 2800 2300

「ドロー。スタンバイフェイズ時にネフティスの鳳凰神は復活。
この方法で復活した時、フィールド上のこのカード以外を全て焼き払う！」

出現した黄金の鳥はフィールド上全域に炎を吐く。

「なっ！？」「私の宮が！？」って声が出したが無視する。決闘には関係ない。

「さ…逆巻く炎の精霊が…プロミネンスが…」
「さらに、ユベルが自身以外の効果で破壊されたから、『ユベル・Das Abscheulich Ritter』を召喚……って意味ないか。」

これでおしまい。ネフティスの鳳凰神でダイレクトアタック！！
『鳳翼天翔』！！！！
『だからその技名やめてください！！！！』

ネフティスが抗議をしながらも、律儀に真っ赤に燃え上がる炎を侍女に向かって放つ。

「きゃああああ……!!」

侍女 LP 1600 0

侍女は、先日の雑兵みたいに糸の切れた人形のように、ペタン…と座り込んだ。

「よっしゃ!! まあ、アタシが負けるわけないけどね。

ありがとね、ネフティス! …次は活躍できるといいねユベル!」

『…はあ…次は別の技名を考えておいてくださいね…花凜様』

『ふん…』

「おい! なんだったんだよ、サーシャ!？」

カルディアが駆けてくる。

あゝ説明面倒だな……。

花凜はポリポリと頭をかいた。

第3話 巨大な蟲の襲撃！？

l i s i d e 花凜――

……今、アタシはアテナに憑依している……

でも、この事実を知っているのは、教皇と不可抗力で知ってしまった三人の黄金聖闘士だけだ。

なんで他の聖闘士に教えないのか……っと思っていたが、そのうちの蠍座と水瓶座への説明の時に教皇は理由を明らかにしてくれた。

理由は簡単……花凜の持っている高度な技術欲しさに、花凜を誘

拐する者が現れるかもしれないからだそうさ。

まあ……誘拐して拷問を受けたとしても、その技術の一部分でも花凜が口にした瞬間、クソ神……じゃなかった……アヌビスの力で花凜の記憶は消されるのだから、この次元の人に伝わるのは不可能

……

でも、誘拐しようと考える奴らは、そんなこと知らない。

んで下手すれば、アテナの身体が修復不可能になってしまうかもしれないから、

それを避けるために、伝える人間や機会は少ない方がいいとの事……だから、一人一人に話すよりも、黄金聖闘士がそろったときに、まとめて話すつもりだそうさ。

ちなみに現在……獅子座は継承者がまだいないみたいだし、

射手座と山羊座がヒュプノスの調査に出かけているから、十二宮に
いるのは9人……

でも、250年前なんだから、もうすぐレグルスが獅子座を継承してもおかしくないし、もうすぐ……

今、目の前にいる双子座のアスプロスが反逆を起こして死ぬのかと思うと、なんとも言えない気になる。

「ん？どうかしましたか？」

「い……いえいえ……それより、この問題は終わりましたよ。」

そう……アスプロスはアテナの家庭教師的な感じのことをやっていたみたいだ。

正確に言えば、隔日でデジェルと交代しているようだ。ちなみに今日はアスプロスの数学の時間。

数学は苦手科目だが、中学校レベルのを大学受験生が出来なかったら、いろいろと問題だ。

かなりのスピードと正答率の良さで、我ながらアタシは自信を持っていったのだが……

「どうしたのですか？一問ミスとは……貴方らしくもない。」

14歳でも知恵の女神は凄かった。

だってコレ、問題量半端ないよ？普通の中学生だったら、アタシの解いた時間と同じ時間でやったら半分もいかないよ？それを満点でやるとは……恐るべし……アテナ……

「おい！花凜はいるか！？」

バンッとカルディアがドアを蹴飛ばすように入ってきた。

アスプロス
つてか、部外者いるのに、その名前で呼ぶんじゃないやねえつてのー！

「…カルディア……だれだその…カリンとやらは…」

「ああん？花凜って言ったら……」

「ゴホンゴホンー！！」

「！？大丈夫ですかアテナ様ー！！」

アスプロスが心配そうな顔をした。

「いえ…問題ありません……」

「万が一のことがあってからでは不味いのですよ？今日はこのくらいにしておきますか？」

「……ごめんなさい……アスプロス……」

アスプロスは一礼すると出て行った。

「……あのなあ……人前で本名で呼ぶんじゃないつてのー！！」

「フン！つてことはアスプロスの奴も騙されてるつて事かよ。」

「……まだ根に持ってんのか……」

そう……蠍座の聖闘士つて、曲がったことを嫌うんだよな……

この間、正体がばれた時も、『俺たちを騙しやがったなー！！』つてキレられたし……

セージとデジェルがいなかったら今頃……考えたくもない……

「で、何の用？」

「へっ……しらを切っても無駄だぜ？最近の化け物騒動はお前のせいだろー！？」

「はあー！？」

「しらねえのか？最近、雑兵を筆頭に聖闘士候補生や、この間なん

か青銅聖闘士の誰かが、巨大な怪物に襲われたという事件だ。それが起こり始めたのが、お前がサーシャに憑依した頃と重なるんだよ……」

「……そんな事件……LC本編にありましたっけ？」

「でも……アタシが来たところと重なるってことは……アタシにも原因があるのかも……」

「……で、巨大な怪物って……もしかしてアタシのカードの精霊を疑ってるの!？」

「確かにあの子たちは実体化しようと思えばできるみたいだけど、非常に疲れるから、」

「たかが雑兵からからかったりするくらいで使わないっての!……!」

「……でも、とりあえず現場に連れて行ってくれる?」

「一応、どんな奴が襲ってきたか気になるし……」

「で、どんな怪物なんだよ?」

「俺が聞いたところによると、青っぽい巨大な虫のような怪物だぞうだ。」

「……アタシ、そんなカード持ってないんだけど……」

「知るか。お前だって怪物使うんだろ?」

「怪物じゃないっての!……ん?」

「……ガサゴソ……」

「な……なんか、音しねえか?」

「確かにな……近づいてくるぞ……例の怪物か?」

「……予想的中。怪物が物凄い羽音を立てながら現れた。」

「あ…アルティメットインセクトLV7!？」

「ほら!!知り合いじゃねえか!!」

「名前知ってるだけだってば!!!ってことは、どこかに決闘者がいるはず……」

「ヒョヒョヒョ…毘にかかってくれたのが女神様で光栄だなあ……」

アルティメットインセクトから降りてくる少年がいた。

なんというか……普通に村人って感じの少年。でも、決闘盤をしているところとか……アルティメットインセクトに乗っているところを見ると……

「なるほど……昆虫使いか……下がっていてカルディア。」

l i s i d e カルディアー

たしか…あの少年^{ガキ}って……やっぱりわかんねえけど、ロドリオかどつかで見たことがある気が……

そんなことを考えていると、女神の皮をかぶったオンナ……花凛が一步前に出た。

「あれねえ〜本当に僕とやる気なの?言っとくけど僕は強いよ?」

「……」

「何を隠そう僕は昆虫決闘者の最高峰・インセクター羽蛾様の一番弟子なんだからね!ヒョヒョヒョ。」

インセクターの称号を譲り受けて『インセクター蟲塚』って言えば有名だと思っただけだ。」

「はあ〜？………ああ………思い出した。羽蛾って、でつかい大会での成績が一回しかないっていうアレか？前に『武藤遊戯』『城野内克也』の伝記読んだとき出てきたなあ……」

「強いのか？」

「いや雑魚。」

きつぱりと言い放つ花凜。虫野郎はなんかめっちゃくっちゃ怒っている。

「は………羽蛾様を馬鹿にすんな！！」「決闘」「」

蟲塚・花凜 LP 4000

「僕のターン、ドローカード。」

僕はアルティメットインセクトLV3を召喚するよ。それでカードを1枚伏せて

魔法カード『虫よけバリアー』！！これで相手の虫属性モンスターは攻撃できない。

さらに僕は魔法カード『ファイアーボール』！この効果でお前に500ポイントのダメージを与える！！」

花凜 LP 3500

「きゃあ！！！！つてか熱っ！！！！」

ファイアーボールに当たった花凜の着物のところどころが焦げてた。

「な……馬鹿な……幻影のはずなのに……」
「君知らないのおく？サイコデュエリストを。僕はそれの使い手なんだよ……ヒヨヒヨヒヨ。」

……いちいち変な笑い方するヤローだな……胸糞悪いぜ。

「おい！花凜！！その…サイコなんたらってなんだよ！？」

「……アタシも噂しか聞いたことがなかったんだけど……」

カードに描かれたモンスターや、カード効果を実体化させる能力者

……まさか本当にいたなんて……」

「ヒヨヒヨヒヨ後悔しても遅いんだぞ！！ターンエンド。」

「後悔なんてするかよ！！アタシのターン！！」

「その瞬間、トラップ発動『DNA改造手術』これでお前のモンスターを全て昆虫族にすることが出来るんだ！！」

「ってことは……あの『虫よけバリアー』って効果があるからよお

……

花凜は攻撃できねえっていうのか！？」

「お兄さんの言うとおりだよ……ヒヨヒヨヒヨ。」

……大丈夫なのか……？

「……そう……なら、伏せカードを3枚……ターンエンド。」

「おい！！何もしねえのか！？」

「仕方ねえだろ！！ねえんだよ除去カードが……！！」

「残念だったねえ……ヒヨヒヨヒヨ。」

僕は、アルティメットインセクトLV3をリリースして、

アルティメットインセクトLV5を召喚……！！」

「トラップ発動と速攻魔法発動……！！」

虫野郎が脱皮をした瞬間、花凜が叫んだ。

まったく……さっきのは嘘だったのかよ……

「まずは『収縮』……！」

コレの効果でアルティメットインセクトLV5の攻撃力を半分にする。

さらにトラップカード、

チェイン・ディストラクション
『連鎖破壊』……！！

攻撃力2000以下のモンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に

発動する事ができる。そのモンスター1体のコントローラーの手札・デッキから

同名カードを全て破壊する。」

「な……なに……！！？」

アルティメットインセクトLV5

攻2300 1150

「同名カードってなんだよ花凜？」

「つまり、同じ名前のカード。」

ってことだから、あの虫野郎のアルティメットインセクトシリーズはすべて破壊されて使えないってこと。」

「くう……貴様……」

なんでそんな効率の悪いカードをいれているんだ！？

同名カードを使わない決闘者だって…………」

「あんだ馬鹿あ？」

にこにこ……って笑う花凜。

「アンタは自慢げにアルティメットインセクトLV7にまたがって

たじゃない？

つてことは、決闘でも使うのは当然でしょ？

まあ、これでお仕舞よ。」

「くう~~~~~!!!でも、まだ僕のターンは終わってない!!!」

僕は代打^{だいた}バッターを召喚!!!

さらに魔法カード『殺虫剤』でこいつを破壊して…現れよ!!!女王様!!!」

うげえ……………気色悪い巨大な虫が……………つてかメスなのか？

インセクトクイーン

攻 2200 守 2400

ん？待てよ……………

「つてか、あいつ、なんで召喚できたんだ？召喚できるのは、一ターンに一体だけじゃあ……………」

さっきの虫はノーカウントにしたとしても……………」

「……………ひよひよひよ……………自分フィールド上に存在するこのカードが墓地に送られた時、

自分の手札から昆虫族モンスター1体を特殊召喚する事が出来るのさ！

さあ女王様！ダイレクトアタック!!!」

うげえ!!!花凜に襲い掛かってきやがった!!!

「手札からハネワタを捨てることで無効!!!」

……よくわかんねえけど、まあ、防いだみたいだな……

「ちっ…悪運が強い奴め……」

僕は『二重召喚』！この効果で、もう一度通常召喚を行う。

召喚するのは、『コカローチナイト』。

こいつを女王様の維持コストとして破壊する。

だが、コカローチナイトは墓地に送られたとき、デッキの一番上に戻る！これで女王様の生贄には困らないぞ！」

うわぁ…頭からむしゃむしゃいったぜ……

ってか待てよ……俺はろくにルールしらねえけど、それって、ドロ
ーが出来なくなるんじゃないの？

「…アタシのターン。」

花凜の目の色が変わる。

「アタシは『強欲なツボ』を発動。デッキからカードを二枚ドロ―。
そして、通常ドロ―以外で、このカード…『ワタポン』をドロ―し
た場合、特殊召喚。

さらに生贄に捧げ……その瞬間、トラップ発動！『道連れ』

これで、ワタポンの道連れとして、インセクトクイーンを破壊する

！……！」

「女王様あああつああ……！！！！！！」

醜く泣き叫ぶ虫野郎。

目の前でデカイ虫が穴に引きずり込まれていく……ざまあみやがれ
！！！！

「…で、召喚するのはホルスの黒炎竜　LV6！
さらに魔法カード『レベルアップ』で、デッキからホルスの黒炎竜
LV8　を特殊召喚！！！！
さらに、『デーモンの斧』を装備して攻撃力アップ！！」

ホルスの黒炎竜LV8

攻　3000　　　4000

『ジャストやな！！』

巨大な白銀の鳥が嬉しそうに叫んだ。

「いけ！！『ブラック・メガフレイム』！！」

「うぎゃああつあああ！！！！」

蟲塚　LP　4000　　　0

虫野郎はバタリつと倒れたまま動かなくなった。

「敗因はアタシのトラップ魔法になんら警戒しなかったことだな。」

『弱いやなあ~~~~じゃあな主人！これからも気をつけてや〜！！』

「さっきゅー」

「……………おい、あれ、しゃべれるのか？」

消えていく白銀の鳥を指して聞いてみると、ものすごい驚いた顔を
された。

『あんちゃん、おいらが見えるんかいな！？』

「へえ〜。カルディアには精霊が見えるんだ。」

……………余命短いからか？」

第四話 潜入！ハインシュタイン城へ！！

- - side 花凜 - -

なんで、こうなってしまったんだろう……

そう……本当は分かってる。でも考えずにはられない……

それは数時間前……

「あ~~~~~ヒマ~~~~~!!!!」

サーシャの巨大な天蓋付きのベッド……どのくらいかというと、ダイクアームドドラゴンが余裕でゴロゴロ出来るくらい……の上で、大の字になっていた。

ハッキリ言ってヒマ。する事なし。いや……毎日、カルディアの奴が

「決闘を教えやがれ!!!!」

って言いに来るけど、あのヤロー……もう一週間は教えているのに、いまだカードの種類を覚えねえし……

「よろしいですか、花凜殿。」

この穏やかな声は……

「どうぞ、セージ様」

白髪の教皇…セージが入ってきた……………うっ…ん……………いくら考え
ても納得がいかない。

だつてさ……………神の一步先を読むセージの声と、本編の聖闘士星矢の
蠍座のミロの（二代目の）声が一緒ってなくない？
性格真逆だし……………

「どうかしましたか？」

「いえいえ…で、なんですか？」

「実は、最近、記憶喪失者が増えている地域を一つ見つけました。
どうしますか？」

「いくいく！！！！絶対に行く！！！」

で……………出発したんだけど……………行先が……………

「ハインシュタイン城……………って……………原作介入しちゃうじゃん！！！」

そう…行先はドイツの森の中にある、ハインシュタイン城……………冥王
ハーデスの人間時の姉……………パンドラの生家。

つてことは、冥闘士の徘徊する城……………そこにアテナと……………護衛の黄
金聖闘士が行ってもいいのか！？

「原作介入ってなんだ？」

「ああ！！聞かないでよマニゴルド！！！！」

そう……………護衛は蟹座のマニゴルド。

「つて!!なんで殴るんだ!?!」

「マニゴルドじゃなくて、今は『兄ちゃん』って呼べって言うてんだろー!!」

「……………」

……………一応、アテナ一行だとばれないように、アタシたち二人は役作りをしていた。

『病気なのに仕事をするため、海外へと渡った母を探している、貧相なイタリア人の兄と男勝りの妹』ということになっている。あつ……………最初のあたりは、アタシの案だから。

まあ…なので、マニゴルドの奴は、子供時代着ていた大人用のボロボロコートをきている。もちろん聖衣は担いでない。なんか、あれつて、小宇宙高めて呼べば、宮から飛んでくるらしい。……………もつとも、多少時間がかかるらしいが……………

ちなみに、アタシは、髪を高く一つに結んでいる貧相な少年……………風の女の子ってことになってる。まあ、アテナには到底見えない。一応、アタシの名前は、『ディーテ』ということになっている。だつて、どっからどう見ても西洋人なのに、『花凜』はないでしょ?

……………テンマがいるつて?あれは父親が東洋人じゃん?とにかく、今のアタシの名前はディーテ。

なんか理由は、「カリン」という植物つて、女神のアフロディーテを象徴する植物らしいから、そこからつてディーテ。なんか……………少し嫌。

自分の中で、あのバラの人と混ざりそうで……………

……………でも、ここまでしたから、ばれることはないと思うけど……………どうしよう……………これが原因で、聖戦が早まったら……………万が一だけど、

これが原因でパンドラが…その他主要冥闘士が死んだら……

「なにウジウジ考えてるんだよ!!」

「うっさいなあ!!マニ……兄ちゃん……」

「よくできたじゃねえか!!」

あつ……鼻で笑いやがった……なんかむかつくな……

つてうちに、城が見えてきた。……うわあ……でつかいな……ん?なんかズカズカとマニが歩いていくけど……

「すまねえ!!宿貸してくれねえか!?腹ペコなんだ!!」

……何考えてるんだ?つて思う暇もなく……

「何者だ!!」

死んだ……!!冥闘士の雑兵が登場しちゃった!!

Inside マニゴルドー

へっ……なんか花凛の奴は驚いてやんの!

反応が面白いから、本当の事を言う気がなくなっちゃった。

ここが冥王軍の仮御所的な感じだつてことは調査済みだつての!!でも、まだ聖域はせめこめねえ……黄金聖闘士が全てそろってないからだ。

だから俺はフツの一般人を完璧に装うから、安心していいのになあ……。

「……はいれよ。運がいいな。」

おっ！いいみたいだな。ラッキー！！

「ほら、行くぜ！デーテ。」

「わ……分かってるってば！！」

花凜がイソイソとついて来る。

途中で見かける冥闘士を見るたびに、なんかビクッつとすることがあつたみたいだが……

後の世で有名になる奴なのか？

「……そいつらが客人か？」

おっ……むこうから、少しいい感じの女が歩いてきた。……目つきが悪くなければ、俺好みなんだけどな……

「はっ！パンドラ様！！」

雑兵がひざまずく。ってことは……高官だな。

「よい。……私がこの城主のパンドラだ。事情は聞いた。ここで休むがよい。」

……いい奴だな……あと、2・3年したら……もう一度、あいてえ

ううう……怖かったよ……何か起こるんじゃないかって……

アタシは夜中……トイレに向かいながら、今日のことをひやひやと思
い返していた。

だって、今日だけですれ違った冥闘士……けっこういるよ？

特徴的眉毛からしてラダマンティスでしょ……それについて歩いて
たのは、バレンタインでしょ……

金の亡者のカロンでしょ……男か女か分からないクイーンでしょ……
しかも案内してくれたのって、雑兵スケルトンのマルキーノだし

……

あれ？マルキーノってLCに出てたっけ……？

「ん？」

その時、すれ違った雑兵の腕に見慣れたものが……

「なあ……それって決闘盤だよな？」

奴の方から言ってきた。……どうやらボロボロマントの上から、チ
ラリと見えたのかもしれない。

「……そうだ……やるか？」

「望むところだな。……今日はどのデッキで行こうか……ん？」

雑兵がジロジロと顔をなめるように見てくる。

「そうか……お前……アテナか!!」

「……」

「それならこのデッキだな……ウヒヒ……」

……なんか、変な効果音発する奴って多いのか？この間の虫野郎も
気色悪い声出してたし……

「「決闘」」

花凜・雑兵 LP 4000

「アタシのターン!!……モンスターカードを一枚伏せてターンエ
ンド。」

「僕のターン、ウヒヒ……『手札抹殺』発動!。

おおっと!これは伏線だぜウヒヒ……僕は『ジャンク・シンクロン』
を召喚!

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する、レベル2
以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

僕は『ハ・デスの使い魔』を召喚!!

さあ、ジャンク・シンクロンに使い魔をチューニング!!いでよ!

! 『A・O・J』 アイリー・オブ・ジャステイス カタストル!!」

アイリー・オブ・ジャステイス
A・O・J カタストル

5つ星 攻：2200

「ウヒヒ……バトル!!裏守備モンスターに攻撃!!」

このカードが闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ

計算を行わずそのモンスターを破壊する!!」

「……伏せカードは、閻属性の『キラートマト』だから、効果発動。ユベルを墓地から特殊召喚。」

「なっ!!!!」

ユベルが地面から湧き出てきた。

「お…お前!!アテナじゃないのか!?光族じゃないのか!?!」

「もちろんアテナだよ…身体は。でも、デッキと関係なくない?」

「うぐう…カードを1枚伏せてターンエンド。」

「アタシのターン!……アタシは『ネフティスの導き手』を召喚。

リリースすることで『ネフティスの鳳凰神』を特殊召喚。

カードを一枚伏せて、エンドフェイスにユベルの維持コストとして、ネフティスを破壊。……エンド。」

「僕のターン…ドロー!」トランプ発動!!」なっ!?!」

アタシはトランプカードを発動させた。

「『強烈な叩き落とし』…そのドローを無効にする」

「くっ…ユベルには攻撃しても意味ないからな……エンドだ。」

「ドロー。ネフティスが復活することで、フィールド上のカードをすべて破壊!」

「ひっ!ミラーフォースが!!」

「そして、ユベルが進化する。…んで、それをリリースして『デーモンの召喚』を通常召喚。

『死者蘇生』でアンタのジャンク・シンクロンをいただく。

5つ星のデーモンとジャンク・シンクロンをチューニング。

来い!ダークエンド・ドラゴン!!」

漆黒のドラゴンが黄金の巨鳥の傍らに舞い降りた。

ダークエンドドラゴン

8つ星 攻：2600

「……………終わりだ。2体でダイレクトアタック!!!」

「ぐ…ぐわああああ!!!」

雑兵 LP 4000 0

「……………なんか……………雑魚だったな……………」

せつかくここまで来たのに…………

噂になるほど、決闘者を多く倒して、記憶喪失にさせてるのかと思
つたのに…………

「なるほどな。さすが神代 花凜だな。」

「だ…誰だ!?!」

そこで手を叩いていた人物を見て、アタシは言葉を失った。

第5話 記憶を奪いし盗賊王！？

l i s i d e 花凛――

そこにいたのは……雑兵の格好をした……白髪の少年……？

「なんで……アタシの名を？」

「それを言う気にはならねえな。」

「ためえの存在は、この世界をゆがませる恐れがあるんでな。決闘しようぜ。」

そいつは決闘盤を掲げた。……アタシはデッキを入れ替える。

「ゆがませる？」

「その通りだ。……まあ、俺様の知ったこっちゃねえけどな。」

俺様はあのクソ神と交わした契約を果たすまでよ。」

「クソ神……アヌビスか？」

「アヌビス！？ふははははは！！違うけど教えられねえな！！

地獄に落ちた俺様は、別の神様に『生き返りたいのなら、神代 花凛 と決闘し勝利してこの世界を救え』

って頼まれたまでよ。

だから、闇の力を使って、その辺の雑兵どもの記憶を奪いまくること、

さも、強いゲーム参加者がいるようにみせたわけだ。まんまとはまってくれて嬉しいぜ。」

……意味がよく分からない……でも……アタシの敵ってことは分かった。

「……受けて立つ……アンタの名前は？」
「俺様はバクラだ。さあ始めようぜ……闇のゲームをな……！」

花凜・バクラ LP 4000

なんか空気が一気に様変わりした。……なんというか……重々しい
というか……肌寒いというか……

「ここは、さつさと終わらせる！アタシはホルスの黒炎竜LV4を
召喚！さらに魔法カード『レベルアップ』。
これでLV4を進化させる！来い！『ホルスの黒炎竜LV6』！！」
『いくで主人！！』

白銀の鳥がフィールドに舞い降りる。

ホルスの黒炎竜LV6 攻 2300

「カードを1枚伏せてターンエンド。」
「俺様のターン、ドロ……」『叩き落とし』を発動！ドロを無効
にする。」
「……まあいい。俺様のオカルトデッキの恐ろしさを味わうんだ
な。」

俺様は儀式魔法『闇の支配者との契約』を発動！手札の8つ星モン
スター『ダークネクロフィア』を生贄に、
みせてやるぜ……俺の恐るべき戦術をな……いでよ！『闇の支配者
ダークマスター
ゾーク』……！！」

……なんか、凄そうなのが出てきたな……

闇の支配者ゾーク 攻 2700

「さらに、墓地にダークネクロフィアが送られたことにより、フィールド魔法『ダーク・サンクチュアリ』を発動！」

うわぁ……なんか部屋一面に目玉がいつぱい出てきやがった……きもお……

「ゾークの効果発動！貴様の命運はこのダイスが握ってる……舞え！洗脳ダイス！！」

サイコロが音を立てて転がる。……出た目は……2……

「ふはははは！！スーパークリティカル！！テメエのカードを全て破壊するぜ！！」

くらえ！ゾークインフェルノ！！」

「くそ！！」

『ま……主人！！！！』
マスター

運の強い奴め！！これじゃあ死者蘇生が来ないとLV8が召喚できないじゃん！しかも伏せてあるこのカードじゃ、攻撃防げないし……

「俺様は『ハ・デスの使い魔』を召喚！そして効果発動！！

こいつを生贄にすることで、場の悪魔族モンスターの攻撃力を700アップさせる！もちろん選択するのはゾークだ。

いくぜ！ゾークでダイレクトアタック！」
「くはっ！！」

闇の支配者ゾーク 攻 3400

花凜 LP 4000 600

「くつくく……さて、俺様はターンエンドだが……ちよつくら聞くが、今、テメエは何をしてるんだ？」

「はあ！？なにつて……決闘……」

「何のために？」

「それはもちろん……」

……あれ？何のためだっけ……

「えっ……えつと……あれ？あれ？……」

思い出せない！？なんで！？なんで！？大事な事なのに！？

「言い忘れてたが、この闇のゲームでは、LPが減るたびに、記憶を失っていくのさ。」

自分がこれまで生きてきた足跡をランダムにな。」

「……うそ……だろ？」

「ウソだったら、なんで思い出せないんだ？」

「うう……」

怖い……自分のことが……分からない……

名前……性別……は辛うじて頭に浮かんでくる……でも……これまでの

経歴……

なんでこの男と決闘をしているのか……なんでこんな古い城のような所にいるのか……

なんのために……生きているのか……

なにも……分からない……分からないゆえの……自分に対する……
恐怖が募っていく……

「どうした？ 楽になりたいなら、サレンダーをしたらどうだ？

降参したら残っている曖昧な記憶も全部消えて、楽になれるぜ？」

「……」

「諦めんじゃねえよ馬鹿！！」

後ろから声がする。涙でにじんだ目に映るのは……青い短髪の男……

ー i s i d e マニゴルドー

「で……蟹座キャンサーのデスマスク？」

「誰だよ！？ 俺は蟹座のマニゴルドだ！！」

苦痛……悲しみ……困惑の色でいっぱい目を、花凜は俺に向けてきた。

『トイレに行く』って言ったわりには帰ってくる時間が遅すぎだから、様子を見に来たら……この有様だ。

よくわかんねえけど、かすかに聞こえた話をつなぐ限り、記憶をかなり失っているようだ。

「……あ……本編の蟹じゃなくてLCの蟹……が、なんでいるの！

「？」

「あゝそれは後で教えるから、とりあえず、目の前の敵を倒したらどうだ？」

「えっ……？」

「なに戸惑ってんだよ？ いいか？ 俺はそのカードゲームをよくしらねえけどよお……」

でも、負けたらなんでもおしまいだろ？ なんでも勝たなきゃ意味がねえんだよ。

戦いをはじめたなら、負けるわけにはいかねえ。負けるために戦う奴なんて、馬鹿でもいねえぜ？」

徐々に戸惑いの色が消えていく……

「ほら！ さつさとドローしやがれ！！」

「わ……分かってるってば！！」

目にしつかりとした光が戻った…… ったく…… 世話が焼けるぜ……

「アタシは……死者蘇生を発動！ 舞い戻れ！ ホルスの黒炎竜LV6！！
さらに、『魔法再生』これで墓地の『レベルアップ』を使用する！
こい！ ホルスの黒炎竜LV8！！」

ホルスの黒炎竜LV8 攻 3000

「だが、俺様のゾークは倒せねえぜ？」

「分かってる……だから、こうさせてもらっ！！」

ブラッドヴォルスを召喚！ さらに『エネミーコントローラー』を発動！ ブラッドヴォルスをリリースすることで

ゾークの支配権をエンドフェイズ時まで得る！！」

「くっそ……」

「アタシもよく分からないけど、確か『ダークサンクチュアリ』の怨霊の効果……はスタンバイフェイズに発動するはず……アタシの召喚したホルスはメインフェイズに召喚したし、ゾークは元々アタのカード。」

安心して攻撃出来るな……行け！2体でダイレクトアタック……！」

「ちくしょー！こんな……こんな小娘ごときに……俺様が……！」

バクラ LP 4000 0

「はぁ……はぁ……」

バタリと花凜はそのまま地面に倒れ込んだ。

「おい！しっかりしやがれ……！」

意識は……ない……が、脈波正常だし、浅いけど呼吸をしているところを見る限りだと、命に別状はねえみたいだな……

「……？」

さっきまで、バクラがいたところを見て目を丸くしてしまった。バクラはおるか、決闘盤も……カードもすべてが砂になって散っていつてしまったのだ。

「なんだよ……一体……？」

「おい！そこで何しやがってるんだ……！」

後ろから声が駆けられる。振り返るとそこには、冥闘士がいた……

— I s i d e 花凜 —

……目を開けると……見慣れ始めてきた白い天蓋が……

「って…ここは!？」

慌てて飛び起きると、やはりそこはアテナの部屋……
えっと……アタシって…確か……ハインシュタイン城で……決闘し
て……そのあと……

「よう!目が覚めたみてえだな。」

「あっ……マニゴルド!！」

壁にもたれかかるようにしてマニゴルドは立っていた。

「あの後、カロンとかいう冥闘士に見られてよぉ……
まあ、金出したら黙っててくれた上に、こっそり城から出してくれ
たから、問題なかったけどな。」

「あゝカロンね……なら平気だわ。あの金の亡者でよかった……」

「知ってたのか？」

「聞かなくていいって。」

記憶も……もう、自分の中にある。勝ったから戻ってきたのだらう。

「ありがとう」

聞こえないように消え入りそうな声でつぶやいた……が、

「えっ？なんだって？もう一度言えよ」

……見事に聞こえていたようだ……はずいなあ……

『蟹！！一度で聞き取れや！！』

『花凛様に恥ずかしい思いをさせるわけにはいきません！！！！』

ホルスとネフティスが抗議の声を上げてくれた。

「あ~~~~うっせえ~~~~わかったよ。俺は帰るって。」

耳をふさぎながらマニゴルドは出て行った。

アタシは黙って立ち上がって外を見る……

広がるは、蜜色に染まった聖域……

そう……帰ってきたんだ……もう、しばらくは、原作介入を心配しなくてよさそうだ。

そう思うと、さっきまで寝てたはずなのに、眠気が襲ってきた。

『なあ、遊ばん？』

「ふあああ~~~~眠いから後でな」

ホルスの返事が耳に届く前に、アタシは深い闇へと落ちて行った。

オリキャラ設定

名前……神代 花凜

歳は18歳で受験生。

デュエルアカデミア本校オベリスクブルー寮に所属。

実家は剣道の家元。

容姿は『リリカルなのは』のシグナムの髪の毛が黒い版に似ている……のだったが、
アテナ……しかも12歳に憑依しているため、現在の外見はアテナ（サーシャ）

特技は、カードの精霊を見ることが出来ることと、剣道

女子には到底見えない言葉づかいをするため、女子に見られないことが多い。

好きな漫画はLCとNARUTOだが、とある魔術の禁書録や銀魂なども読んでいる。

使用するデッキは、主に2つだが……共通して言えるのは、両方もデッキイメージは『闇』であるということ。

だが、どのデッキも、主格に来るキーカードは『炎族』。

主に使用するのは、一軍と二軍。

一軍のメインは『ホルスの黒炎竜』で、二軍のメインは『ネフティスの鳳凰神』と『ユベル』

決闘者としてのレベルは不動遊星とガチでやりあえるほど。

本人の自覚にないが、彼女自身の少々チートのなドロート、アテナの戦勝の女神としての力が混ざり合っているため、ドロートのチートさが半端ない状態になっている。

実は、D・ホイールの免許を習得してあるが、最近、自宅と、徒歩で行ける距離の塾の往復の毎日を送っているため、ガレージの奥に眠っている。

今回のスリップ時には転送されてこなかった。

とにかくサーシャとしてこのまま生きるのが嫌なので、さっさと勝ち抜いて元の生活に戻りたいと思っているのだが、セージに幽閉されているため、中々思うように行動できず、また、諸事情により肉なし生活を送っているため、ストレスがかなり溜まっている。

最近の日課は、こっそり聖域めぐりと、カルディアに決闘を教えること。

第6話 バラ戦争!?

Inside アルバファイカー

私は、自分の守護する宮…双魚宮にいた。

静かに目をつむり……宮に漂ってくる魔宮薔薇デモンローズの香りに包まれて……

「？」

その時、微かに異変を感じた。……それは小宇宙……

魔宮薔薇の園の真ん中に位置する……敬愛する師の墓の辺りから……

「何者だ？」

師の墓に触れていた影に向かって静かに叫ぶ。

その者は純白のフードつきのマントを着ていた。ゆっくりその人物が振り返って……顔が露わになった時、

私は腰が抜けそうになった。

「あ……アテナ様!？」

「ぴ……魚座ピスケスのアルバファイカー!？」

アテナ様もひどく驚いていた……が、それよりも……

「急いでこの園から出てください!!アテナ様の身に何かあったら……このアルバファイカーは……」

「お……落ち着いてくださいアルバファイカー!!ちょ……ちょっとルゴニスさんの墓参りしたくなっただけ……ですから!!」「わが師の墓参

り……ですか？」

「はい。……それに、この程度の毒ならへっちゃらです。」

私はアテナですよ？心臓を矢で撃ち抜かれても、数日に渡り世界に降り注ぐ雨を一身に受けても、

血を吸い取る聖なる大甕に閉じ込められながらも、生きていた女ですよ？」

「……そんな事があったのですか？」

「え……まあ……そうですね。」

少し明後日の方角を向いている気がするが……なにか悟られたくない事情でもあるのだろうか？

「あ……あの……アルバフィカ？」

「なんですか？」

「そのお……貴方は一人ではありませんよ……！」

「……！」

「ですから、毒の血のせいで孤高気取っているのかもしれませんが、貴方は一人ではありません……！」

その手を握る事の出来る人はいないかもしれませんが、貴方は皆と心でつながっているのですから……！」

それに……！」

ちらりと墓をさびしげに見るアテナ……

「貴方には、血の繋がりがなくても、自分を子のように思ってくれる人がいたのですから……！」

「……ですが……貴方にも『家族』といえる人がいたと聞きました
が……それに兄がいると……！」

「えっ……!?……あ……そうですよ。でも……まあいろいろと事情があるのです。」

これからもがんばってくださいアルバフィカ。」

ポンポンっとアテナは私の手を軽く叩くと園から出て行った。
突然、肌に触られたので、驚いてしまい、その後ろ姿を見送ること
しかできなかったが……

……おかしい……なんか態度がおかしい……

私は下へ降りて行ったアテナの後を追うことにした。

l i s i d e 花凜ー

「…さすがアテナ……耐毒性が半端ないな……」

アルバフィカに触った手をアタシは見た。

元々、LCを読むきっかけになったのが、アルバフィカVSミーノ
スの話……

思い入れのあるキャラの一人だ。

『で、主人はどこに向かっているんや?』

「もう!!アルバフィカのことを思い出してたのに……口を挟まな
いで!!」

……別に、ただ『ぶらり聖域の旅』ってかんじ?」

ぶらりぶらりと気の向くままに雑兵の通る道を進んでいた。

「あ……あのお……花を届けに来たんですけど……」

白羊宮の辺りに差し掛かったところだった。宮の前で声を張り上げ

る少女がいた。

「あれ……って……アガシヤ？」

少女に近づいていく……やっぱりそうだ。大きな頭陀袋を下げてるけど、間違いない！

たしかロドリオ村の花やの少女……で、確かアルバフィカを敬愛してるんだっただけ？

「どうしたの？」

「えっ……あ……えっと……アテナ様に花を届けに来ました。通してくださりますでしょうか？」

アタシは少し笑ってしまった。……アテナはアタシだったの……まあ……本当は出て来てはいけないから、言えないけどな……

「うっくん……シオンの奴が宮にいるなら通せるんだけど、今はジャミールに帰ってるからな……

よし、アタシが預かっておくよ。」

「ぜえ……つたいに渡してくださいね？」

「分かってるって……ん？」

色とりどりの花の中に……見慣れたカード……

「『ロード・ポイズン』……って……アンタ!?どこで……」

「……なるほど……貴方がアテナだったんですわね……」

アガシヤは不気味な笑いを浮かべた。

「……場所を移さない?こっちに来て。」

アガシャは……いや、アガシャの皮をかぶった参加者は走り始めた。
アタシも後を追う。

「さて…このあたりでいいかしら？……私の名前は夕陽野 朱美。
さあ、はじめましようか。」

花凜・朱美 LP 4000

「ん……さてよ……夕陽野って……あの夕陽野財閥の？」

「ええそうよ。あなたの本名は？……まあ、聞いても意味がないか
しら。どうせ庶民でしょうしね。」

さあ、私のターンですわ。

私は『黒薔薇の魔女』ブラックローズウィッチを召喚しますわ。」

紫色の髪の子が現れる。

「さらに効果を発動いたします。」

自分フィールド上にカードが存在しない場合にこのカードが召喚に
成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドローできますの。
この効果でドローしたカードをお互いに確認し、モンスターカード
以外だった場合、ドローしたカードを墓地へ送り、このカードを破
壊いたしますわ。

では……引いたカードはこの子……『薔薇の妖精』ですわ！！

この子は通常ドロ以外で手札に加わった時、特殊召喚が出来ますの！」

黒薔薇の魔女の隣に頭にバラをつけた妖精が現れた。

「……たしか……黒薔薇の魔女はチューナーモンスター……ってことは……」

「もちろん。シンクロ召喚をさせていただきますわ。

星の数は魔女の方が4で妖精が3なので、合計7つ星のカードをシンクロ召喚します。

舞い降りなさい！『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！」

「なっ!?!」

真紅の龍シムロウが薔薇の羽を震わせながら出現した。

ブラック・ローズ・ドラゴン 攻 2400 守 1800

「な……そのカードって、十六夜アキしかもっていないはずじゃあ……」

「財団の力で作ったレプリカですわ。

私……美しいモノには目がないものでして……カードを一枚伏せてターンエンドですわ。」

「……気に入らないな……アタシのターン！」

……よし……この手札なら、久々にアレを使うか……

「アタシは、カードを1枚伏せて、『魂を削る死霊』を守備表示で

ターン終了。」

魂を削る死霊 攻 300

「言っておくけど……魂を削る死霊は戦闘では破壊されないから。」

「存じていますわ。……ですが……そのカードを使うとは、なんと愚かなのでしょうか？」

私のターン。私は『サイクロン』を発動させてもらいますわ。」

「なっ!？」

伏せてあった『死のデッキ破壊ウイルス』が破壊された……やっぱり慣れないカードを入れるんじゃないやなかった……

「危なかったですわね……確か『雑魚の闇属性が破壊されたとき、相手のデッキの1500以下のモンスターをことごとく破壊するのでしたっけ?」

「……その通りだ。」

「おほほ。ではいきますわ。ブラック・ローズ・ドラゴンの効果発動いたします。」

墓地の植物属性モンスター：薔薇の妖精を除外することにより、相手フィールド上に存在する守備表示モンスター1体を攻撃表示にし、このターンのエンドフェイズ時までその攻撃力を0にすることができます。

もつとも……たしか、魂を削る死霊は、カードの効果対象になった瞬間、破壊されるのでしたから、守備表示になる以前の問題ですけど……」

つく…なんか腹が立つな…こっちがら空きジャン…

「バトルですわ。いきなさいブラック・ローズ・ドラゴン！『ブラック・ローズ・フレア』！！」

「くっ！！」

漆黒の炎がアタシを包む…とはいつても、この決闘者は、あの虫野郎みたいにサイコデュエリストでもなければ、このあいだのバクラみたいに闇の力をつかうわけでもない…ただの映像だ。

花凜 LP 4000 1600

「おほほほ！！ターンエンドですわ。」

「その笑い方…やめてくれない？」

おもわず睨んでしまった。

「まあ…あなたのような庶民に言われたくないですわ。」

そつえば…あなたのお名前は？一応、聞いておいてあげますわ。」

……なんか…アガシャのイメージが一気に壊れたな……まあ、仕方ないけど…

「神代 花凜だ。」

「まあ！！あの不動遊星と戦いなさった方でしたか……それに神代といったら剣術の家元では？」

「……それがどうかしたか？」

「いえ……少々はしたないと思ひまして……
名門剣術の家元の娘が……こんな風情のかけらもない屑だったなんて……」

ぷっちーん

何かが自分の中で切れた気がした。

「あのなあ……あの家にアタシは誇りも何もないけどな……
アンタの方が醜くみえるぜ？」

「な……なんですって!？」

「だいたい……バラはもつと高貴な人に合うと思う。」

「高貴なら私……」

「いや、財力≠高貴じゃないっての。」

高貴っていうのは、気高き心さ。……証明してやる。本当のバラの美しさを……!

アタシのターン、ドロー……!

よし……これならいける。このデッキにしてよかった……。

「アタシは『イービル・ソーン』を召喚。効果発動……!

このカードをリリースすることにより、相手に300のダメージを与え、

さらにデッキから特殊召喚できる。

こい!イービル・ソーン……!

イービル・ソーン 攻 100

朱美 LP 4000 3700

「ふん！こんな攻撃…いたくもかゆくも……」

「さらに、アタシは魔法カード『二重召喚』を使う。

このカードの効果で、もう一度だけ通常召喚をする……アタシはイービル・ソーンをリリース。

現れよ！！『凜天使クイーン・オブ・ローズ』！！」

バラの羽をもった天使がブラックローズの前に対峙するかのよう
に降臨した。

凜天使クイーン・オブ・ローズ

攻 2400

「おほほほ！！！そんな使い勝手の悪いカードを入れているなんて

……

知ってますか？巷ではそのカードの呼び名は『残酷な天使』

スタンバイフェイスに敵味方関係なく……」

「一番攻撃力の低いモンスターを破壊する……知ってるに決まっ
てるだろ？」

「だがな……このカードはアタシの三軍デッキのメインカードだ。」

「さ……三軍ですって！？」

なめんじやないって顔してるな……

「このカードはさ……バラ「ナルシスト」って図式を覆してくれたん
だ。

アタシには聞こえないだろうな……他の……それも自身より弱いカ
ードを壊さないと生きていけない……

かといつて周りが自分より強いと、自分が死んでしまう……

いつも周りに誰かがいるけど触れ合うことは出来ない……少し輪から外れたところにいるこの子の声が……

アタシはこの子と心でつながってるって信じてる……

最初は孤高な感じだったけど、最近は暖かいつて感じるしな。

外見ももちろんかもしれないけど……心が凜としていて……美しい……それを『高貴』っていうんじゃないか？

奴は……黙って聞いていた。

「……ようは魚座の聖闘士をあらわしているとしても？」

「そう言ったつもりだけど……まあいい。アタシは……アンタのいう高貴を壊すだけ。」

その精霊の宿っていないブラックローズを破壊してな。

『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロ―

……魔法カード『死者へのたむけ』……！！

これで手札を1枚捨てることで、相手のモンスターを1枚破壊する……！！

「ぶ……ブラック・ローズ……！！」

地面から伸びてきた包帯にグルグルまかれたブラック・ローズは圧迫されるようにして散った。

「さらに、『死者蘇生』を発動！復活させるのは、

今手札から墓地に送ったカード……『椿姫ティタニアル』……！！

椿が咲き始め、中から女性が現れた。

椿姫ティタニアル 攻 2800

「……………これで終わりだ！ティタニアルでダイレクトアタック！
続けてとどめを刺せクイーン・オブ・クイーン！！」

『薔薇剪定斬（ローズ・トリマー）！！！！』

ティタニアルが椿を使って攻撃した後、スラリと引き抜いた白銀に
光る剣を朱美に向かって振り下ろした。

「きゃあああ！！」

朱美 LP 3700 0

「……………ありがとう、ローズにティタニアル……」

2体は…ティタニアルは満面に…ローズは口元だけ……………笑みを浮か
べて消えていった。

「……………あなたは何者ですか？」

えっ！？アタシは急いで振り返って……………

さあ~~~~と顔が青ざめていくのが分かった。

いや……………声を聴いたときから『まさか……』って思ったよ……………

そこにいたのは、本編の『琴座のオルフェ』と同じ声の人物……………

「魚座のアルバフィカ……いつからそこに？」

そう……水色の髪に泣きホクロの青年が佇んでいた……

あれ？そういえば、LCに琴座って出てきてたっけ……ってそれどころじゃないよ。

「……先程あなたと宮でお会いしてから、様子がおかしいことになって……」

「あとをつけたって事が……」

あゝまた最初から説明か……めんどくせゝ

「アタシの名前は……」

「神代 花凜……と名乗ってましたね？」

「そう……んで、ひよんなことからアテナに憑依したんだよ。えっと……長いので省略……ってことなんだ。

だからこのことは……」

「誰にも言わん……」

それより早く帰らないとセージ様が心配するのでは？」

……確かにもうかなり日が傾いている……あの爺さん……怒ると怖いんだよな……

「そうだな。サンキューアルバフィカ!!」

「こちらこそ、礼を言う……客人よ」

「へっ!？」

「……いや……なんでもない……行け。」

よくわかんねえな……でも……今は帰宮だけを考えないと……

『主人！ファイトやで！！』

ホルスが応援してくれている……あ……あ……でも、今から最上部まで走らないと……って考えると気が重い……

ため息をついて、アタシは赤く染まり始めた裏道を走り始めた。

第7話 相手は女つたらしの大富豪!?

Inside ネフティスー

『出せ!! 俺を此処から出してくれー!!!!!! 弟の俺を殺す気かー!!!!!!』

「カノン、その岩牢からは、神の力を以てせねば生涯出ることはできん。

お前の心の中から、悪魔が消えてなくなるまで入っているのだ。

……アテナの許しが得られるまでな……」

『お、おのれサガ! お前のような男こそ偽善者というのだぞ!! いつまでも、悪の心を隠しおおせると思うな!!』

力のあるものが、欲しい物を手に入れて何が悪い!

神の与えてくれた力、自分の為に使って何故いけないというのだ!

サガよ! 俺はいつもお前の耳元に囁いてやるぞ!

悪への誘惑を!! サガよ、お前の正体こそ悪なのだー!!!!』

『いい加減にしてください!!!!!!』

私はこれ以上ないくらいの大声で叫びました。

「あのね〜ネフティスはノリが悪いよ。」

『せやで!! スニオン岬に来たんやから、この伝説のやり取りをしない……!!』

『あのですね!! ホルス!! あなたは精霊としての自覚フレイムを持ってください!!』

それから花凜様!!あなた様はもう18歳なのですよ!?!」

「……そうです……あの二人……花凜様とホルスの奴は、『カノンがスニオン岬に幽閉されるシーン』を再現していました……」

「……セージ様から『スニオン岬周辺で記憶喪失者が倍増中』との報告を受けた時から……なんか嫌な予感はしていたんですけどね

……」

「あつ……ちなみに役は花凜様がサガでホルスがカノンですよ。」

「いいじゃん!!せつかく本物の岩牢の前に来たんだからさ。」

「おい、でっかい声聞こえたけど、どうかしたか?」

ぴよんぴよんつと崖の上から降りてくる黄金の光……本日の護衛の蠍座のカルディアですね。

「いや、なんでもないよ。それよりもう行こう!!--」

「そうか?」

カルディアと花凜様は歩き始めました。……あ~~~~花凜様……
もつとこう……女としてのプライドを持ってください……

「なんや?そんなに『サガ・カノンごっこ』が気に入わんのか?」

「そうじゃありません!!--」

「諦めるネフティス……ばか鳥に何を言っても無駄だ……」

「ユベル!!--もう一度言ってみい!!--」

「はいはい、喧嘩しないしない……」

後ろを振り返って我々をなだめようとなさった花凜様の動きが止まりました。

……一体何が……

「ねえカルディア。あれって『ソロ』とかいう人の屋敷？」

指差された方を見ると……確かに巨大な屋敷が……！

「ああ。そうだぞ？しっているのか？」

「まあな。あれだ……未来なんだが……生粋の女たらしが住まうところだ。」

……ジュリアン・ソロのことを言っているのでしょうか……

「生粋の女たらしって……ジュリアンに悪いんじゃないか！？」

突然響いた大声……

私たちが振り返ると……そこにいたのは……

「魚に助けられたジュリアン・ソロ！！！！！」

『あ……！！13歳のアテナに振られた16歳や……！』

『……たしか……全財産を投げ打って洪水の被災者救済の為の旅にでたのだったな……』

なんといいもつたいないことを……』

「あ〜〜そういえば、あつたね……でも、あれって途中で挫折するとおもう。」

お伴がソレントだけだし。」

『主人の言い分に3000点や!!それに……絶対、おぼっちゃん暮らしをしてきた奴が、

この先待っている貧乏暮らしに耐えられるとは思えへん。』

『いや……ああ見えてもルックスはいい。』

Dグレの某元帥のように世界中に愛人をつくり、今後の生計を立てるつもりなのだと思うぞ』

「んで、愛人がいない地域ではソレントに借金をつて感じが。」

……もういい……もうつつこみません……

花凜様……ホルスだけでなく、私側だとおもっていたユベルまで……

「俺はジュリアンに似てるけど、ジュリアンじゃねえっつーの!!
確かにアンタらの言い分はその通りで否定は出来ないけねえけどな。」

このジュリアンそっくりで決闘盤をつけている人が困ってる……

「いい加減にしねえか!!おい、こいつ憑依者だろ!？」

さっさと決闘しやがれよ、花凜!!」

ナイスです!!カルディアのことを少し見直しました!!

「早くこいつのカード手に入れるよな。」

カード集まってるからじゃねえと、俺のデッキが作れねえじゃねえか
！！！」

……前言撤回……します。

l i s i d e カルディアー

よし、決闘が始まるやがったな！！ってか……さっきから『ジュリアン』って言ってるけど……
未来の重要人物なのか？

花凛・ジュリアンっぽい人 LP 4000

「アタシのターン！！アタシはブラッドヴォルスを召喚。
カードを2枚伏せてエンド。」

ブラッドヴォルス 攻 1900

「俺のターン！俺はフィールド魔法発動！『伝説の都・アトランテ
イス』！！」

うわっ！？み…水が大量に！！
幻覚って教えられてても身構えちまう。

「…つく…なんだこりゃ！？周りの風景が一気に変わったぞ！？」

対戦者の後ろに神殿のようなモノ……

「あゝそれは、フィールド魔法っていつて、フィールドを支配するカードだな。

あのカードの場合だと、水族は200ポイント攻撃力UPって効果がある。

アトランティスってことは、アンタは水使いか……」

「その通り！俺は『アトランティスの戦士』を召喚だ！

このカードが召喚に成功した時、デッキから『伝説の都・アトランティス』を手札に加えるんだっつーの！！

とりあえず、エンドだな。なんか伏せカードが怪しいしな！！！」

アトランティスの戦士 攻 1900 2100

花凛のモンスターと攻撃力が同じだったのに！！

……ん……なんで警戒してんだ？俺だったらさっさと攻め込んでるのにな……

「アタシのターン。アタシは、『破壊輪』と『防御輪』を発動！！破壊するのはあなたのアトランティスの戦士！

このカードで破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを受ける……っつても

アタシは防御輪のおかげでダメージは無効だけどね！

はい！これでガラ空き……！！

ブラッドヴォルスでダイレクトアタック！！」

「くっ！！」

ジュリアンっぽい人 LP 4000 1900

「おい！！今のでなんでゼロにならねえんだ！？」

「ははは！！！！」

ブラッドヴォルスの攻撃の前に、『クリボー』を手札から墓地に捨てたんだぜ！！

これでバトルのダメージは無効だったの！！」

「……アタシはカードを1枚伏せてエンドだ。」

「俺のターン！！……来たぜ来たぜ……」

俺は墓地の水属性・アトランティスの戦士を除外することで、特殊召喚『水の精霊アクエリア』！！

さらにリリース！！来い！！『海竜 ダイダロス』！！！！」

水色の少女が消えた……って思ったら、でっかい竜が現れた！！もしかして……だから、トラップに警戒するふりをしたのか？墓地に水属性を送るために……？

「マズッ！！」

「ダイダロスの効果！！場にある『伝説の都・アトランティス』を捨てることで、

フィールド上のカードをすべて洗い流す！！！！」

でっかい波を……津波ってやつ？…あれをダイダロスっていう竜は作り出して……

あっという間に花凜のフィールドを綺麗サツパリにしまった！！

「さらに、俺は、もう1枚の『伝説の都・アトランティス』を発動！
そんでもって、『デーモンの斧』を装備！！」

リヴァイアストリム
海竜 - ダイダロス

攻 2600

3800

ヤバくね!?

「ダイレクトアタック!! 『リヴァイア・ストリム』」
「く…!!」

花凜 LP 4000

200

「カードを1枚伏せてエンドだつーの!!」

「おい!! 平気なのか!？」

「平気だ。……でも、あそこでダイダロスが来るなんてね……」

せつかくの『魔法筒』が流されちゃった恨み…果たすから。

アタシは『天使の施し』を発動!! 3枚ドロして2枚捨てる。

そして『死者蘇生』!! よみがえれ!! ホルスの黒炎竜LV6!!」

来たぜ!! ホルスが地上に舞い降りた。

「さらに『レベルアップ』でLV8に進化させる!!」

ホルスの黒炎竜LV8 攻 3000

「おいおい……俺のダイダロスの攻撃力は……」

「2600に戻る。」

「はあ!?! どういうことだよ、花凜!?!」

「ホルスの黒炎竜LV8の効果は、相手の魔法カード使用を無効化

する』

つまり、アトランティスの効果も斧の効果もなしってこと。」

ダイダロス 攻 3800 2600

「ふん…攻撃できるなら……してみる。まだライフは…」

「さらに通常召喚。『ジャンクシンクロン』！！効果で墓地の『ジヤアントウィルス』を復活させる！！

さてと……ジャンクシンクロンにレベル2のジヤアントウィルスをチューニング！！！」

シンクロ召喚！！』アーリー・オブ・ジャスティス『A・O・Jカタストル』！！！」

あ…あれって……この間手に入れたカードだな。

「効果は知ってるか？こいつは闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊するんだ。…

…これで終わりだな。」

「うう……し…知ってるか！？決闘も商売も駆け引きが大事なんだ

！！！」

「……………」

「いきなり何言ってるんだよ!？」

「……………2000万円払うから、2000ポイントLPを回復していいか!？」

「……………金で買うつもりかよ!?!?!」

思わず俺は叫んでしまった。何考えてんだよ!!!

「……………まさか……………お前……………あの海の大商人…アナシスの親族か!？」

あの十代さんと決闘をした……………」

「アノ人は俺の爺ちゃんだっつーの!!
俺は爺ちゃんの夢を叶えるため……海の中に、『デュエルアカデミ
ア』をつくりたいんだ!!
だから、ここで負けるわけにはいかん!!!!」
「……………すまん……………な。
でも、アタシも負けるわけにはいかないんだ……………
その夢ごと……………消えてもらうよ!!カタストルでダイダロスを攻撃
!!
それで、ホルスでダイレクトアタック!!!!」
「や……………やめてくれ……………!!!!」

ジュリアンっぽい人 1900 0

…なんていうか……………花凜の奴……………さびしそうにしてるな……………
そりゃそうか……………あんな告白聞いちゃった直後に倒して、奴の夢を
全て拭い取ったんだからな……………
いい気分のわけねえか……………

「おい!!なにシンミリしてんだよ、カルディア!?!」
「はあ……………!?!」

やけに笑顔を花凜がいた。

「つてめ!!俺はだな……………」

「決闘は勝たないという意味がない……………これはゲームでありサイババル

……………

誰も譲れない思いを持っているんだからな。
アタシも負けるわけにはいかない。」

「……………お前は、どうして戦うんだ？」

「アテナのまま人生を終えたくないから」

「即答かよ!？」

他にねえのか!? 帰ったらなにしたい〜とか?」

「……………そうだな……………」

花凜は赤く染まりつつある海を眺めた。

「……………味噌ラーメン……………食べたい……………あと、漫画読みたい。」

「夢低っ!?! 他にねえのか!?!」

「へえ〜なに? カルディア気になるのか?」

にやついた顔をしてくる。

「あ〜めんどくせえな!?!」

どうするか? 何か食ってから帰るか?」

「おう!?! 酒場行こう酒場!?! 希望はメキシコの酒場!?!」

「却下だ。遠すぎる!?! ロドリオでいいだろ!?!」

「え〜〜」

「え〜〜じゃねえよ!?! それ以上いうなら、真紅の衝撃を喰らわせるぞ!?!」

にぎやかな声が、スニオン岬に響きわたった。

「……ほう……まだ勝っているな……」

何者かが鏡に映ったアテナ……もとい花凜を見ていた。

「では……私自ら動くと致しましょう……」

この世の平穩を取り戻すため……」

第8話 奪われたホルス 美の女神襲来!?

Inside 花凜――

…ガタン!! 蹴り飛ばすように玄関のドアが開く音がした。

(お母…さん…?)

力を振り絞って、頭を上げた……が、部屋に漂う悪臭に鼻を押さえながら入ってきた人物は…母ではなかった。

…治安維持局の…人たちがぞろぞろ入ってくる…
真っ先に髭の生えた男が近づいてきた。

「ああ… 可愛いそうにな……」

「……だ……れ……?」

「花凜ちゃんを助けに来たんだよ。」

「お母…さん…は? お…父さ…んは?」

治安維持局の人の顔が曇った。

「……花凜ちゃんのお母さんはね……」

『主人!! 主人!! はよ起きてえな!!』

目を開けると、ホルス(LV4)の顔がドUPされていた。

『授業中に寝たらあかんで!』

「授業……?」

「……はあ……ずいぶんとうなされていましたが、平気ですか花凜さん?」

本を片手にしたデジエルがため息をついた。……そっか……今日はデジエルの日だったな……

でも、正体知っているデジエルは、年相応の問題出してくるから……つらいんだよな……

「そついえば、シジフォスとエルシドが帰ってきてるぜ?」

何故か宮に上り込んでいるカルディアが言った。

「あゝそれ、セージ様に聞いた。でも、帰ってきたのが夜中だったから、アテナのお目通りはなし……

本当によかった!!!」

『なんでですか?』

「そりゃ〜〜〜〜……うん……察しろ!」

今、会いたくないキャラNO・1にランクインしているのが、シジフォスだ。

……だつて、あの人……『聖闘士とは別の気持ちで護りたい』って思っているんですよ?

しかも、聖域に来たばかりのサーシャに対して!

……ちなみにシジフォスとサーシャの歳の差は15歳……明らかにロリコン!!

……つまり、そついった偏見があるから会いたくない……

しかも、絶対奴はアタシを見破って大声でバラス自信あるし……

あれ?そついうキャラは、アイオロスの方か?まあ……本質は変わ

らないだろ。

「おっ！？これなんだ？」

カルディアがカードをいじくっていた。

「ああ…『エクゾディア』だな。5枚すべてが手札にそろったら勝ちってカード。」

「入れてんのか？」

「……アテナのチート能力があるから…一応ね。まあ…使う前に勝ってるけど。」

カードを取り上げてデッキに戻したその時だった。

ピクンッとカルディアとデジエルの動きが止まる。

「ど…どうかしたのか？」

「……花凜…アフロディーテをしっているか？」

「で…デジエル！？それ本気で言ってるの！？知ってるに決まってるでしょ…！」

「そのお方が部下を率いて、アテナにお目通りを願っているらしい。」

へえ〜アフロディーテがねえ……タイムスリップしたのかな…
じゃあ…部下はミスティと瞬か？

「いいんじゃないか？通せば。アフロディーテなら話してわかる相手だと思っし。」

……数分後……

「お久しぶりですわ、女神アテナ。」

「お久しぶりですね、女神アフロディーテ様。」

無理矢理笑顔をつくる。

だって……だって……まさか本物のギリシャ神話の女神・アフロディーテが部下引き連れてくるなんて……

原作にはないぞ！！イジメかぁ！？どう対応していいかわからないじゃん！！

しかもさ、就任してないレグルス除く黄金聖闘士全員が、ずらりと勢ぞろいしてるんだよ……

簡単に説明すると、ここは教皇の間で、いつもセージ様が座っている椅子に腰を掛けている。

ちなみに、アタシの横にセージ様は立っていた。

んで、単庫本一巻みたいにならなくてズラリと並ぶ黄金聖闘士。そしてその間の通路には、ここでは書けないくらい美人の女神様と後ろに控える2人の闘士……こいつらもイケメンと美少女だ……

えっ！？給仕の女官と雑兵はどこにいるかって？

安全のため、教皇の間の立ち入りを禁止している。

うう……なんか目がチカチカする……

「何世紀ぶりでしょうか？」

「そうですね……いえ。お会いしたことはありませんわ。」

はぁ？何言ってる……

「なぜなら、あなたは、数週間前にこの世界にいらしたばかりなのですから。」

「そうですわよね、神代 花凜さん？」

「……アフロディーテ一行以外の顔色が変わる。」

「か…カミシロ カリン？なにを…」

「嘘はいけませんわよ？貴方もこれをお持ちでしょう？」

部下の一人…美少年の方がアフロディーテの長いマントをまくり上げ…そこから現れたのは決闘盤……

「神とはいえ、アテナ様に対して妄言を！！」

「うわぁ……どうしよう……シジフォスがキレかかっている……
クスツとアフロディーテは笑った。」

「あら、知らなかったのね……可哀そうに……
ですが、私共は喧嘩を売りに来たものではありません。
アテナ様の心を、その『世を乱すもの』から取り戻すために来たのです。」

「すうっつと何も絵が描かれていないカードを取り出す……
でも……カード名は書かれていた」

『魂の牢獄』つと……

「……つまり……」『闇の決闘で主人を倒して、主人の魂を閉じ込めるっちゅうことか！？』

…ホルスの奴が叫んだ。…うわあ…アタシの正体を知らない聖闘士達が唾然としてるじゃん…

『へっ！！女神だか何だかよう知らんけどな、主人は強いで！？』

「あのねえ…耳元で叫ぶのは止めてくれない？」

『なんやねん！！せつかく…』

『馬鹿ですかホルス！？花凜様の言うことが聞けないのですか！？』

「はいはい…ありがとなネフティス…。」

玉座から降りる…そして、決闘盤のついた左腕を上げた。

「悪いけど、アタシは負けるわけにはいかないんだ。…悪いが…

勝たせてもらう！」

「ほう…私に勝つなんて無謀だと、身体の髄から教えて差し上げましょう…」

私の名前は矢向。さあ決闘をしましょうか？」

Inside デジエルー

「決闘！！！」

花凜・矢向 LP 4000

…考えてみれば、決闘の方法やカード効果を教えてもらったことはあったが、実際に決闘を目にするのは、二回目だ…それにしても…

「どうなっているんですかアテナ様！説明をお願いします！！」

「まさか……アテナ様に取りついた悪の化身か！？」

「……それを取り除くべく、アフロディーテが聖域に？」

……事情の分からないシジフォス・アルデバラン・童虎がうるたえ
ている。

シオンとアスプロスとアスマタも理解できないようだ……当然だ。
私も最初は理解できなかったから……

「うっせえぞテメエら！！黙って花凜の決闘をみてりゃいいんだよ
！！」

「マニゴルドの言うとおりだぜ！！絶対に勝てよ花凜！！味噌ラー
メン食べるんだろ！？」

「うっせえぞカルディア！！集中してんだからな！！！！
アタシのターン、ドロー！！……アタシはジャイアント・ウィルス
を守備表示で召喚。」

カードを1枚伏せて、ターンエンド。」

場に球体の生命が浮かび上がる。

ジャイアントウィルス 攻1000 守 100

「私のターン。魔法カード『エックスチェンジ』。…互いの手札の
中から、1枚交換するカードだ。」

苦い顔をした花凜が、歩み寄っていく……そして、奴の手札を見た
時、目を細めた。

「……おい……これはどういうことだ？……一応、邪神像を貰っておくが……」

「見ての通りです。残りの手札2枚は『黄金の邪神像』、残りは『メタルリフレクト・スライム』『スケープ・ゴート』です。……さて、私は貴方の『ホルスの黒炎竜LV8』をいただきますでしょうか？
「マジかよ！？ホルスっていったら、アイツのエースカードじゃねえか！！」

カルディアが騒ぐ。……その通りだ。一軍を飾るエース……だが……LV8なら、そこまで問題はないかもしれない……LV8はLV6がないと、召喚不可能なのだから……
ただ……奴の顔……何か策があるに違いない……

花凜はしかめっ面のまま、カードを渡した。

「私は、カードを2枚伏せてターンエンド」

「アタシのターン……」

アタシは、カードを1枚伏せて、そして、『大嵐』を発動！！
「……」

……矢向は2枚…花凜は1枚…どちらも『黄金の邪神像』なので、カード効果で特殊召喚される……

「アタシは、黄金の邪神像をリリースし、『デーモンの召喚』を召喚！！」

白骨の鬼が姿を現す。

デーモンの召喚 攻 2500

「さらに、『メテオ・ストライク』を装備！これで、守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える！！行け！！
『魔天雷』！！！！」

デーモンが雷を作りだし、矢向に投げつけた。

「ぐわあああつああ！！！！」

矢向 LP4000 2500

「カードを1枚伏せて、エンドだ。」

「フフフ……私のターン……まず、『スケープゴート』で、羊トークンを4体特殊召喚します。

そして魔法カード『リロード』！！

これで、自分のカードを手札に戻し、同じ枚数分だけ引きます。

『手札抹殺』で互いの手札を捨てた後……

……さて、『天よりの宝札』を発動。互いの手札が6枚になるようにドローをします。」

あいつ……何を考えて……ん？

花凜の表情が『まずい！！』という顔をしている……なにか起こったのだろうか？

「さて、今の通常以外のドロワーの際、ワタポンを引いていたので特殊召喚。

……ワタポンを生贄に、『人造人間サイコショック』を召喚します。」

脳がむき出しの人間……らしきものが現れた。

人造人間サイコショック 攻 2400

「不味い！！サイコショックというカードは確か……^{トランプ}罠カードを全て無効にするのではなかったか!？」

「はあく!? インチキだるそれ!!！」

「さらに、私は、スケープゴートを3枚リリースすることで、特殊召喚、『D-HERO BLOOD-D』!!！」

人型の……黒いマントを着たモンスターが姿を現した。

「BLOOD-Dは、相手の場に出ているモンスター効果を無効にします。

更に、相手のカードを1枚、装備カードにすることができるのですよ。

装備したモンスターの攻撃力の半分の数値分アップするので……貴方のデーモンをいただきますと……

1250UPしますね。」

「デーモン!!」

デーモンが吸収された。

B L O O - D 攻 3 1 5 0

「私はさらに、死者蘇生を発動します。

もちろん持つてくるカードは、先程あなたが手札抹殺の効果で捨てる終えなかった

『ホルスの黒炎竜LV6』!!」

「なっ!!どうしてそれを……」

「フフフ……あなたのドロローはチートですよ。

あなた自身のチートさに、戦勝の女神のチートさが加算されえているのです。

どんなカードが来ているかは、大方の予想はつきます。

さて……では『レベルアップ』を発動させてもらいましょうか?」

私を含めた…花凜を知る奴らの表情が固まるのが手に取るように分かった。

「おい…どうしたのだじゃ、デジエル?」

「そんなに不味い状態になるのか?」

牡羊座のシオンと天秤座の童虎が尋ねてきた。

「不味いに決まってんだろ!?

奴の召喚しようとしている、LV8つてのは、相手の魔法カードを無効にしちまうんだよ!!」

「それは、不味いのか？」

「当たり前だろ、アルデバラン!!!これで、アイツは…花凜は…魔法も畏もモンスタ―効果も封じられたんだからな!!!」

おまえらさあ、わかんねえのかよ!？」

「カルディア……アルデバランもシオンも童虎も……ルールを知らないのだから、分からないにきまっているだろ？」

つまり……たとえて説明するのであれば、小宇宙を封印されて使えない黄金聖闘士が冥界3巨頭に聖衣なしで挑むようなものだ。」

「それは負けるに決まってるじゃないか!!!」

「いや……3巨頭が朝食に食べた卵で腹を壊していたら、勝機はあるかもしれない。」

「アスミタ……」

ホルスの黒炎竜LV8 攻 3000

「さて、サイコショットでジャイアントウィルスを攻撃しますよ。分かっていると思いますが、ジャイアントウィルスの効果は発動しませんから。」

「くっ……」

「これで、終わりですよ。」

B L O O - Dでダイレクトアタック!!!続いてとどめです!

ホルスよ!!!ダイレクトアタック!!!」

「ぐわあああああ!!!……!!!」

花凜 LP 4000 1000

花凜は辛うじて立っているようだ。

はあ……はあ……と肩で息をしている。

「馬鹿な……なぜ……」

「墓地の『ネクロガードナー』を除外することで、ホルスの攻撃を無効にした……だけだ。

そいつの効果は、場のモンスターだけで、墓地や手札には効かないから……。」

間一髪だった……が、戦況は好転していない。

だが、花凜の目は落ち着いていた。

「それで終わりなら……アタシのターンにするが……」

「あなた……本当に帰りたいたいんですか？」

唐突に質問をされた花凜は眉をひそめる。

「もちろん。アテナのまま死にたくは……」

「このまま、私に封印されてしまったほうが、元の世界に戻るより、幸せなのでは？」

花凜の動きが止まった。

「あんたは……アタシの何を知っているんだ？」

「すべてですよ。」

少なくとも……あなたが父親に餓死寸前にさせられた時から……」

餓死……すんぜん？父親にか？

「おい！？どついつことだ！？」

マニゴルドが声を上げた。……花凜の表情からは何も読み取れない
……

「新聞か何かでアタシを知ったのか？」

「いえ……おぼえていませんか？」

私は、あなたを保護した治安維持局の者ですよ。」

「……髭の……おっちゃん……か？」

花凜の目が大きく見開かれた。

「さて、どうしますか？」

そのままドローをして勝ちをとるか……

ここで、終止符を打ち、アテナを復活させるか……」

第9話 幸せをつかむために… 運命のラストドロ〜!! (前書き)

この回は、あまり決闘シーンはありません。

第9話 幸せをつかむために… 運命のラストドロー!!

ー l s i d e マニゴールドー

「どういうことだ? ……アフロテイエテ女神様に憑依してんのが、花凜の知り合いのオッサンで……つか、実の父親が実の娘の花凜を餓死寸前にさせたって……なんだよそれ?

俺だけじゃなくて、他の奴らも呆然としていた。

「フフフ…みなさん、分かっているみたいですね。」

「オッサン……きもいから、そのしゃべり方やめてくれない?」

「これはすみません。」

では、簡単に説明しましょうか。

このアテナに憑依している人は、神代 花凜……は、5歳までは春山家の長女でした。」

「5歳まで? んじゃあ、そのあとは誰かに引き取られたということなのか?」

「その通りですよ、牡羊座のシオンさん。」

さて……花凜の母親はエリート会社員で、海外に単身赴任をしていました。

本当は幼い愛娘と夫も連れて行きたかったのですが、都合で単身赴任になってしまったのが、不幸の始まりと言えるでしょう。

単身赴任をして2年目……まとまった休みが取れたので『いきなり帰って驚かせてあげよう』と考え、一時帰国した花凜の母親は、見てしまったのです……夫と腕を密接に絡まらせて歩く知らない女を……。

すぐに夫を問い詰めましたが……口論になり……かあっくときた

夫の方が……妻を殺してしまったのです。
つということで、夫は逮捕。私は数名の部下と一緒に彼の自宅にいる一人娘……つまり花凜の保護へ向かいました。

部屋に入って感じたのは悪臭……トックス……つまり、大都市の最上階級までとはいかないとしても、なかなかの住宅地のマンションの一室なのに、まるでサテライト……スラム街のような臭いでした。その時、消え入りそうな声が聞こえた気がしたので、あわてて駆け寄ってみると……そこにいたのが、骨と皮ばかりに痩せた花凜だったのです。

当時・5歳の娘なのに体重は9kg……。彼の父親……。つまり、花凜の母……自身の妻を殺した男は、自身の犬やネコ・小鳥と言った愛玩ペットにはしっかりと餌を与えていたそうです……が、『子供はかわいくない』と行って、必要最低限の食料しか与えていなかったそうです。

「なんなんだ！？本当にそ奴は父親なのか！？」

花凜を知らないまでアルデバランがムツツとしている。
俺の思考は止まりそうだった。

……餓死するガキなんてたくさんいる。せいっぱい働いたり盗みをしたりして……それでも食料が手に入らず、餓死するガキなんてスラムにはあふれている……
だが、花凜が住んでいたのは、スラムではない。コイツの話だと、そこそこの上流階級だぞ？食料を買い求めるくらいの金はあるはずなのに……

「さらに、サンドバック代わりにされていたらしい多数傷跡もありました。」

「なんだよソレー!」

カルディアが今にも殴りかかろうとしている……が、足元がデジエルによって氷漬けにされているので、動けねえみてえだな。

……花凜の反応はなかった。

「それで、多少施設にいれられ、回復した花凜は、母型の祖母の姉に引き取られた……そこが剣道の家元『神代家』です。」

やつは、先程と変わらない丁寧な口調で語り続ける。

「ですが、名門の剣術の家元……汚点が付くのを当主は恐れたのでしよう……だからといって、メキメキと剣術の実力がつき、師範代顔負けの力を持った花凜を里子に出すわけにはいきません……」

そこで、彼女の好きな決闘が学べる学校……『デュエルアカデミア本校』へ、入学させたのです。……自宅から通える『ネオ童味野シテイ校』ではなく、在学中……めったに学校から出ることができない寮生の学校に……しかし……」

奴はにやりと顔に合わない笑みを浮かべた。

「決闘の才能がずば抜けすぎていたため……人の中心に立つことは出来ても、対等の立場でモノを言いあえる……つまり、多くの後輩や同輩には羨望の眼差しを向けられているのですが、それをよしと思わない人も多いのは事実……親しい友人は、はっきりいってゼロなのでは?」

「……」

花凜は何も答えない……少しうつむき気味で表情も分からない……

「決闘者はばくち打ちのようなモノ……そんな不安定な職に就かせ
て『神代家』に泥を塗らせないようにするため、本人の要望を振り
切って、これまた寮生の国立大への進学を検討中……
そのせいで大嫌いな物理を勉強しているのですかね？」

さて……ここまで話してあなたも理解できたでしょう？

あなたはこれから先……このバトルで勝ち残って帰れたとしても、
待っているのは『神代』の名に縛られた人生……
自分の思い通りに……楽しかったことなんて、現実逃避のために読
んでいた漫画くらいなのでは？

これから先も変わらないつらい人生を送るのなら、いっそ魂を封印
したほうが楽になるんじゃないですか？」

しー……と、水をうったかのように静まり返った。

……誰も口を開くものがいなくなった……

まさか……いつも軽口をホルスや自分たちと叩き合っている花凜が、
そんな人生を過ごしてきたとは思わなかった……が、なんとなくだ
が、ここで諦めるのは違う気がする……
つたく……また、喝を入れてやらねえといけねえのか？

「……で、まだターンエンドしないわけ？」

顔を上げた花凜は、少し苛立った顔付きで言った……うわぁ……
アテナに見えねえ〜

「……今話を聞いて、お前はなんとも……」

「それがどうしたって？」

アタシはねえ……まだ死にたくないんだっての……！

花凜は右手でバンッと胸を叩いた。

「そりゃさあ、いままでろくなことがなかったって思う。でもさ、諦めたら試合終了だろ？それに……アタシばかりが不幸なわけじゃないし。」

『13年間……いや28年間存在を隠されている』わけでもなけりや『13年間、叛逆者の弟という汚名』を背負って生きているわけでもなけりや『神の加護を消す右手』があるわけでもない。

『生まれつき目が見えない』のでもなければ『身体の中に化け物』をかつているわけでもない。

って考えたら、アタシは幸せもんだよ。だって三食食べられるし、少なくとも……他人にどう思われていようが自分の席はある。五体も満足だ。

ってことは、あとは少しでも楽しく長く生きられるように努力するだけだ。だから。帰って楽しく生きる可能性を探す！だから……アタシは負けない！！

アタシのターン……ドロー……！！！！！！」

その時だった。

花凜がカードを引いたとき、花凜の手札のカードが輝き始めた。

「『封印されしものの右足』『封印されしものの左足』『封印されしものの右腕』『封印されしものの左腕』……そして『封印されしエクゾディア』……この5枚が手札にそろったとき、勝利する……！！」

手札の光と共に、巨人が場に現れた。…でっかい……この教皇の間の天井スレスレだぜ。

「これでさよならだな…オツチャン。喰らえ！『怒りの業火 魔神^{エクス} 火炎砲^{ドフレイム}！！！』」

以前、花凜がやっていた『かめはめ波』っていったか？…なんかアレに似た感じのポーズをとった巨人……すざましい炎弾をやつにぶつけた。

「う…うわああああ！！！！」

矢向 L P O

決闘が終わったな。

「おっちゃん！！」

花凜がダッシュで駆けていく……が、あの長いスカートにつまずいてズルつと転んだ。
「つたく……なにしてたよ、アイツ……」

「やったな花凜！！…おい、デジエル！さつさとこの氷何とかしやがれ！！」

「はあ……少しはおとなしく出来ないのか？」

「ほんと、デジエルの言うとおりだな。」

立ち上がった花凜は笑うと、またオツチャンの方へ……

「待って下さい花凜殿！！」

師匠シウシ鋭い声がとんだ。ビクツとして花凜は立ち止る。

「おかしいと思いませんか？

なぜアフロディーテに憑依したのか……」

「それってランダムだからじゃないの？」

「女神ですぞ？……言いにくいですが花凜殿の憑依した今生のアテナ様は、身体は人間です。

しかし、アフロディーテは身体も心も女神ですぞ？それに中年男性が憑依するなんて考えられますか？」

……たしかに……

「！？おい！？」

アsproスが叫んだ。見ると、決闘盤がサラサラと砂のように……いや、決闘盤だけではない！アフロディーテの肉体も砂のように消えて行ったのだ！！

「どういうことだ！？……！？」

突如、何もない空間から莫大な小宇宙を感じた。

「フフフ……まさか、こいつを倒すとはね……」

何もない空間から、もう一人のアフロディーテが現れた……うわあ……こつちも美人じゃねえか……さすが、美の女神だな。

「初めまして、神代 花凜と黄金聖闘士達……と教皇。」

「あ……あなたが本物か！？」

「その通り。そうね……簡単にあなたに分かるように説明すると、『積尸気冥界波』みたいな術でこの男…矢向の魂を身体から引き離れた途端に、矢向の入っていた身体を破壊したの。」

「……さて、突然肉体から切り離された哀れな魂はどこへ行くか……当然、肉体へ戻ろうとする……もちろん、彼の肉体はもうないから……空いている肉体を探すんですよ。」

「そこで、入ったのが、私がこの時のためだけに作らせた『もつとも人間に近い、私型人形』。」

「これに入った矢向に、あなたの魂を、私が与えた『闇の力』で奪つてきなさいと命じたんです。」

女神はにっこりと……どんな女でも浮かべることが出来ないだろう笑顔を浮かべた。

「やべえ……惚れそうな笑顔……だが……」

「なんで、そんなに花凜にご執着なんだ？あんたは十分に綺麗じゃねえか。」

「なんだ？元々のこいつってアンタを上回る美少女だったってのか？」「そんなわけあるわけじゃないでしょうが。面白いことをいう人間だと。」

「……ですが……半分正解とっておきましょうか。」

「いやいや待って待って……アタシはそんな美人じゃないから。」

花凜が否定している。

「フフフ…念には念を……まだ貴女には自覚がないようですね……さて、行きましようか。」

「この次に会うことは……もし、会う機会があるとしたら……その時が、貴女の最後でしょうね。」

部下を連れて…さっそうと滑るように出口へと向かうアフロディーテ一行……

「待て！！詳しく話してもらおう！！」

シジフォスの奴が矢を構えている。

「最後というのは『花凜』が最後ということか？それとも『アテナ様』が最後ということか？」

「もちろん、…どちらかというと『花凜』のほうですよ。」
「そうか」

つてそこで矢を下ろすなよ！！！花凜はどうでもいいのか！？

「つてめえ！！シジフォス！何考えてんだ！！」

おっ！！やっぱり単細胞馬鹿がつっこんでいったな。

「いいよカルディア……」

花凜が力なく言った。

「いや、よくない！！」

「いや、いいから。その人はサーシャちゃん至上主義だからいいの。」

「貴様！！アテナ様を『ちゃん』付けて呼ぶとは！！！！」

なんかシジフォスのキャラが崩壊してる！！

「……おい……女神が帰ったが……」

山羊座のエルシドが控えめに言った。あ……そういえばいたな……こいつ……

「おい、マニゴールド……お前、失礼な事を考えていただろ」

むっ……とした目付きでこちらを見てくる。

「んなわけねえだろ！？つか、マジその目付き怖えから、やめてくれ。」

「……………」

「だんまりかよー!!」

「うるたえるな小僧ども……!!」

師匠ツギが俺・エルシド・カルディア・シジフォス……ようは騒いでいた面々に一発喰らわせた。

「アフロディーテが帰ったではないか!!うるたえるより、今後の政策を立てた方がよいとは分らないか!!」

……「もっともなことぞ。」

こんな感じで、その日は終わった……

そしてこの日が……決定的に何かを変えた日だった。

第10話 早く帰りたい!? バトル会場は温泉?それとも火山?

Inside 童虎ー

「何者じゃ!?!」

宮の外を通過する小宇宙を感じたので声を張り上げた。

「ひい!?!」

窓から外をのぞくと、声の主はガチンコチンに固まっていた。
訓練着の上にマントを羽織って……薄紫っぽい髪を高く結っている

……

「まさかと思うが……アテ……いや……花凜といったかのお?
……どこへ行くこうとしてたんじゃ?」

ワシは花凜に尋ねた。

あはは……と力なく花凜は笑った。

「聖域探検」

「……聖域探検じゃと?」

「そう!?!十二宮以外はどうなってんのかな?って思って、よく探
検してるんだ!?!」

アテナの世話をする雑兵や女官は限られているから、こうしている
と、ただの美少年の候補生って思われるし……アタシは女だ
けどね……。」

「……ふむ……なるほどのお……」

それで、わざわざ宮の外を歩いて下におりようとしてたんじゃな?」

「う〜ん……………それもあるんだけど……………」

うつむく花凜……………

「宮を通ると、うるさいんだよな……………」

いや、デジエルとアルバフィカはいいんだよ？でもさ、カルディアやマニゴルドはうるさいし……………」

アスマタとは怖いから話したくないし……………」

シジフォスの所に至っては、あの星矢たちを苦しめた迷宮に落ちたら、死亡確定だし……………」

「セイヤ？」

「あ……………いや、こつちの話……………」

まあ、つてことで、通過したくない宮が多いから、一気に裏道から外に出ようつてわけ！！」

パンつと手を叩く花凜……………昨日のデュエルというカードバトルで
見せた顔とは大違いだ……………。

でも……………根本的には同じなのかもしれん……………」

「んじゃあ、くれぐれも内密になー！！」

「早く戻るんじゃぞー！！」

階段を駆け下りていく花凜に向かって叫ぶ。花凜は『分かってる』
とでもいうように、手を振った。

「……………童虎はどう思う？」

「な……………何奴じゃー！！」

いきなり声をかけられたので、おもわずビクっつとしてしまった。
……………が、振り返ると……………そこにいた人物は、よく知る人物だった。

ワシは肩の力を抜いた。

「…なんじゃ……牡牛座のアルデバランか……」
「なんだとはなんだ？……まあ、いきなり声をかけてスマンな。」

「二番目の宮…金牛宮を守護する巨漢…牡牛座のアルデバラン…が…
…なぜこの天秤宮に……？」

「…それで、童虎よ…どう思う？」

「どう思うとは？」

「アテナに憑依している少女の事よ。」

「ああ…花凜の事か？」

「うむ。」

腕を組むアルデバラン……

「俺は曖昧な事や難しいことはよく分からん。

あの花凜とやらが行っていた戦いも……俺からしたら何かの黒魔術
にしかみえん。」

「まあ……確かにのお……」

アルデバランの言うことも分かる気がする……

ワシ自身……怪物が突然現れたり、いつの間にか花凜が勝利してい
たり……なにがなんだか分からなかった。

「それに……はつきり言って、気持ち悪い」

「気持ち悪いじゃと？」

「ああ……俺たちの事を知ってるんだぞ？」

覗き見されているみたいで気味が悪い……」

「……………」

何も返せない……その気持ちは、童虎も抱いていた……
自分の知らないところで知らない複数人が自分のことを見ている……
……知っている……
ハッキリ言って気持ち悪い……だが……

「花凛に悪気はないと思うがお……」
「だとしても俺は好かん!!」

そついい放った時だった。セージ様からの呼び出しがかかったのは……

l i s i d e 花凛――

「あゝ硫黄臭い……ここは大涌谷かよ？」
「オオワクダニ？なんだ？」
「箱根っていう日本の町にある観光名所だよ。」
『1つ食べたら七年寿命が延びる』っていう『温泉黒卵』が名物。」

アタシはアスプロスの質問に答えながら、デフテロスを探していた。
いや……本日の護衛は双子座のアスプロスだけじゃなくて、牡牛座
のアルデバランもいる……だから、いない可能性の方が高いけど……
今、来ているところは『聖闘士の温泉地』（？）であるカノン島……
カノン島といえば、原作でペガサス座のテンマが、カノン島の鬼……
……もとい、双子座の弟のデフテロスに修行をつけてもらったところ
だ。

ここにデフテロスがいれば最高なのに……

……まだアスプロスが死んでないから、彼の影として、こっさりついてきているといいんだけどな……

「おい、小娘……」

「ん？どうしたの、アルデバラン？」

振り向かないでも答えられたのは、小宇宙をつかったからではない。ただ、今現在……『小娘』とアタシを呼ぶのは彼しかないからだ。……嫌われているんだな……

「敵は見つからないのか？」

「あのさ……」

『そう簡単にポンポン見つかるもんじゃないんやで？』

ホルスが反論する。

「……ホルスの言うとおり。簡単に見つかれば苦労しないって……」

『うう〜とは言ったが、今回は早く見つけた方がええかも知れんな……』

「なんで？」

『臭い……もうオイラ帰るわ……』

……逃げた……もういい。今回のデッキはホルスのデッキに決定

出来るだけ長時間、場に出してやる……

「花凜……そんなにつらいのか？」

「……アスプロスはつらくないの？」

「いや。むしろ心地よいくらいだ。」

「……………」

あれ？気のせいかな…？なんかアスプロスの肌がつやつやしてない？
さすが、カノン島……っていうのかな？火口付近を歩いただけで、
聖闘士共を元氣いっぱい回復させてしまうなんて……アタシみた
いな一般人には、歩いてるだけで拷問なのに……
こんな拷問なのに……聖闘士にとってみれば温泉みたいなもの……な
のかな？

アルデバランも平然としてるし……
うん……聖闘士って化け物だ！！

『花凜様……確信するのが少々遅いかと……』
「……………心を読むな、ネフティス……ん？」

気のせいだろうか？煙の向こうに誰かいたような……はっ！！
まさか！！こっそりついてきていたデフテロス！？

アタシは周囲の制しを待たずに走り出した。

「デフ……じゃなくて……アンタは……」
「そう！！ウチはデュエル・アカデミア初等科のアリス！！」
「……………なんか……うん……可哀そうだな……」

ハッキリ言っつて、聞いた覚えが全くない名前だったが、初等科とい
うからには6〜12歳の女の子なんだろうとは、予想できる……
でも……

「どっからどっ見ても、老婆だよな……」

そう、目の前にいたのは……『鬼じゃ！！鬼にくわれる！！』とテ

ソマに言っていた、推定年齢80以上の老婆だったのだ。

「うっ……そこはツツコまないで！！さあ、決闘よ！！
こう見えても、ウチは結構強いんだから！！！」

花凜・アリス LP 4000

「悪いが俺はここで見ている。
オカルトは好かん！！」

アルデバランが少し離れた場所で腕組みをしている……
アタシから言わせたら、アンタもオカルトの一種だつての！！

「アタシのターン！！アタシは……って……」

やばい！！間違えた……デッキ間違えたままだった……これって調
整中の4軍じゃん……

「どうしたの？おじけついた？」

「へ……だ……だれが……（落ち着け……落ち着け……）アタシは、モン
スターを準備表示で召喚してエンド」

「ふ……ん……おじけついでるんだ！！
ウチは、『お注射天使リリー』ちゅうしゃてんしを召喚！！」

うん……女の子らしいカードだ……

目の前に、オタクが好きそうな天使が注射器をもって現れた。

お注射天使リリー 攻 400

「さらに、魔法カード『抹殺の使徒』で、裏守備モンスターを除外するよー!!」

「くっ……マシユマロンが……」

「さらに……LPを2000払うことで、このターンだけ、リリーは攻撃力を3000UPすることができるんだよ？」

「いけえ……検診の時間だよ!!ダイレクトアタック!!!!」

リリーの注射器が一気にデカくなった。

お注射天使リリー 攻 400 3400

花凜 LP 4000 600

「おい……まずいのではないか？」

うん……まずいよ、アルデバラン。本気で不味いんだって!!これ、調整途中の未完成デッキなんだって!!

……って……そんなのセットしたままだったアタシが悪いんだけどさ……

「ウチのターンはこれでお仕舞じゃないよ？」

ウチは、これまた魔法カードと『レベル制限B地区』を発動!!

これで、レベル3以下のモンスターじゃないと攻撃できないの。ちなみに、ウチのリリーはレベル3だから、ぎりぎりセーフ!!

さらに、1枚伏せて、ターンエンドだよ？」

なんか……外見が老婆のせいか、言い方がきもい……

「アタシのターン……よし！！このターンで終わらせる！！」

戦勝の女神に憑依してよかった！！

「アタシは、ビッグバンガールを召喚！！」

真っ赤なローブを身にまとった女性の魔法使いが現れる……

ビッグバンガール 攻 1300 星 4

「さらに、『二重召喚』で、『鉄の騎士 ギアフリード』を召喚！！」

鉄の騎士ギアフリード 攻 1800 星 4

「何を考えている！？2体とも攻撃は出来ないではないか！？」

「その通りだ、アスプロス。」

仮に、攻撃できたとしても、おそらくあの罠カードは、攻撃回避カード……

なら、こうすればいい……攻撃しないで勝てば……

「攻撃しないで……ウチに勝つ？」

「そう！世の中広いんだよ、おじょうちゃん？」

魔法カードを2枚発動『土気高揚』と『おろかな埋葬』

『土気高揚』は、装備魔法カードのコントローラーは10000ライ

フポイント回復する。

また、装備魔法カードがフィールドから離れる度に、装備魔法カードのコントローラーは1000ポイントダメージを受けるカード。そして、『おろかな埋葬』は、自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送るカード。

アタシが送るのは『暗黒魔族ギルファー・デーモン』！！

さて……ギルファー・デーモンの効果発動。墓地に行ったとき、場のモンスターに装備することができ。」「

「まさか……ウチのリリーに？」

「んや。アタシのギアフリードだよ？」

まっ！！ギアフリードは、全身を鉄に覆われた騎士だから、装備カードが装備された時、その装備カードを破壊するだけけどね！」

「なら……意味ないじゃん！！」

『士気高揚』でLP回復しても、破壊されたらLP減っちゃうんだから……±0だよ？

バツかじゃないの？」

「アンタの方こそ、勉強不足だな。」

……いいか？アタシの方は、確かに±0だ。……でも、この場には『ビッグバンガール』がいる……

あの子はさ、自分のライフポイントが回復する度に、相手ライフに500ポイントダメージを与えるんだよ。

くらいなー！！」

「きゃっー！！」

ビッグバンガールが放ったファイアーボール……つまり、炎弾がもる、アリスに激突した。

アリス LP 4000 3500

「でも……ウチは……」

「分からない？」

ギアフリードの効果でギルファー・デーモンは破壊される……んで、墓地に送られたとたん、ギルファー・デーモンの効果発動。……もう一回ギアフリードに装備ってこと。つまり、無限ループ!!」

老婆…アリスのしわくちなな顔が、一気に青ざめていく……

「えげつないな……」

教皇を実の弟を使って殺そうとした、アンタに言われたくないよ……

「つぶぐ!!」

アリス LP 3500 3000 2500

アリスのどんどんLPが減っていく……

「こ…こうなったら、道連れよ!!」

アリスがなんかボタンを押した。

とたんに、グラグラッと地面が揺れる。

「なっ!?!」

「なんで、ウチがここで待っていたと思う？」

ウチは一人できるのは嫌なの。

万が一…負けたらだれか道連れっていうのが、ウチの理念。
このまま、火口に落ちて死んで!!!」

まずっ!!!

宙に身体が浮かんだ。

何も……触れるものがない……

くそ……これで終わりってあり!?

思わず目をつぶった……そして……

……?あれ?なんで?アタシ……落ちてない?

つか……この…アタシの乗っかっているモノって……

「タウラス牡牛座の聖衣!?!」

黄金に光るオブジェ状の聖衣がアタシを支えていた。

聖衣はそのままヒュ〜と元もとアタシが立っていたところ
にほど近いところまで飛んでいき……
停止した。

「あ……サンキューな!!」

なでると嬉しそうに光る聖衣。

「う…うそ……」

アリス LP 500 0

炎弾攻撃は終わった……

「ふう……ビッグバンガール……ギアフリード……ギルファー・デーモン……ありがとね。」

意外と使えるカモな……このデッキ……

「勝ったではないか!!良かったな、花凛!!!!」
「いたいたい!!!!」

肩をバシィンバシィン叩かれる……

「……態度……変わりすぎだろ……」

「俺はお前のことを認めたらからな!!」
俺の意志よりも先に、聖衣が勝手に装着解除して、とんでいったのだ。」

「……そう……」

「凄いぞ!!逆転勝利という奴か?」

アスプロスも、嬉しそうに笑っている……

セージが、この二人を護衛に付けた理由がわかった気がした。

アタシを認めさせるため……って事だろう……

ってことは、次の護衛はシジフォスとアスミタ……かな?……いやだな……

シオンと童虎がいいな〜

……それにしても……

なんで、牡牛座の聖衣が飛んできたんだ?アタシの誕生日は5月の26日……双子座だぞ?

「では、せっかくここまで来たから、ゆっくり温泉にでも使つて帰ろう。」

とって、聖衣装着のまま源泉に入っていくアスプロス……

「もう帰ろうよ……！」

「ウワハハハ……！叫ぶ元気があるならまだまだ平気だな……！」

「平気じゃない……！」

普通の空気の所に帰りたい……！」

アタシの悲痛の叫びが、カノン島に響き渡っていった。

第11話 主人公死亡フラグ!? 光と闇が交差するとき! 前編

- - s i d e ? ? ? - -

「ん?なんだこれ?」

渡されたのは、なんか文字と黒い球体の描かれた紙……つーか、カードか?

「なんでコレを俺に?」

カードをくれた綺麗な女の人を見上げる。

この辺りでは見たこともないくらい美人の女性……その女性にはっこり笑った。

「あなたにあげようと思ったからよ。」

「!!!?あ……ありがとう……」

俺は真っ赤になってうつむいてしまった。
しかし…その時だった……

「あれ……なんか……くらくらする……」

視界がどんどく闇に沈んでいく……
薄れゆく意識の中、やけに響いた声……

「ヒハハハハ!!!俺の望みを叶える機会がやってきたみたいだな!!!」

俺の意識は完全に途切れた。

l i s i d e カルディア - -

「おい！！いい加減に俺のデッキ作ってくれよ！！」

「分かっているってば！！だからちよつと黙ってて！！」

……俺が催促しているのに、花凜の奴は数字がビツシリ書かれた本とにらめっこしている。

ここは宝塀宮……

暑い夏の間、ここに来る黄金聖闘士率は倍増していた。

いつも来ている俺だけではなく、デジエルに勉強を教えてもらっている花凜のほかに、マニゴルドも顔を見せている。

「あのな〜！！そうやってさあ、いつもいつも、はぐらかしやがって！！」

命は短いんだぜ！？」

「知ってるってば……」

「だいたいさ、アルデバランに聞いたんだが、この間、また新しいデッキで戦ったらしいじゃないか！！」

「あゝアレは、数年前に作ったデッキのリメイク版だ。

こっちに来てから、持っているカードの種類も増えたからな。

……なあ、デジエル、これってどう解くんだ？」

少し離れた椅子に腰を掛けていたデジエルに手招きをする花凜。

「どれだ？」

「えつとき、この問題……S i n nとかc o sとかが混ざった式だか

ら、全部Cosにそろえようと思っただけど、「こんなこのSinをCosに変えられないんだよ。」

「ああ……………こことここで、合成の仕方が間違っているぞ？だからではないか？」

「……………あ〜〜！ほんとだ！！最悪……………またここからやり直しか……………」

……………話がまったくわかんねえ……………

「まったく……………そんなのやってる暇があつたらな……………」

「あ〜〜うるさいうるさい！！！！」

アタシは受験生なの！！少しでも勉強しないと帰った時、大変なの！！！！

一点の差で落ちることがあるんだからさ！！！！」

物凄い剣幕で怒る花凜……………まったく……………そんなに大切なのか？試験つて……………

「おいおい花凜。少しはカルディアのデッキを考えてやれよ。こっちは、うるさくて仕方ねえんだ。」

ナイス！！マニゴールド！！

「……………アタシだって考えてるよ……………でもさ……………カルディアって魔法カードとかの扱いが下手そうだし、喧嘩っ早いじゃん？」

だから、考えるの大変なんだって……………たとえば、もし……………カルディアが、アタシのホルステッキをつかったとするじゃん？……………でも、使えるのと使いこなせるのは違うだろ？」

「そんなのやってみねえと……………」

「アンタの事だから、あたりかまわず攻撃して、相手の罫で返り討ち。あえなく散っていくっていう感じになりそうじゃん。」

「……確かにな……」

「だがよ！！戦いつてのは、熱が大事なんだよ熱が！！俺だって、こついうカツコイイカード使って戦いたいんだって！！」

俺は花凜のカードを掲げた。

「あゝそいつは、アンタには使えないつて。」

そいつは、『カオス・ソルジャー - 開闢かいびやくの使者しや』。

使いこなせないよ、アンタにはな。」

デッキに戻す花凜。……ホルスが入っている一軍デッキだ。

「ん？その一軍のカードなのか？」

「一応このデッキには、闇だけでなく光もはいつてるからな……」

「？意味が……」

「花凜殿！！！」

俺がせっかく質問しようとしてたのに、シオンの奴が飛び込んできやがった。

俺は思いつきりにらんだ。

「なんのようだ？」

「じ…実はイタリアで怪物が発生しているようなんだ。」

それが……特徴を聞く限り……花凜の使っていた怪物に酷似しているらしい。」

「つまり虫野郎みたいなやつが現れたってことか。」

俺は第3話で出てきた虫野郎を思い出す。

「サイコなんたらつてやつか？」

「サイコデュエルね……じゃあアタシ行くよ。……ってかイタリアか……」

花凜が立ち上がった。……が、あまり顔色がよくない……どうしたんだ？

l l s i d e 花凜――

「……なんだよアレ……」

イタリアつて聞いて、なんとなく予想はついてたけど……そこはサ――シャの故郷であり主人公テンマや冥王……予定のアーロンの住まう町……でも……そこから町が火に包まれていた。

『つて原作うゝ！！！！どないすんねん！！！！』

「お……落ち着けホルス！！一応、まだ燃えているのは町の半分だけだ！！」

原作では、町全部が燃えてたじゃん！！きつとこれから復興するんだ！！！！」

「……お前らな……何話してんだよ……」

本日の護衛……マニゴルドが『おいおい』っという顔をしていた。アノ流れだと、てつきり護衛は童虎とシオンかと思っただが、彼らには別の任務が入っていたらしく、マニゴルドだけだった。

「……で……あれ……なんだ？」

『おそらくですが、8つ星モンスターの神獣王バルバロスではないかと……』

ネフティスが分析する。……視線の先にはライオンの頭に人間の体のモンスターが暴れていた。

「ようやく来たな……神代 花凜……」

バルバロスの足元にいた少年がこちらを向いた。……水色の長い髪をした少年……ってか……アイツ……なんか現代チックな服装してる……

「……なんでアタシの名前を？……って前にもこんな質問したことあるような……」

「……それは言えないな。」

「ま……目的はアタシの命ってこと？」

「近いな……だが、命を奪うつもりはない。俺は強い決闘者と決闘したいだけよ。」

「……ふくん……で、名前は？」

「天馬 夜行だ。」

「……テンマー!？」

思わず叫んでしまった。……いやいやそれはない……目の前にいる奴は、高校生くらいの年齢だし……それに髪の毛は水色だし……同姓同名……?の偽物が……

「まあ……いくぜ……決闘!」

「俺は神獣王バルバロスを召喚。さらにカードを2枚伏せて……」
「待て待て！！そのバルバロスってのは、星8なんだから！！？」

マニゴルドが口をはさむ。

「8つなんだから、2体リリースしねえといけねえんじや……」
「神獣王バルバロスは、攻撃力が1900になってしまっが、生贄なしで通常召喚できる。」
「あ……なるほどな……」

神獣王バルバロス 攻 1900

「俺のターンは終了だ。」
「アタシのターン。……さてと……ここは賭けにできるか……」
アタシは場にモンスターがないとき、特殊召喚！サイバードラゴン！！
いけ！！攻撃だ！！」

白っぽい竜がバルバロスを光線で焼き尽くした。

サイバードラゴン 攻 2100

夜行 LP 4000 3800

「俺は畏発動！ 『レベル・レジストウォール』！自軍のモンスター

ーが破壊されたとき、破壊されたモンスターの星と同数になるように、2体以上のモンスターを召喚する。」

しまった……こっちのモンスターを破壊するカードじゃなかったか……
……
ってことは、通常召喚で手札のブラッドボルスを召喚しとけばよかった……

夜行は、三体のモンスターを召喚した。

エンジェル01 1つ星 カシモラル 3つ星 弓神レライ
エ 4つ星

……モンスター召喚の布石……か？

三体ってことは……ギルフォード・ザ・ライトニング……かな。なら厄介だ……

アレは、三体リリースで召喚した場合、アタシの場のモンスターを全て破壊するからな……

「アタシはカードを2枚伏せてターンを終了する。」

次のターン……召喚してきたモンスターを、この破壊輪で破壊して、防御輪でアタシへのダメージを無効にしてやる……

「ヒハハハハア！！！！」

「な……何がおかしい！？」

「花凜！！その身で邪神を味わうがよい！！」

「じゃ……邪神？」

なにそれ？聞いたことない……

「ハハハ！俺のターン！！3体の従属神を神への供物とし……降臨せよ！！」

『邪神アバター』！！！！」

まるで皆既日食のようなモンスターが現れた。……なんだあれ？

邪神アバター 攻？守？

「なっ！？」

思わず声を上げてしまった……攻撃力不明……って……

こういうモンスターはろくなカードじゃない……

冷や汗を感じた……

時だった！

「苦戦しているようではないか。」

振り返って言葉を失った……目に入るのは黄金の鎧と……同じ色の髪……

「って……なんでテメエがここにいんだよ！？」

マニゴルドが叫ぶ。

そこに現れたのはアタシの最も苦手とする黄金聖闘士……乙女座の

アスミタだった。

「教皇の命よ……さて……なんだね、アレは？」

「こつちが聞きてえよ……おい！花凜！！アレなんだ！？」

「しらねえよ！！！！」

「知らないのも無理はない……お前の時代には存在しないカードだから……」

「存在……しない？」

なんだ？どういう意味……？

「ってか、攻撃力？ってどういうことだ！？」

「邪神アバターは場のモンスターフィールドの中で一番攻撃力の高いモンスターの攻撃力+1の攻撃力になる。」

「なに！？」

邪神アバター 攻 2101

アバターが漆黒のサイバードラゴンへと姿を変えた。

「ヒハハハハ！！！！邪神アバターは、場のいかなるモンスターよりも強く、永遠に君臨し続ける！！」

邪神アバター
我が神の裁きを受けるがよい！！攻撃だ！！」
「くっ！！」

花凜 LP 4000 3999

「自分がダメージを受けた時、手札から特殊召喚！！来い！トラゴエディアー！」

「無駄だ！畏発動！『神の宣告』で召喚を無効にする！！」
「く……」

為す術がない……………

「俺はエンドだ。」

「アタシのターン……………」

まずい……………万が一…ホルスを召喚したとしても、常に攻撃力はかなわない……………なら……………この魔法カード…『死者へのたむけ』で破壊して……………

「言い忘れていたが、邪神には畏・魔法は召喚されて2ターンの間は無効になる。」

よまれてたか……………なら…仕方ない……………

「アタシは、地縛霊を守備表示で召喚して、終了する。」

地縛霊 守 2000

「為す術がないみたいだな！！

俺は『天よりの宝札』を発動。互いの手札が6枚になるようにドロ―する。

さて……………俺は魔法カード『デビルズ・サンクチュアリ』を発動し、メタル・デビルトークンを召喚。

さらに同じく魔法カードの『レベルアワード』『スターレベルシャッフル』を発動。

これにより、トークンのレベルを8に変更し、場にいるモンスターの星のレベルと、同等の墓地にいるモンスターを入れ替える。
よみがえれ！！神獣王バルバロス！！！！」

げ……やば……

神獣王バルバロス 攻 3000

「さて、行け！！アバターで地縛霊を攻撃！！そしてバルバロスでダイレクトアタック！！！！」

「うわああああ！！！！」

ズバリつとやられた。

花凜 LP 3999 999

「ヒハハハハ！！！！これが今の上位決闘者の実力か！！
少し興ざめだな。」

「興ざめなのはこちらのほうだ。」

お……い……アスミタさん、何言ってるんですか？

「……君の心には迷いがあるようだね……」

『アバター (Avatar)』とは、サンスクリット語で「地上に降臨した神の化身」の意味であり、インド神話で「神仏の化身」を意味する……神にないを願っているのかね？」

へ……へえ……アバターってそんな意味があったんだ……

「聞くならば教えてやる。」

俺の望みはただ一つ……ペガサス様をよみがえらせることよ!!」

「はあ〜？あんな……人は死んだら冥界へ行つて、よみがえることなんて……」

「この邪神アバターの力なら可能なんだよ、蟹!!」

「か……蟹だとお!!」

「……押さえて押さえて……」

どういうことだ？ペガサスって……どっちのペガサス？」

この世界のペガサス座のこと？それとも……

「カードの生みの親……ペガサス・J・クロフォードのことだ!!
俺は……この邪神アバターと神殺しの魂を持つ少年を使い……ペガ
サス様を復活させるのだ!!!!」

夜行の後ろにあった、何かをかぶせた大きな布……それを思いつき
り引っ張ると……

「テンマ!？」

バーチャルシステム用の器具につながれて眠っている、LCの主人
公……テンマの姿があった。

第11話 主人公死亡フラグ!? 光と闇が交差するとき! 前編 (後書き)

……あまりに長くなりそうだったので、分けることにしました。

第12話 主人公死亡フラグ!? 光と闇が交差するとき! 後編

Inside アスミター

…どうやら、一人の子供が何かしらの器具につながれているらしいが、小宇宙をこれっぽっちも……虫より感じない。…魂を抜かれた人形のようなだ。

「んで…夜行だっけ?…なんでテンマがバーチャルシステムにつながれてるんだ?

というより、どうやってその装置を作ったの!?この時代の技術では…」

「不可能だ。」

言い切る、夜行と呼ばれた水色の髪の男…が、かすかに笑っているような気がする。

「だが……これが君の世界から持ち込まれたものだとしたら?」

「おいおい……冗談キツイって……アヌビスの馬鹿神がそんなの持ち込みを許すわけがないじゃん。」

「そうだな……アヌビスなら許さないだろうな……だが、俺はアヌビスの意志でこの世界に来たのではない。」

「……じゃあどうして……」

「まさか、アフロディーテの仕業か!？」

蟹が話に割り込む。

まったく…アレは馬鹿か?美の女神が異世界に干渉出来るわけなからう。

もっとも……神特有の力を使ったのであれば別だが……

「……まあ、半分は正解としておこう……彼女がいなければ、この計画……リバース・オブ・アバターR・Aは成り立たなかったのだから……」

「リバース・オブ・アバター？……つまり、そのアンタが使っている『邪神アバター』ってカードを使って何かやるつもりなのか？」

花凜も馬鹿かね？そうに決まっていることを何度も繰り返すなんて馬鹿かね？

「」名答。

この地上で起こる、数々の決闘のすべて……そこには、ペガサス様の作り出したカードのきらめきがあった。

このすべての魂カードのきらめきが、ペガサス様の化身となって甦る！！戦いによってきらめくカードに込められた創造主の魂ペガサスの混沌カオスは、デユエル・リング・サーバー……君の言うモーメントにより一つになり……カオステンマへと流れ込むのだ！！

魂カオスの混沌は仮の肉体を得たことにより、明確な自我を取り戻すのだ！！そして、このペガサス様のカードをトリガーとして、俺の元に降臨するのだ！！」

……なにやら難しい言葉を並べているようだな……

そんな言葉では、神にもっとも近い私は理解できたとしても、蟹や花凜は理解できんぞ？

「……えっと……？」

「ふむ……この決闘で花凜が負けた時、それまでの数々の決闘で発生した力を元にして、その小僧を器にペガサスとやらを生き返らせるといふことか。」

分からないようだったので、仕方なく簡略かして説明してやった。
どうやら、理解できたらしい……………まったく…だから愚民といえるの
は疲れる。

「まじかよ、アスミタ!？」

「私がウソを言って何になるのかね、蟹？」

「蟹っていうな!!俺にはマニゴルドっていう名前が……………」

「なんでそんなにペガサスに固執するんだ!？」

「……………ペガサス様は俺の光であつた。」

だが、ペガサス様は武藤 遊戯のせいで死んだ……………」

「何言つてんだ!？ペガサスは老衰で死んだだろ!？」

「……………お前の世界ではな。」

だが、俺の世界では殺されたのだ。……………だから俺はペガサス様の未
完成カード…邪神アバターを作り上げ、遊戯に復讐をすると同時に、
ペガサス様をよみがえらせようとした……………が、決闘の最中にアバタ
ーは破壊され…夜行の奴もアバターを破いてしまった……………

だが、カードの精霊は生きていた……………あの世界に生きる場をなくし、
忘れ去られた俺は異世界へと迷い出た……………」

「幻想郷にいったのか？」

「違う。口をはさむな。……………それでこの世界に迷い出たのだ……………
が、この世界にはデュエルモンスターズ自体が存在していなかった……………」

……………
そんな時だった……………とある女神が俺に力を与えてくれた……………」

『ペガサス座の魂を持つ少年……………テンマの肉体を器に……………
これから来る100人の決闘者の決闘で生み出されるカードのきら
めきを糧にすれば、ペガサスを蘇らせることが出来る』…とな。……………」

夜行とやらは口を閉じた。……………まったく……………話が長いぞ。

「……………待て…じゃあ……………アンタは何者なんだ?」

「俺は…天馬 夜行が邪神アバターに力を注ぐあまり生まれた、夜の闇の人格とでもいっておこうか……
さて、話はおしまいだ。さあ、もっとカードの輝きを俺に見せる！
！」

……どうやら試合再開のようだが、花凜のLPは残り999……さて…どうする？

l i s i d e 花凜――

……話が長かったな……
さっきまで、夜の闇に覆われてたのに、いつまにか向こうの方が明るくなる時間帯じゃん！

うわ……不味いよこれ……いや、相手はゲーム参加者じゃないから、アタシが負けても記憶を失うことはない……でも、肝心の主人公・テンマが消えるってやばくない？
だったら、LCの話がなりたたなくなるじゃん！？冥王がこの世界を支配して、めでたしめでたし……ってなるじゃん！……いや……アタシはイレギュラーだから……聖戦始まる前には帰るから、アタシ自身には問題ないんだけど……
でも、後味悪すぎだろ……！！

……さて……どうしよつか？
って言っても、まだ魔法・罫が使えないから……ここは……

「ターン・エンド」

「ヤバイ……ガラ空きだ……！！」

「うるさい。静かにしたまえ」

「ヒハハハハ！！終わりだな！！」

「二体でダイレクトアタック！！！！！！」

「二体のモンスターが襲い掛かってくる！」

「って、アタシが負けるわけないじゃん！！」

「手札から『ハネワタ』を捨てることで、このターン受けるダメージを0にする！！」

「二体の強暴なモンスターの盾となって散っていったハネワタ……」

「ふん……まあいい。ターンエンドだ。」

「よし……ここでいいカードを引かないと……負ける！！」

「アタシのターン！！！！」

「引いたカード……は……」

「来た！！！！墓地から光属性のハネワタと、闇族のトラゴエディアを除外して、」

「降臨せよ！！『カオス・ソルジャー - 開闢かいびやくの使者 - 』！！！！！！」

「夜の闇を朝日が照らすように……光と闇の狭間から、カオス・ソルジャーが降臨した。」

カオス・ソルジャー 開闢の使者 攻 3000

「効果発動！！1ターンに1度、相手モンスターを除外する。

これはもちろん神にも有効だろ？」

「なっ!?!」

「邪神アバターを除外!!!」

漆黒の神が、異次元へ吸い込まれていく……

「だが……知っているぞ。」

「ああ、この効果を使ったターンは、攻撃できない……でもさ、魔法カード『運命の火時計』!!こいつで1ターン進めることができる!!!」

火時計が回る……まあ……だからと言って、何か周囲に変化あるわけじゃないんだけど……

案の定、マニゴルドには理解できないようだ。

「どっついうことだ？」

「つまりさ、相手のターンを一回スキップさせたってこと。だから、もう開闢の使者は攻撃できるって事よ。」

「……だが、俺のLPは3800。それにまだ、バルバロスがいる。このターンでは……」

「アンタさあ……」

「馬鹿かね？花凜は『このターンで勝つ』と宣言したのだ。他にも効果があるに違いないに決まっておろう?」

くそ……アスミタめ……いいところ持っていきやがって……

「ゴホン!!!!!!」

さて、バトルといきますか。開闢の使者でバルバロスを攻撃!!!」

「まさか！！相打ち……」

「んなわけあるかい！！」

光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時に『オネスト』を手札から墓地へ送る事で、

エンドフェイズ時までそのモンスターの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする！！」

カオス・ソルジャー開闢の使者	攻	3000	6000
----------------	---	------	------

「これで、攻撃力が上回ったな！！行け！！開闢双破斬！！」

「うわぁー！！」

夜行	LP	3800	800
----	----	------	-----

「形勢逆転……だな。終わりだ。……開闢の使者は相手モンスターを破壊した場合、もう一度攻撃が可能なんだよ！！」

行けカオス・ソルジャー開闢の使者！『時空突刃・開闢双破斬』！

「！！」

開闢の使者は無言で夜行を切りつけた。

「う……うわぁぁぁー！！」

夜行	LP	800	0
----	----	-----	---

夜行は散り散りに……まるで塵芥のように消えていく……邪神のカードと共に……

「テンマー!!!」

アタシは駆け寄った……どうやら息はあるみたい……だな。

「おい、マニゴールド!この機械破壊してくれる?」

「分かってるよ。」

ギシン!バシィ!ズガッ!!

みるみる間に壊されていく……あっ!!もちろん、テンマを救出してからだけだな。

「んじゃあ、こいつはここに置いておけば、どうにかなるだろ。」

「おい、いいのか?」

「平気。こいつタフだし。……それにさ、目を覚ます前に帰りたいんだよ。」

こいつと会うわけにはいかない……原作に介入して話を潰してしま
うかもしれないし……

「では、帰るとしよう。」

「お前が仕切るなよ……」

もうすっかり日が昇っている……いままで火事が酷かったから一般人が来なかったが、収まりつつあるので、ここにもやってくるはずだ。

事情説明するのはめんどくさい……

「ふあ〜……考えてみれば、徹夜だったってことか。」

「そういえば、デジェルから出された宿題、今日までじゃなかったか？」

「へ…変なこと思い出させるな…!!」

今日は帰ったら寝る!!絶対に勉強なんて…数学なんて今日はやるもんか!!」

アタシの…たぶん叶うことが困難な決意が森に響き渡った。

…でも、せつかくここまで来たんだから、アロンを一目見ておきたかったな…

第12話 主人公死亡フラグ!? 光と闇が交差するとき! 後編 (後書き)

9/6一部変更しました。

第13話 立ちふさがるは巨人！？ 蠍の初陣はタッグデュエル！

Inside 花凜ー

「うわぁ……凄いなぁ……」

息を吸うと全身に大自然の空気がしみこんでいく……気がする。

そう……目の前一面に広がるのは滝……

アタシは今、童虎が234年間座り続ける…予定の場所に立っていた。…つまり、五老峰の廬山の大滝の前にいる。

ゴォォーっと音を立てながら、落ちる水が白い霧になって周囲にモヤを作っているの、そこが見えない…。

よくまあ……200年以上も、あの滝とにらめっこ出来てたよな……絶対に途中でサボった日もあったはずだよ。

そうじゃなかったら、どうやって春麗を見つけれただ？だって、たかが赤子を捨てに来るだけで、わざわざこんな何時間も言葉では言い表せない険しい山道…というか獣道を通ってやってくる奴がどこにいるんだ？

『シオンの隠し子だったんとちゃうか？』

「いや…それは……ないだろ。シオンだって童虎みたいな妖怪ジジイ…とまではいかなかったとしても、ジジイだったんだぞ？童虎が下界で拾ってきたと考えるのがベストだ。」

『あんな小娘みたいな赤子を拾うなんて、ありえへんやろ……』

だって、祈りの力で黄泉比良坂にいるデスマスクの動きを止めることができる能力の持ち主なんやで？そない簡単に出来ることじゃあらへん！！絶対に親は黄金クラスの聖闘士や！！』

「……確かにな……祈りで何でもどうこうなるなら……」

「あゝこんな任務さつさと終わらせるよな……!」

「……分かってるってば。」

向こうから不機嫌MAXのカルディアが歩いてきた。その後ろからは童虎がいた……

……あゝめんどくさい……

「分かってるか？俺ははやく……」

「分かってるって!!聞き飽きた!!決闘したいんでしょ!?!
終わったらするから、静かにしてくれ!!」

はあゝゝうるさいからデッキを本当に作ったら作つたでこれだからな……アタシは今はいあまり決闘したくないんだけど……受験生だし。

「じゃが、花凜が帰ったら、そのデッキはどうするんじゃ?」

童虎が正論を言う。

「このカードゲームが出来るのは花凜が帰るまでの短い間だってことだろ?」

そんなこと分かってる。だからやってみたいんじゃないか!未来のゲームなんて、そうそう楽しめるもんじゃないぜ?」

……まあ言ってるけどな……

「おい、お前アテナだろ?」

「くっくく……ようやくお出ましかい。」

カルディア達の後ろから二人組の辮髪男べんぱつが現れた……
決闘盤をつけてるから…敵なんだろうけど………なんで二人ともつけてるんだ？

「復活できるのは1人だけだろ？なんでタッグ組んでるんだ？」

「確かにのお………」

「いずれ仲間割れするぜ？」

「馬鹿め！！私たちは一心同体の双子なのだ！！」

……とはいっても、今の姿じゃ説得ないけどね。だって両方とも辮髪だけど、一人は髭が濃くて浅黒けど、もう一人はすっきりとした感じの色白美青年………正反対じゃん！！

「おい、お主は今、正反対だと思っただろう！？」

「いや…だって事実じゃん………」

「仕方なかるう。憑依する人はバラバラなんだからな。」

そう…私たちは一心同体の双子………死ぬ時も同じだった………」

「そしてアヌビスに会い、『死ぬときいっしょだったのだから、生き返る時も一緒にしてほしい！』と涙ながらに頼んだのだ！！」

「………そしたら叶えてくれたって事が………」

なんていうか………恋人同士？心中とかする恋人同士ですか？

「………ってことでタッグデュエルしてるってことか………よし、相手になつてやる！2対1だがな！！」

アタシが構える………」

「待て！！2対2だ！！」

カルディアが割り込んできた。

「いやいや……アンタさ、ムリだろ……そのデッキ渡したのだって、昨日の夕方だぞ？まだ一回も戦ってないんだろ？」

「だが、ずっとお前の決闘を見てきたぞ？ルールは分かる。」

「ルール分かってても、カードが分からないと意味ないだろ……！それにアンタには決闘盤がない……」

その時、空の一点がピカッソッと光ったと思うと、決闘盤が落ちてきた。

「……アヌビスの仕業か？」

「よっしゃ……これで俺も出来るぜ……！」

もういい……！勝手にしやがれ……！！

――side 童虎――

「「「決闘」」」

さてさて、決闘が始まったようじゃな。

花凜・カルディア 浅黒（兄）・色白（弟） LP4000

今回はタッグデュエルということなので、1つの場やLPを二人で共有するルールを使っているようじゃの。……とはいっても、ワシにはよく分からないが……

「順番は…ええつと……」

「私　　聖闘士　　兄者　　アテナもどき」でいいのでは
ないか？」

「アテナもどきっていうな!!!」

色白の方に怒鳴りかかる花凜…元気がいいことだのお。

「では、私のターンからだな。」

「聞けよ!!!人の話!!!」

「私はカードを1枚伏せてから、『手札抹殺』を発動する。」

いきなり手札を入れ替えるのか？何を企んでおる？

「私のターンは終了だ」

「よっしゃ!!!俺のターン!!!」

俺は『疾風超人ジョー』を召喚するぜ!」

…ん？妙じゃのお……セットしたのに何も起きない……

「馬鹿!!!そいつは星の数が6!!!リリースが必要なモンスターだ
から、召喚は無効なんだって!!!」

「ん？ああ!!!本当だ!!!」

………大丈夫…なののお？

「くう………仕方ねえ。ターンエンドだ。」

何もしないで終わりやがった!!!

「ふん。私のターン。私は弟が伏せてあった魔法カードを発動。」

魂の解放』。これで墓地のカードを5枚除外することができるのだ。」

そう言いながら、自分と弟のカードを合わせて5枚除外した。
……何か企んでいるのだな。

「私はモンスターを召喚し、魔法カード『二重召喚』で、召喚したモンスターを生贄に捧げ、『迷宮のラビリンスウォール』を守備表示で召喚する。」

守りを固めるつもり…じゃの。相手の場いっぱいには迷宮が広がっていく……

迷宮のラビリンスウォール 攻 0 守 3000

「3000って…ホルスの攻撃力と一緒にじゃねえか!!」

確かにの……アレを超えるモンスターは…入っているのか？

「私はカードを2枚伏せて、ターンエンド。」

「アタシのター……」

「畏発動!『払い落とし』の効果でドロしたカードを墓地に送れ」

「っち……仕方ないな……じゃあアタシはカードを1枚伏せてターンエンドだ。」

おいおい!!本当に大丈夫なのか!?

「ふふふ……手も足も出ないとお見受けいたす。」

私のターン。私は畏れ動『異次元からの帰還』！LPを半分にして、除外してあったモンスターを召喚できるのだ。」

双子 LP 4000 2000

「来い！『風魔神ヒューガ』『水魔神スーガ』『雷魔神サンガ』！
！！」

巨大な三体のモンスターが現れた。

「その三体ってことは……まさか……」
「そう……私達一族に伝わる最強のモンスターを降臨する！
三体の魔神をリリースし、降臨せよ！『ゲート・ガーディアン』！
！！」

三体の魔神が合体し……見上げるくらい大きい巨人がワシらの前に現れた。

ゲート・ガーディアン 攻 3750

「強っ！！」

「不味い！！二人ともガラ空きじゃ！！」

「行け。ダイレクトアタック！」

「へっ！！させるかよ！！俺は墓地の『ネクロ……』えっと……」

「『ネクロガードナー』を除外して、攻撃を無効にするんだろ？」

「そう！それだ！！それをやる。」

……花凜に助け船を出してもらったようじゃな……まあ、これでのターンは凌げたの。

「ふん…カードを1枚伏せてターンエンド。」

「アタシの……」

「畏発動！』叩き落とし』で、ドロウしたカードを捨ててもらおう。」

なるほど……花凜にカードを引かせない気じゃの……不味いぞ……

「……なら、アタシはカードをもう1枚伏せてターンエンド。」

「為す術なしか。では、私のターン。」

行け！ゲート・ガーディアンでダイレクトアタック！！」

「くっ……！！」

もろ喰らってしまったようじゃ。伏せカードはダミーだったのか？

花凜・カルディア LP 4000 250

「おい！！待てよ！！さっきから思ってたんだけどよ……なんで自分以外のカードも使ってたんだよ！」

「……おぬし……これはタッグデュエルだぞ？」

仲間のカードを使ってもいいに決まっておろつ。」

「……まさか……カルディア知らなかったのか？」

肩を落とす花凜……

「す…すまん。じゃあ次は俺のターンってことか。」

花凜の伏せカードを確認してから、ドロローをするカルディア。

「よつしや！！燃えてきたぜ！！

魔法カード、『手札抹殺』！！

んで、俺は墓地の風属性モンスター『女忍者ヤエ』と闇属性モンスター『人造人間サイコシヨツカー』を除外することで、召喚するぜ！『ダーク・シムルグ』！！！！」

廬山の大滝をバツグに、漆黒の鳥がフィールド上に舞い降りてくる

……

「さらに、花凜の伏せカード『死者蘇生』でサイコシヨツカーを復活させるぜ！！」

腕組みをしたサイコシヨツカーが現れた。

ダーク・シムルグ 攻 2700

人造人間サイコシヨツカー 攻 2400

「そんで俺は、ターンエンド」

「ふん…せっかく上級を召喚したのは褒めてやるが…」

「私たちのゲート・ガーディアンには及ばん！！行け！！攻撃だ！

「馬鹿だな。アタシは速攻魔法発動!! 『コマンド・サイレンサー』
相手のバトルフェイズを強制終了させ、自分はカードを1枚ドロ
ーすることができる。」

上手いのお……これで攻撃を防げた上に、花凛はようやく新しいカ
ードを引けたみたいじゃ。

「……まあいい。私はカードを1枚伏せて……」
「何考えてんだ？」

ダーク・シムルグの効果で、相手はこのカードが存在する限り、場
にカードをセットできないんだぜ？」

「なっ……まあ、お前たちにこのゲート・ガーディアンが倒される
わけがない……ターンエンドだ。」

「なあ、アタシのターンだな。
アタシは『死者へのたむけ』を発動。手札からカードを1枚捨てる
ことで、相手モンスターを破壊する。」

「ゲート・ガーディアン!!!!!!」

……あっけなく散ったのお……
じゃが……まだ壁モンスターがおる……

「さらに装備魔法『デーモンの斧』をサイコショッカーに装備する。」

「よし!これでラビリンスウォールの攻撃力を上回ったのお!!」

人造人間サイコショッカー	攻	2400	3400
--------------	---	------	------

「まずは、サイコショッカーでラビリンスウォールを攻撃だ!!」
「ば……ばかな……」

「よっしゃあ！…これで奴らの場はから空きだぜ！…！」

カルディアがガッツポーズをとる。花凛も口元が笑っていた。

「さてと……じゃあ使っぞ……ダーク・シムルグでダイレクトアタックー！」

「ぐわああああー！」

双子 LP 2000 0

「ふう……終わったな。」

「よし！初デユエルは白星だな！」

「まったく……一時はどうなることかと思ったぞ……」

内心、ひやひやするバトルだったわい……

「ところで、カルディアのデッキになんでサイコショットカードやダーク・シムルグといったモンスターを入れたんじゃ？」

「ああ……だってこいつさあ、見境なしに攻撃しそうじゃん？だから、相手の手を自然と封じながら攻撃できるデッキ構築にしたんだ。」

じわじわと相手の逃げ道をふさいで、痛めつけるデッキ……ってかんじかな？

幸いにもダーク・シムルグは持つてるカードだったし、サイコショットカードはオツチャンのカードだったから手に入れられたしな。

他にも……今回は出来なかったけど、一撃必殺できるカードも入ってるし。」

「マジで！？どれだよ？」

カルディアが身を乗り出す。

「……それよりさ、腹減ったんだけど……童虎、なんかいい店知らない？」

「ここ中国でしょ？おいしい店あるでしょ？」

「チュウゴク？どこじゃそこ？」

「……あ………そつか……この時代はまだ『清』だっけ……まあいや。世界三大料理には変わりないし。」

「？よく分からないが……まあ、とりあえず美味しい店は知ってるぞ？」

「よし！俺の初勝利記念で一杯行くか！！」

「待てよ！勝ったのはアタシの魔法カードのおかげだろ！！」

「でも俺の勝利には変わりないぜ！」

……賑やかじゃのお………年上には思えんの……

最後にもう一度、故郷の風景を眺める

……いつまで見ている飽きない風景……

「おい！早くいこうぜ！！」

「アタシ腹がペコペコで背中と腹がくつつきそうだ。」

催促する二人の声。ワシは新鮮な空気を思いっきり吸うと、二人に続いて山を下りた。

……聖闘士になってから初めて訪れた故郷……

もう、2度と足を踏み入れることはないかもしれない……という寂しい思いを胸に抱いて……

第14話 デッキの選択ミス!? 氷の龍と鳳凰神!

Inside エルシードー

「ハックション!!!」

盛大なくしゃみの後、ズズーッと花凜が鼻をすする。

「大丈夫か?」

「これが大丈夫に見えたら、あんたデジタルの目は節穴だな。」

……花凜は一応分厚いコートを着ているが、ガクガク震えていた。

「そんなに寒いのか?」

「あのお……聖闘士と一般人を一緒にすんなよな……」

……まあ、それもそうだな。このシベリアという極寒の地で成長したデジタルは全く問題ないのかもしれないが……聖闘士として寒さには多少の耐性がある上に、黄金聖衣を纏っている俺でも、肌寒さを感じるのだ。いくら身体がアテナだからとはいえ、つい先日まで一般人だった花凜にはきついモノがあるのだろう。

「……動かないと死ぬ……動かないと死ぬ……眠ったらだめ……」

……なにやら蒼を通り越して白い顔でブツブツ言っているが、大丈夫だろうか?

その時、デジタルが動きを止めた。

「ちょっと！！動かないとつらいんだって！！早く先に……………」

花凜が抗議しようとしたが……………花凜も動きを止めた。

俺たちの目の前には……………正確には頭上といったほうがいいのかもしれない。

うつすらとした月明かりに照らされた雲のような帯状の光から、光が細かな線状に降ってきた。

赤から緑までカラフルで降る光がドレープを形作り、常に光が生まれて揺らめくように変化している……………。

まるで龍を思わせるかのように揺らめくそれは……………オーロラだった。

「まさか……………この目で見る事が出来るなんて……………」

「花凜はオーロラを知っていたのか？日本では見ることが出来ぬと聞いたが……………」

「当たり前じゃん！！ってか、日本でも江戸時代には江戸で見えたこともあるんだって！！」

それに、オーロラは物理にも出てくるし！！

いい？太陽に端を発するプラズマ粒子の流れが地球磁場と相互作用し、複雑な浸入過程を経て地球磁気圏内の夜側に広がる『プラズマシート』と呼ばれる領域にたまるんだって。……………んで、プラズマシート中のプラズマ粒子が地球大気に向かって高速で降下し、大気中の粒子と衝突すると、大気粒子が一旦励起状態になり、それが元の状態に戻るときに発光するのが、オーロラの光。……………まあ、仕組みは蛍光灯みたいなノリ……………って聞いている？」

……………正直、専門用語みたいなのがでてきてよく分からん……………

「…………でもさ、そんな固い説明があると、頭の中ごっちゃごちゃになるけどさ…………何も考えないで見ると…………時間を忘れそうだよ…………」

『忘れたら凍死やで?』

「そこ!いいとこなんだからツツコむな!」

ギャンギャン言い合う花凜とホルス…………あのままだと、当分、凍死の危険性はなさそうだな…………

l i s i d e 花凜――

「決闘!」

花凜 ブルーウォリアー 氷戦士 LP4000

今、アタシはブルーグラードに来ている。せっかくここまで来たんだし、あのカルディアがドン引きしてた図書館に行きたい!……………って思ってたんだけど、ついてそうそう敵を見つけたので、先に決闘することにしたのだった。

「アタシのターン!アタシはカードを2枚伏せてブラッドウォルスを召喚!カードを1枚伏せて……………で、ターンエンド」

ブラッドヴォルス

4つ星 攻 1900 守 1200

「うわ……本当にモンスターが実体化してる……」

そうやって驚いてるのは、この領主の息子で後の海龍シードラゴンのユニティだ。

「ん？なんでまだ海龍じゃないって分かるかって？……それはさっき、ユニティの父親の……えっと……なんて名前だったっけ……まあ、いいや。髭のおじいさんに会ったから。だって、あのおじいさんはユニティが海龍になった日に殺されているんだもん！」

「僕のターン。僕は、レスキューキャットを召喚します。」

かわいらしいネコが現れた。

「さらに、レスキューキャットの効果発動します！」

デッキからレベル3以下の獣族モンスターを2体まで特殊召喚します。」

レスキューキャット 四つ星 攻 300

デス・ウォンバット 三ツ星 攻 1600

ラッコアラ 二つ星 攻 1200

なるほど……獣族デッキだな……

一見、攻撃力の低い烏合の衆みただけど……たしかラッコアラの効果は……ラッコアラ以外の獣族モンスターが自分フィールド上に表側表示で存在する場合、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力をエンドフェイズ時まで1000ポイントアップする……だったよな？

そうしたらアタシのブラッド・ヴォルスの攻撃力を上回る……。

まあ、どってことないかな？

罨カードとして『聖なるバリアーミラーフォース』を伏せてあるから……

攻撃した途端、相手モンスターすべて破壊できるし……

「そして僕はラッコアラをレスキューキャットをチューニングさせます……！」

………はい？

「行きます……！シンクロ召喚……！レベル6のモンスター……」

氷結界の龍 ブリューナク『……！』

「………ええっ……！……！？」

氷の竜が場に降り立った。

氷結界の竜ブリューナク 攻 2300

「ブリューナクの効果が発動します。
このカードの効果は、手札を捨てた数だけ、相手のカードを手札に戻すことができます。」

僕は手札から、『深淵の暗殺者』を捨てることで、ブラッド・ヴォルスに戻させてもらいます。」

「くっ！」

…… やっかいなカード……

「だが、相手の手札は4枚…ワンターンに引けるカードは通常1枚…… いずれは、その効果も使えなくなるはずだ。」

エルシドがぼそり…といった。

「そうですね……ですが、僕のループは完成しました。」

深淵の暗殺者は、このカードが手札から墓地へ送られた時、自分の墓地に存在するリバーズ効果モンスター1体を手札に戻す効果があるんです。」

「……だが、墓地にいるのは……ラッコアラはリバーズ効果を持っていない……」

「まさか……」

デジエルが顔をしかめた。

「実は、深淵の暗殺者は、相手のカード破壊するという、リバーズ効果を持ってるんです。

つまり、一回捨てても、手札に戻ってこれるんです。

したがって、僕は手札に戻ってきたこのカードを再び墓地に送ることとで、ブリユーナクの効果発動します！

その伏せカードを手札に戻してください。」

「……マジか……」

ヤバい……これで相手の手札がなくなって、効果を発動させないようになってしまう作戦は断念じゃん……

「いきますー！デス・ウォンデットとブリユーナクでダイレクトアタックです。」

「っち……」

花凜 LP 4000 100

「……こうなったら、ホルスの速攻召喚か……開闢の使者しか手は

ないな……」

「いや……それムリ……」

だつてさ……だつてさ……これ……二軍のネフティス・ユベルデ
ツキだもん……

これは、ユベルが場に残らないといけないんだよ？レベル10のユ
ベルが……！

こいつはフツーに召喚するのめんどくさいから、キラートマトに頼
るしかないんだけど……キラートマトを召喚して、ターンエンド
した途端に、ブリューナクの力で、手札に逆戻り……

このドロロー……冗談なしで、すべてがかかっている……

「ドロロー……！……よし……！」

なんとか行けるかも……！！

「アタシは『ダンディライオン』を召喚！さらに魔法カード発動『
ブラックホール』……！」

これで、全てのモンスターを破壊する……！」

ブリューナクも……ダンディライオンも……デス・ウォンデットも……
すべてが吸い込まれていく。

「そしてダンディライオンの効果で、綿毛トークンを2体を特殊召
喚する。

さらに、魔法カード『運命の火時計』……こいつで1ターン進める
ことができる……！」

…これで通常召喚が可能になったな！……アタシは『手札抹殺』を
発動する！

……墓地にいる通常モンスターが三枚のみの時……特殊召喚！『紅蓮魔闘士』！！！！」

紅蓮魔闘士 攻 2100

「さらに、綿毛トークンを2体生贄に捧げ、来い！『ネフティスの鳳凰神』！！！！」
『久しぶりの出番ですね！』

心なしか、嬉しそうに現れるネフティス……

ネフティスの鳳凰神 攻 2400

「さて……まずは紅蓮魔闘士でダイレクトアタック！！」
「うっ！！！！」

打つ手がないらしく、急な形勢逆転で、氷戦士は啞然としている。

「……アンタの敗因は、ブリューナクに頼って、魔法も罫も仕掛け
なかったことだな。
これで終わりだ！！ネフティスでダイレクトアタック！『炎帝』！！」

『それって……火拳のースさんの技じゃないですか！！！！』

といいながら、太陽のような巨大な火の玉をとばした。

「うわあああ！！！」

氷戦士 L P O

「ふう……終わった……」

「凄いです！！凄いモノを見せてもらいました！！」

ユニティが握手を求めてきた。

「僕にも……僕たちにも、このような力があつたのなら……少しはブルーグレードが再興するかもしれないのに……」

うう……暗いよ……

「それよりさあ、図書館連れて行ってくれない？せつかくここに来たんだから行かないと損だよ！！」

「……俺は早く聖域に帰りたいのだが……」

本にまったく興味のないエルシドがつぶやく……が、

「そうか、勉強熱心ですね、花凛さん。こっちはですよ。」

ユニティが笑顔で案内してくれる。

が、後悔することになった。

……一応、図書館にはついた……確かに本がたくさんあった。

でも、読めない！！英語は辛うじて行けるが、現代から250年前くらいの文章……つまり古文。早々に飽きた。……いや……もしかしたら、日本語で書かれたものもあるかもしれないけど、ここから探すのは……

「そつだ、ユニティ！！アレはどうなったんだ？」

「ああ、アレはね……」

「本当か？実は私も……」

「デジエルもかい？やはりアレはああなっところなるから……」

うん……なにやら向こうで楽しそうに話している二人組がいるぞ？

「……当分帰れないな……」

「……ああ……」

アタシとエルシドは、こっそり……ため息をついた。

ちなみに……聖域に帰れたのは、2日後の事だった……。

第十五話 早く終わらせよう！ 右を向いても左を向いても麻呂眉

- side レグルス -

「なあ、もつと早く歩けないのか？」

俺は同行者に話しかけた。その人は紫の髪をもっている俺と同じくらしい女の子。

『目的地が一緒だから一緒に行け』と師匠シジフオスに言われて、ここまで一緒に来たんだけど……

「あのさ……レグルスは怖くないの？」

「なにが？」

「……下……」

「？」

「……はあ……あなたは、この手すりもない今にも崩れそうな一本道……『万が一落ちたら串刺し』って考えないのか！？」

「そんなの落ちなちゃいだけじゃん。」

「……もついい……」

なにが『もついい』のかな？よく分からないや。

「おう、来たみたいだな。」

向こうからジジイがやってきた。

「まさか……ハクレイ……様！？」

「ほう……やはりご存知でしたか……花凜殿の事も弟からお聞きになっていますぞ。」

ぜひとも『デュエル』とやらを見てみたいものだ。」

「あはは……ありがとうございます。」

アタシもジャミールって一度来てみたかったんですよ。」

「光栄ですな。……それでお前が、もうすぐ獅子座の黄金聖闘士に就任するレグルスだな。」

「おう！……で、あんた誰？」

「……知らなかったの？ってか、アンタは、この人に挨拶するために来たんじゃないの？」

「あ〜……じゃあアンタが教皇の兄さんか？」

「いかにも。いや……頼むから立ち話はもうやめないか？……そうだな。」

ん？なんで花凜は青い顔してんだ？そんなに橋の上が嫌なのかな……

「そういえば、『デュエル』のほかにも剣術をたしなむと聞いているが……どうかな？儂と手合せしてみないか？」

「ま……マジですか！？」

剣術？……こいつ……剣なんてつかえるの？武人なのか武人じゃないのか……よく分からない人だな……

- side シオン -

「はあっ！……」

「甘い！……」

スパーン

「とりゃあああ！……」

「早さが足りん!!」

ドカツ!!

……はあ……ハクレイ 師匠様…… 明日は筋肉痛になられますよ?

先程から花凜に『剣術の指南』ということをしている。私には剣術なんてよく分からない。が、小宇宙なしの世界なら、花凜の腕はそこそこののではないだろうか?……なんとなく感じるだけなので定かではないが……

「あの……シオン様?」

「ん?……ユズリハか」

振り返るとそこにいたのは、この女戦士……ユズリハだった。

「あの……カリンという人物に会いたいと言っているものが来ているのですが……」

……花凜を呼ぶもの……ということとは、『決闘』関係だろうか。

「大丈夫だ。通せ」

ユズリハはテレポーションで瞬時にその場から消えた。……また、決闘デュエルというものを見ることになるとはな……

Inside 花凜

「決闘!!」

花凜・麻呂眉の少年 LP4000

うん! やっぱリジャミールだから敵も麻呂眉だったよ……あれって、
ここの習慣なのか? 一族郎党、未来も過去も麻呂眉だらけだし……

「吾輩のターン、吾輩は『手札抹殺』を発動する。」

定番カードが来たな。なんか、この世界じゃ使う奴多いな……まあ、
アタシも使ってるけどな。

「さらに『天使の施し』で三枚ドロし、二枚を墓地に送る……」

……なるほどな……墓地を肥やしてるって事か……

「さらに吾輩は『デビルズ・サンクチュアリ』を発動!

『メタルデビル・トークン』を自分のフィールド上に1体特殊召喚
する。

そして…それをリリースすることにより、召喚! 来い! 『ライトロ
ード・ドラゴン グラゴニス』!」

まるで天馬…といっても動物だよ? 人じゃなくて、空想上の幻獣の
方のペガサスだよ!?

それに似た生き物が現れた。

ライトロード・ドラゴン・グラゴニス 攻 2000

ってことは……ライトロードデッキか……厄介だな。

「効果発動！このカードの攻撃力は墓地のライトロードと名のつくモンスター一体につき300ポイントUPする！墓地にいるのは4枚。よって1200UP!!」

ライトロード・ドラゴン・グラゴニス 攻 2000 3200

うわぁ…いきなりかよ……

「残念だが、先行は攻撃が出来ない。ターンエンドと同時に、ライトロード・ドラゴン・グラゴニスの効果でデッキからカードを三枚墓地に送り、その中にライトロードと名のつくモンスターがいたのでさらに攻撃力をあげるのだ!!」

ライトロード・ドラゴン・グラゴニス 攻 3200 3500

「まずい!!次のターン中に3500以上を上回るモンスターまたは破壊カードを引かないと……」

「心配するなよな、シオン。」

アタシは早く終わらせて、早くハクレイとの修行に戻らないといけないの。

だから…今日のデッキは……コレだ。

アタシのターン!!」

引いたカードを見てアタシは少し笑ってしまった。

「『墮天使ナース・レフィキュル』を召喚！」

現れたのは白い悪魔のような…天使…だからって、有名な『管理局の白い悪魔』じゃないよ！
あれよりもずっと人相悪いし……

墮天使ナース・レフィキュル 攻 1400

「アタシは魔法カード『成金ゴブリン』を発動。これでアタシはカードをドロ―し、アンタは1000ポイントだけLPをUPさせる。」
「何をしてるんだ！？敵に塩を送るようなことをして……」
「うるたえるな、シオンよ。策がなければそのような行動には出ぬと思うがな。」

ハクレイの言うとおり！！このデッキには無駄がない最強のデッキ……まあ、頼りすぎたくはないけどな。

「レフィキュルの効果は、相手のライフポイントが回復する効果は、相手のライフポイントにダメージを与える効果になる。
つまりさ、アンタは残り3000ってこと。」

「うっ……だが、それで……」
「終わりのわけないだろ！？」

さらにアタシは『ギフトカード』を発動する。これでアンタは3000LP回復するんだけど……
ここではレフィキュルがいるから……どうなるか、分かってるよな

いきなり網が降ってきたのだ!!あれ……この展開って……

「いいわよ。そのまま連れてきなさい。」

「了解」

「了解って言うな!!下ろしやがれ!!」

しかし、アタシの主張むなしく、アタシを捕えた網を抱えて…空へ連れて行かれてしまった。

「ちよっと、下がってて」

「うん………って……レグルス!?!」

同じ網の中に、何故かレグルスがいた。

「俺は助けても助けなくてもよかったんだけど、ハクレイの爺さんが、俺の首根っこつかんで

『お前の実力を見せてみる!!』とかいって、俺を捕まる寸前の花凜の所まで投げ飛ばしたんだ。」

「………そうですか………」

「まあいくぜ……『ライトニング・ボルト』!!!!」

渾身の力を込めた直球攻撃をするレグルス………だったが、網には傷一つない。

「逃げられない………ってことか。」

あはは………やっぱり身体がアテナだから、誘拐されやすいのかな……

第16話 新たな疑惑？ 女神との再会！（前書き）

今回はデュエルシーンがありません。

今回は、ちゃんとデュエルシーンがあります！！

第16話 新たな疑惑？ 女神との再会！

Inside シオン

「ハクレイ様！！どうするんですか！？花凜が……」
「分かっておる。」

「しかし…対策を考えた方が…花凜は美闘士にさらわれたのですよ！？つまりアフロディーテの手先にです。」

彼女に命を狙われているのに、見捨てるなど……その上、彼女の体はアテナなのですよ！万が一……」

「うるたえるな、小僧！！！！！」

気が付いたときには強い衝撃と共に、私はふつとばされていた。……
……まったく……あの歳でよくもあれほどの力が残っているものだ……。

私は頭に残る鈍い痛みに顔をしかめてフラフラと立ち上がった時、ハクレイ様は口を開いた。

「獅子座を継承する小僧が付いて行ったのだ。問題あるまい。」

正確に言えば、あなたが無理矢理ついていかせたのですがね……

「ですが……彼は聖衣も纏っていません！他に対策を……」

「聖衣が力のすべてではない。それはお前にも分かっているはずだ。」

「それは………そうですが………相手はアフロディーテ……すなわち神なのですよ……」

「……その事なのだが…少し気になることがあったの…」

ハクレイ様は空を仰ぎ見た。

「はたして彼女がこんなことをするとは思えんのだ。」

「…?…それはいつたい…」

その時、見知らぬ小宇宙を感じた。

「何者だ!！」

シオンは戦闘態勢をとった。……そこにいたのは……

「…助け…て…ください…」

この場に似つかわしくない、豎琴を抱えた傷だらけの女性だった。

l s i d e レグルス・

「ライトニング・プラズマ!！」

ドットコーン

『…いいんか?なんか大穴が空いてしもうたけど……』

「だって逃げるためなんだから仕方ないじゃん。」

『せやけど……あとで請求され……』

「るわけないだろ?だいたいされても聖域の金から払うし。」

どうせ、セージの爺さんが、ため込んでるだろ?足りなかったら、

黄金聖衣の一部を削って払えばいいし。」

『せやな!!よし、レグルス!!どんどん壊してくれや!!』

「…それより、あんた誰?」

俺はさつきから花凜の傍らを飛んでいる白銀の鳥に話しかけた。

『オイラはホルスや!!』

「ホルス…ふ〜ん。さつき花凜が使ってたモンスターと何か関係あるの?」

「モンスター?…ああ…そういえば、レグルスは決闘^{デュエル}知らないんだっけ。

まあ…かくかくしかじか…って事なんだよ。」

「へえ……………」

これで通じるんだから凄いいよな…………。って、それは置いておいて…………

「ってことは、花凜が誘拐されたのは、アフロディーテって神の仕業だっということか?」

「たぶんな。…………にしても、ここどこだよ…………」

俺たちがいるところは、なんか薄暗くて変なにおい…腐臭っていうのかな?

生臭い感じと硫黄の臭いが混ざって…………あと、汚物って感じもしないでもないな…………

空の色も赤黒いし…………

「冥界か?…なわけないよな。

でも、アフロディーテが支配する世界…なんだよな?醜すぎじゃん。

「何でもいいけど、もう少し早く走ってよ。」

「……………これが全力です……………」

花凜って本当に足遅いな…アレだと、戦闘になったら真っ先に死んじゃうよ。並みの雑兵より少し足が速いみたいだけど、青銅の足元にも及ばないし……………どんな生活していたんだろ？

『おい！あそこを見る。』

新しく現れたモンスター…黒い竜っていえばいいのかな？それが低く叫んだ。

「おっ！久しぶりだな、ダークアームド。」

『御託はいい、早くアレを見る。空間に亀裂が奔っている。』

確かにうつすらと、そこからは違う空気が流れ込んでいた。

「…つまり、あそこが出口かもってことか……………でも、畏かもしれ…」

「よし！『ライトニング・ボルト』！！！」

なにか花凜が言っていた気がするけど、ようは出口なんだろ？

俺はライトニング・ボルトを亀裂に叩きこんだ。

「馬鹿！！畏だったら……………って……………」

花凜が言葉を最後まで言わなかった。…亀裂から見えたのは花畑…その奥にいたのは…

「アフロディーテ!?」

花凜が真っ先に、俺が拵げた亀裂に入り込んだ。

さっきまで『畏かも』って言ってたのは誰だよ？女って分からないな

で、俺も亀裂に飛び込んだ。なんか一気に空気が変わった。さっきまで息を止めてた方が楽だったんだけど、ここは違う。

空も透き通った蒼色だし、一面花畑だし、花の甘い香りが辺りを包んでるっていうのかな？

それに……よく分からないけど、空気が優しい感じがした。

「花凜？」

花凜は、こんな気持ちのいい空間なのに、しかめっ面だ。しかめっ面で光り輝くような美人の女の人をにらんでいた。

「アフロディーテ！！ここはどこだ！？つか、なんでアタシをさらったんだ！？」

「ここは、私が支配する世界……ここで、私は貴方を殺す。」

「うわぁ……殺すって……私は無力なんですけど……多少、剣に自信があるけどさ……」

「安心しなさい。貴方のお得意な決闘だから。」

アフロディーテという神の腕には、花凜と同じ決闘盤が付いていた。

「おいおい……また自分では戦わないのか？」

「いえ。これは私の決闘盤よ。」

アフロディーテは大事そうにソレを撫でた。

「どっしり……」

「『求める者には与えられる』……あなたも蠍座の聖闘士との戦いで見たはずよ。」

空から降ってきた決闘盤を……これは、デッキを作り、戦いを望んだら降ってきたの。」

「あのクソ神が……与える奴をちゃんと見るよな……」

花凜が頭を抱え込んだ。

「さて、お話はここまで……はじめましょうか？」

一陣の風が花畑を通る……

俺はデュエルというのがよく分からない……でも……

二人の目に映る色は、戦う戦士の色とよく似ていた……気がした。

第17話 花凜危うし!? 戦場に舞う鳥人間!

- side 花凜 -

花凜・アフロディーテ LP 4000

「では、私のターンですわね。

私は、カードを2枚ふせて、魔法カード『暗黒の扉』を発動します。この効果で貴方は1ターンに1回の攻撃しか許されません。そして私はターンを終了します。」

……なんかさあ……見え見えだな…戦法。

モンスターがいません〜!! って顔しておいて、どうせ伏せカードが『聖なるバリアー』みたいな相手モンスター破壊カードでドーンっと倒しちゃおって戦法だな。さてと……ここは……

「アタシの……」

「畏カード発動。『おジャマトリオ』!」

「……………はい?」

予想外の展開になった。アタシのフィールドに、黄色・緑・黒色の肌をした三体のモンスターが現れたのだ。……………しかもキモい……………なんで派手なパンツ一丁?

「畏カード『おジャマトリオ』は相手の場にお邪魔トークンを三体特殊召喚するのよ。
あつ！ちなみに生贄には出来ないから。それに破壊されたら一体につき、300ダメージよ。」

本当にお邪魔だな！！

「っち……アタシはブラッドヴォル……」
「畏カード発動しますよ。『奈落の落とし穴』これで貴方のモンスターを除外します。」

……ブラッドヴォルスが穴に落ちて逝った……

「……おい、大丈夫か？」
「この状況が大丈夫に見える？レグルスの目は節穴か！？」
「あのさく相手はガラ空きじゃん！なんで花凜自身で殴りにいかないの？」
「そうすれば手っ取り早いのに……」
「……ルールを忘れたのか？これはカードゲームだから。自分で戦うことはないから。」

うん？でも……城ノ内克也って人は伝記の中で、決闘中なのに素手

で戦っていたような……
気のせいかな？

「……カードを伏せて、ターンを終了する。」

不味いな……いくらこっちがガラ空きではないとはいえ……まっとうなモンスターがいない……

「では、私のターンですね。私は『ハーピー・クイーン』を召喚しますわ。」

赤い長い髪を持った女鳥人間が現れた。

ハーピー・クイーン 攻 1900

ってか、こいつは……ハーピーデッキか……。

「それから同じく魔法カード『万華鏡華麗なる分身』を発動します。これによりデッキから『ハーピーレディ三姉妹』を特殊召喚しますわ。」

ハーピー・クイーンによく似たモンスターが三体…一つのモンスタースペースに召喚された。

ハーピーレディ三姉妹 攻 1950

ってやばっ!!お邪魔の奴らは攻撃表示じゃん!!

「さて……ここで私は『天よりの宝札』を発動します。互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにドロウします。

さて……クイーンと三姉妹でお邪魔トークンに攻撃しますわ!」

ちなみに『お邪魔トークン』の攻撃力は……0……これって実質のダイレクト アタックじゃん……

花凜 LP 4000 150

「えっ!?!…たしかアイツらって破壊されたら300ダメージ受けないといけないんじゃ……」

レグルスが珍しく少し青い顔している。

「そうよ坊や。これでおしまい……一体破壊されたから600ダメージね。」

「させるかよ!!アタシは速攻魔法『ご隠居の猛毒薬』を発動!!効果でLPを1200回復する。」

花凜	LP	150	1350	750
----	----	-----	------	-----

「ふう……よかったな、花凜。」

「この花凜様がこんなところで負けるわけないだろ!？」

……とはいっても、かなり危なかったな……

「……ふふふ…悪運は強いみたいね。でも…これくらいで終わっていたら、つまらないわよね。」

貴方には…物凄く苦しんで醜く死んでもらいたいの。」

あいつ……なにかアタシに恨みでもあるのか？

まあ…それよりも、まずは……

「さっきダメージを受けたことで、手札から『トラゴエディア』を特殊召喚する。」

こいつは自分が戦闘ダメージを受けた時、特殊召喚できる。それから、こいつの攻撃力は手札の枚数で決まる。アタシの手札は、5枚……よって3000!」

黒い蜘蛛のようなモンスターが現れる。

トラゴエディア 攻 3000

「ハーピীরの派生カードは基本的に攻撃力が低い。形勢逆転かもな。」

「そう言っていていられるのも今のうちかもよ。」

私はカードを2枚伏せてターンを終了するわね。」

微笑を浮かべるアフロディーテ……おかしい……なにかある……なにかが……

「アタシのターン!アタシは……」

「罨カード発動『強制脱出装置』!この効果で、貴方のトラゴエディアを手札に戻させていただきます。」

「……そういうことか……何が何でもハーピীরを護りたいんだな。アタシは『翻弄するエルフの剣士』を守備表示で召喚。」

お邪魔トークンを守備表示に変更する。」

んで、カードを1枚伏せてターンを終了。」

くやしいけど、相手の攻撃力を上回るモンスターがいない今……少しでも守備を固めないと……

それに、この剣士は攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されないし……

(それに、多少のダメージなら、トラゴエディアは効果で帰ってくる事が出来る！)

翻弄するエルフの戦士 攻 1400

まあ、たぶん……問題ないだろ。

Inside レグルスー

なんか、次々に展開していくから、よく分からないや。

でも、今は花凛が優勢だけど……あの女神の目が気になる……

えっと……花凛は気が付いてないみたいだけど……あの眼は……なんと……か……例えるなら『意地悪い修行う方法を考えている時のシジフォス』の眼に似ている。

どうやって相手を痛めつけようか考えている目……
あっ!!でも、シジフォスは悪い奴じゃないよ!とっても優しいし、アテナ様一途って感じ……っていうのかな?仕事熱心だし、人望あるし、いい人だよ!

……ただ、修行の時は別人みたいに厳しくなるんだ。

……話がずいぶんそれた気がするなあ……

ともかく、俺はこの試合を見届ける……この目を大きく見開いて……

「では、私のターンだわね。」

私は、『ハーピーレディSB』を召喚するわ。」

ハーピーレディSB 攻 1800

「さらに私は魔法カード『ハーピーレディ鳳凰の陣』を発動するわね。」

このカードの効果は……自分フィールド上の『ハーピー・レディ』と名のつくモンスターの数だけ相手のモンスターを破壊し、破壊されたモンスターの攻撃力の合計を相手のライフポイントから引くのよ。」

え……ってことは……俺って計算が苦手だけど……これだけは分かる。」

……花凜のLPはもう1000以下なのに、エルフは、1000以上……

「花凜!!」

「こ…こんなところで負けるかいな!!」

アタシは畏発動! 『ホーリーライフバリアー』

手札を1枚捨てることで、このターン受けるダメージを0にする!」

「往生際が悪いわね…でも、貴方のモンスターは全滅よ。」

ハーピイーの攻撃という嵐が過ぎ去った後……花凜の目の前には何も無くなっていた。

「私はカードを2枚伏せてターンエンド。」

「花凜……」

俺は、思わず声をかけてしまった。この状況で…逆転できるのかな?俺みたいに小宇宙も力もない花凜が……

202

「…さすが神様ってことかな?…レグルス!」

「な…なんだ!?!」

花凜の目には光が浮かんでいた。

これから…どうなるか分からないのに、どこか面白そうに光る花凜の目…

「いいか、『人間が神にかなうわけがない』なんて思っなよ。

人間だつて神に挑めるし、勝てるんだからな!

アタシは、可能性って奴を諦めない!」

花凜はニイーっと笑った。

「フフフ……よく言うわね……」

アフロディーテが笑った。あれ？……なんか、目は笑ってない？どうしたんだろっ？

「貴方だって…神じゃない？」

「 はい? 」

俺と花凜の声が綺麗に重なった。

第17話 花凜危うし！？ 戦場に舞う鳥人間！ (後書き)

後編に続きます！

9/30 一部変更しました。

第18話 明かされる真実？ 鳥人間の猛攻！

- side 花凜 -

「神？アタシが？……」

「そうなのか？」

「いや……確かに外見はサーシャ……アテナだよ？でも、中身のアタシは至つて一般人。」

「とぼけるのも大概にしなさい！！」

美しいアフロディーテの顔には憎悪の色が……

なになに！？まじで！？あれつて冗談じゃないの！？

ジョーダンじゃないわよ……！！つて言つてクルクル回りにえ……！！

「じゃあなに！？アタシがどんな神様が知つてるつてわけ！？」

「ええ。知つているわ。クロノスから直接聞いたんですもの。」

異世界のアフロディーテ……『ハトホル』なのでしょ！？？

「誰それ？」

あつ……レグルスと重なつたな……

「なあ……ネフティスとかホルスは知つてんの？」

『うっくん……せやな……エジプトの神で、『愛と幸運の女神』……

……で、ホルス神つてのがいるんやけど……そいつの母であり妻や！』

「どっち？母であり妻つて……なに？ホルス神つてマザコン？」

『えっと……いろいろと説があるということですよ。』

アフロディーテと同一視されていて、しばしば雄牛の頭部をもつ姿で表される女神ですね。』

「そうか……でも、何度も言うけど、アタシは全然神の自覚なんて

……」

『せやせや！こいつが神やったら、世界の終りやで！！』

『ホルス！花凜様に何を！！……そりゃ……花凜様が神様だったら……』

……問題なんて……起きない……と思いますよ？』

「はい！かなりの間があつたみたいですけど、気のせい？気のせい
いか？」

……まあ、それは置いておいて……で、仮にアタシが……その……なん
だ？『ハトホル』って女神の化身だったとするぞ？そしたら、アフ
ロディーテあんたにとって不都合な事があるのか？」

「ある！」

即答だ……なに？ハトホルって神は昔こいつに何かしたのか！？

「ハトホルはつまり貴方の世界の私……つまり貴方の世界の『愛と美の女神』……！！」

『『愛と幸運の女神』やで？』

「ですが、私と同一視されているということは『愛と美の女神』でも間違いではないはずですよ。」

……つまり……ハトホルという女神は、私の美貌に近い美貌の持ち主に違いありません！！」

「……はい？」

「世界……いや、平衡世界も含め、一番美しいのは、この私です！！その座を脅かすものは……排除しなければなりません。」

だから……クロノスと協力して、ハトホルを探しました……そして、見

つけたのが『ホルスを操る少女』……つまり貴方です……！……なので私は、近くにあったトラックを投げ飛ばして貴方を殺しました。それなのに……！！アヌビスのせいで貴方は生き返る機会を得てしまった……

そこで、私はアテナの小宇宙に干渉して無理矢理、貴方の魂をアテナの体に入れ込んだのです。

アテナなら死ぬ確率も高いはずですからね。」

アタシは言葉が出なかった……

「……ってことはなに？あれ？アタシを殺したのって……アフロディーテ？」

「いかにも。」

居眠り運転でもなければ、アタシの不注意でもなかったんだ……

「……ってか、そんな理由で人を殺めるなよな……！

それにアタシはアンタみたいな美人じゃないっての……！」

「せやせや！こいつはアンタみたいに美人じゃないんやで！アンタはさ、体の内から光り輝くオーラの美貌の持ち主やろ？人違いや……！」

「ホルス……！なにをいいますか……！花凛様は美人ですよ……まあ……アフロディーテには、はるかに負けていますがね……」

「ごほん……！とにかくホルスを操る決闘者なんて沢山いる。アタシよりもず……っと美人な決闘者がいるに決まっているよ。」

さっさと、決闘再開するぞ……！これに勝つたら、と……と共犯者クロノスに会

いに行くぞ！
ドローカード！！」

アタシは問答無用で決闘を再開する。

「さてと……アタシは『天使の施し』でデッキからカードを三枚引いて二枚捨てる。

さてと……いくぞ！アタシは墓地にいる『トラゴエディア』と『ワタポン』をリリースして『カオスソルジャー開闢の使者』を特殊召喚
！」

「えっ！？トラゴエディアって……いつ墓地に行っていたの？手札に戻っただけなんじゃ……」

「甘いな、レグルス！さっきの『天使の施し』で墓地に送ったのさ。
」

地上に降り立つは剣を持った青い戦士……こいつでなら行ける……と思う。

カオスソルジャー開闢の使者 攻 3000

「アタシはカオスソルジャー開闢の使者でハーピレディーSBを攻撃！

くらえ！『開闢双破斬』！！」

「させないわ！畏発動！『ハーピレディー朱雀の陣』！！

このカードは場にハーピイというモンスターが2体以上いるとき、攻撃ダメージを0にする！」

「だがな、開闢の使者は1度攻撃に成功すると、もう一度だけ攻撃が可能になるんだ。」

アンタの罨カードの効果はダメージを0にするだけで、攻撃を無効にするわけじゃないからな。

……今度はハーピイレディー3姉妹に攻撃だ！！！」

開闢の使者が剣を振るう……赤い髪をした鳥人女を易々と切り刻んでいった。

アフロディーテ LP 4000 2950

「カードを2枚伏せてターンエンド。」

「つく！よくも私を……私のターン！！！」

気のせいかな、アフロディーテの口元が少しゆがんだ気がした。

「『死者蘇生』を発動するわ。これで『ハーピイレディーSB』を特殊召喚。」

さらに魔法カード『ハーピイレディー鳳凰の陣』を発動！」

「またあのカードだ！！！」

「さつき使ったから、効果は知っているわよね？」

これでカオスソルジャー開闢の使者を破壊するわ！！！」

「つく！！！」

「不味いよ！カリンが3000ダメージ受けちゃうじゃん！！！」

「心配してくれてありがとな、レグルス。
速攻魔法『防御輪』を発動！これでダメージを無効にする！」

登場したばかりなのに、カオスソルジャー開闢の使者はハーピイの
生み出す炎で焼かれてしまった。

が、その炎は緑の防壁に遮られ、花凜に達することはなかった。

「でも……から空きじゃあ、仕方ないな…速攻魔法発動！『スケー
プゴート』…これで羊トークンを特殊召喚する。」

色とりどりの優しい目をした羊が4体現れた…

「その瞬間、畏発動！『悪夢の三面鏡』！！」
「なにっ!?!？」

「相手が特殊召喚した際、特殊召喚したモンスターと同じ数だけ、
自分フィールド上のモンスターのコピートークンを召喚できるのよ。
私は、『ハーピクイーン』を2体、3姉妹を1体特殊召喚するわ
！」

羊とは対照的に、キツイ目をした鳥人女が続々と現れた。

「さらに、3姉妹とクイーンを1体を生贄にして、『ハーピイズペ
ット竜』を召喚するわね！！」

鉄首輪のついた赤い竜が雄たけびを上げる。

ハーピイズペット竜 攻 2000 2900

「あれ？なんで、攻撃力が上がったんだ？」

レグルスが頭の上に疑問符を浮かべた。

「答えてあげましようね、獅子座^{レオ}の坊や。

ハーピイズペット竜は場にいるハーピイの数だけ、攻撃力を300 UPさせるのよ。」

「えっと……ってことだから、今、ハーピイってモンスターは…3体だよね？」

「そう。つまり、900UPしてるってことだ。」

「…平気なのか？」

「あんまり……でもさ、勝たないと意味がないから、勝つことを諦めたりはしないぜ？」

「まあ、このターンでは無理ね。行きなさいハーピイクイーンとペット竜！…攻撃よ！…！」

うわぁ…あつという間に羊トークンが残り一匹じゃん……

「アタシのターン…！」

このドローで…これで終わる……かも……！…！

「……！……！」

引いたカードを恐る恐る見てみた時、アタシの顔が、自分でも緩んだのが分かった。

「勝った…な。」

「なんですって！？この状況で…逆転なんて…」

「出来る！！」

決闘にもさ、いつだって可能性つてのは眠ってるもんよ！

アタシは、魔法カード『スタープラスター』を発動。

スケープゴートをリリースすることで、サイコロを1つ振り出した目の数とリリースしたモンスターのレベルの合計分のレベルを持つモンスターが手札に存在する場合、そのモンスターを特殊召喚することができる！」

羊トークンのレベルは1…5が出たら、勝てる！！

ゆっくりとサイコロは回転していく…1分もかからないはずなのに、その時間が永遠に感じられた。

「数字は…5！！」

「よっしゃ！！アタシは手札から『ホルスの黒炎竜LV6』を特殊召喚！！」

さらに、『レベルアップ』でデッキから『ホルスの黒炎竜LV8』を特殊召喚！！

最後に魔法カード『ダブルアタック』！！

自分の手札からモンスターカード1枚を墓地に捨てて、捨てたモンスターよりもレベルが低いモンスター1体を自分フィールド上から選択する…それで、選択したモンスター1体はこのターン2回攻

撃をする事ができるの。」

「ふふふ……でも、LV8を超えるモンスターなんて……」

「いるんだなあ〜それが。」

『モイスチャー星人』……こいつは9ツ星モンスターだ。」

「なにっ!？」

アフロディーテが驚愕の色を浮かべていた。

「さてと……これで、2回攻撃できるな。」

アタシはハーピクインに、二回攻撃する!!行け!!二連打だよ、

ホルス!!

『W^{ダブル}ブラック・メガフレーム』!!!」

『わかつとるがな!!』

「きゃあああ!!」

黒炎弾がハーピイに襲い掛かった。

アフロディーテ LP 2950 0

立体映像が消え、シン……と静まり返った。

「私が…負けた……?」

負けたことがショックすぎるのか、放心状態気味で座り込むアフロディーテ……。

「……アタシはさあ、自分が神なのか分からない……」

跪いているアフロディーテの前に立つ花凜……

「でもさ、これだけは言えるぞ。

ホルスはアタシにとって、息子でも夫でもない……ただのタチの悪い友人さ。」

「……友人？」

「そう！……じゃあ行くぞ、レグルス。」

「行くつて？」

「決まってるだろ？」

アタシはイマイチ状況が読めなくて、ポカン……とするレグルスを見て、クスリと笑った。

「……アフロディーテの共犯者を懲らしめに。」

「あゝ確か、クロノスか！！

俺も行く！なんか楽しそうだしな！！」

レグルスとアタシは花畑を歩き始めた……遠くで感じる、とてつもなく大きな小宇宙を目指して……

「あゝめんどくせえ!!」

俺は任務ということ、岩がゴツゴツしているところまで来ていた。

「めんどくさいのは俺も一緒だ。」

デジエルが静かな声で言う。

「へっ！お利口さんは言うことが違うな！」

「声がデカい…響くぞ。それにもうすぐ……」

「ここは通さないツス!!」

小さな影がカルディアとデジエルの前に躍り出た。
腕には決闘盤が付いている。

「ここから先は…通しません！」

「んや、通させてもらうぜ!!俺も…決闘者だしな!!」

「おい…忘れるなよ。俺たちの任務は……」

「人質の救出だってことは分かっているぜ。でもな……もっと使
えンだよ。こいつをな!!」

「そのセリフをそっくりそのまま返すツス!!」

小さな影は決闘盤を構えた。

「見たところ、美闘士のような。」

「そうツス!!さあ、決闘ツスよ……アテナの聖闘士!!!!」

第18話 明かされる真実？ 鳥人間の猛攻！（後書き）

10/3一部変更しました。

第19話 後悔しても仕方がない… 機械使いVS風使い！

- side カルディアー

カルディアー・美闘士 LP 4000

よっしゃ〜！！アツくさせてもらっぜ！！
まあ、美闘士だろうかなんだろが、俺の敵じゃないけどな！

「…カルディアー…5つ星以上は生贄モンスターがいるということをお忘れなよな。」

「うっせえなあ…分かってるに決まってるだろ？」

「前回は分かっていたいなかったようだが……」

「……花凜の奴…デジェルにチクったな……」

あれは、たまたまだっての！！今回は順調に俺が勝つんだからな！！」

「……順調に勝つつスか？この僕ツスよ？」

「何言ってるやがるんだよ？勝つのは俺だぜ！！」

俺のターン！！俺は、『ミスト・パレー霞の谷の戦士』を召喚！！」

青い羽の生えた戦士が場に現れた。

霞の谷の戦士 攻 1700

「んで、カードを伏せて、ターンエンドだな。」

伏せてあるカードは、『旅人の試練』ってカード。

なんでも、相手が攻撃を仕掛けたとしても、俺の手札からランダムに選択したカードの種類を当てねえと、攻撃を仕掛けたモンスターが手札に戻ってしまうっていうカード。

当たる確率は三分の一だから、まあこのターンは安心だな。

「僕のターンっすね。」

僕はカードを2枚伏せてから、魔法カード『大嵐』を使うッス！」

「大嵐？」

「知らないのか？場に伏せてある魔法・罠カードを全て墓地に送るカードだぞ？」

「なに！？……でもよおデジエル……それなら、アイツの伏せたばかりのカードも墓地に送られるぜ？」

「……そんなことは、あの美闘士も分かってること。」

恐らくは……あの罠カードは『黄金の邪神像』。」

「じゃ……邪神像？」

「正解ッスよ、お兄さん！！」

奴の場に黄金の像が2体現れていた。

「『黄金の邪神像』は、セットされたこのカードが破壊され墓地に送られた時、自分フィールド上に「邪神トークン」を召喚することが出来るツスよ。

それから、フィールド魔法『ギアタウン歯車街』を発動するツス！」

突然、周囲が鉄だらけになる。

「まさか…お前のデッキは…『アンティーク古代デッキ』か!？」

「その通りツスよ。」

「…なんだよ、それ？」

なんか、デジエルは、奴のデッキが分かったみたいだ……まあ、どんなデッキでも、俺は構わねえけどな。楽しめるならさ。

「『歯車街』は、『アンティーク・ギア』と名のついたモンスターを召喚する場合に必要なリリースを1体少なくすることが出来るツス。」

だから、この内の1体を生贄にして、元々は2体生贄が必要なコイツを召喚するツス!!!『アンティーク・ギアゴレム古代の機械巨人』!!!」

な…なんか…巨大な鉄の巨人が現れた………つてか………

古代の機械巨人 攻 3000

「さ…3000!?花凜のホルスと同じじゃねえか!」
「行くツスよ!古代の機械巨人で、霞の谷の戦士を攻撃するツス!」
『アルティメット・パウンド』!」
「つく!」
「さらに、邪神トークンでダイレクトアタックッス!」
「ま…まじかよ!」

カルディア 4000 2700 1700

「うち…一気に減ったな……」
「さらに……」
「まだあんのか!」
「念には念を入れて、『押収』を発動するツス。
1000LPを払って、相手の手札を確認して、1枚捨てることが
出来るツス。」
「はあ〜!」

おいおい……これじゃあ……

美闘士 4000 3000

「えっと……」

『霞の谷のファルコン』

『魔導戦士 ブレイカー』

『BF - 疾風のゲイル』

『ダーク・シムルグ』

……ツスカ……」

「……カルディア……お前……『旅人の試練』で、相手が『モンスター』カードを選択したら、おしまいだったな。」

「?どういう意味だよ?」

「そのまんまだ……」

「……じゃあ、僕は、『ダーク・シムルグ』を捨てさせてもらっ
ツスカよ?」

「やっぱりかよ!!!」

くう……俺のエースカード……何か泣けてくるぜ……
でもよ……」

「?何笑ってるっツスカ?」

美闘士の奴……怪訝そうな顔をしてやがるぜ……

「だってよお……面白くなってきたじゃねえか!!
デュエルってこうじゃねえとな!!」

とはいっても、この後……どうするか……

んまー、考えても仕方ねえか。俺はこの決闘を最後まで楽しむだけ
だぜ!

「俺のターン、ドロー!!」

俺はカードを引いた。

「おっ！これは……」

俺はニヤリと口元が歪むのを押さえることが出来なかった。

l s i d e 花凜

「……あいつ……空気読めって……」

「空気は読めないよ？透明だし……」

「あのなあ……レグルス君……そういう意味じゃないんだよ？」

「じゃあ、どついう意味？」

「それは……こついう意味!!!!」

ドッカーン!!!!

隠れていた目の前の岩が崩れた。

間一髪、レグルスがアタシを助けて、別の岩の後ろに避難したから

よかつたものの……
さつきまでの所は……うん……瓦礫の山。一步遅かったら冗談なしに死んでたな。

「どうした？決闘^{デュエル}をしにきたのでは、なかつたのか？」

クロノスの野太い声が響く……

そう、アタシは、クロノスに今までの恨みをぶつけた。その時に……

「アンタの仲間は、アタシが決闘^{デュエル}で倒したから。
次はアンタの番だ！！」

つて言ったら……

「そうか……決闘を申込みに来たのか……人間よ……」

つと言つて、襲い掛かってきたのだ！！

いやいや……空気読もうよ！！決闘って確かに英語で「Duel」だ
けどさあ……今までの流れからして、「アタシVSクロノス」の決闘^{デュエル}
つてなりそうじゃん！！なのになんでガチンコ決闘？なんで神様が
小宇宙全開（？）で一般市民を襲うわけ？

「やっぱり、俺が出て戦つた方がいいんじゃない？」

「ダメ！！」

思わず即答した。だってさ、今のレグルスは、黄金聖衣を着てない
んだよ？……呼び寄せればいいって？

それは無理。だってこの子……まだ聖闘士の資格を取ってないし……

「いい？神に勝つ人間はいないの。
神になった人間に勝負を挑んだ天才児レゲルスがいたんだよ。で、その子は勝ったには勝ったんだけど、自分の命と引き換えって感じで勝ったの！！」

しかも、その天才児は黄金聖闘士で、聖衣をしっかり着てただけど、命を捨てるまで、神には手も足も出なかったの。だから、黄金聖衣も着ていない生身の状態のアンタじゃ勝ち目はないって！！」

「でも、やってみないと……」

「やってみなくても分かる！！だって……」

ドッカーン！！！！

「隠れても無駄だぞ！！」

「ひいつ！！！！」

また、レゲルスに助けられた……

『ホンマ、どないすんねん！！』

ホルスが焦った感じで言ってくる。
しるか！！そんなこと知るか！！！！

あゝ誰でもいいから……助けに来て……

第20話 戦場を舞う黒い鳥！

「I side レグルス」

「…行ける！」

俺が思わず口に出すと、花凜が驚いた感じで見てきた。

「行ける…って…あんた、やる気!?!」

「そうに決まってるじゃん！俺はもう、アイツを越えられる。」

「はい!?!」

「アイツはさあ、攻撃をした後に一瞬だけ、隙が出来るんだ。」

「どうしてわかったの？」

「そんなの目を見開いていれば分かるよ。」

花凜はハハハと力なく笑った、

「…レグルスはやっぱり戦いの天才だな…さすが翼竜を倒しただけあるよ……」

「翼竜？」

「いや…こつちの話」

そういや、アンタって『光子破裂』フォトンバーストっての使えるの？」

「ふ…フォン？なにそれ？」

「あゝ…やっぱりエピGの技は無理か…そりゃそうだもんな…
第一にクロノスの姿がエピG仕様じゃないし……」

さっきから何をブツブツ言ってるんだろ？

「……アタシの予想なんだけど、アレは完全なクロノスじゃないと思う。」

「なんで!?!」 『ホンマかいな!?!』

「だってさ、アイツの出来そこないの弟の杳馬の奴ですら、時を操る術をバンバン使うんだよ？」

なのにアイツは一度も使ってない……」

…杳馬っていうのが、誰だかは分からないけど納得できたかもしれ
ない……

『時を操る神』なのに、さつきから小宇宙を爆発させてばかりでオ
リジナリティーっていうのかな？

なんか敵として面白みがないんだよな……

「でも、あの馬鹿でかい小宇宙は神クラスだから、クロノスのもの
だと考えていいと思う……
で、ここからが本題だ。」

花凜がニヤッと笑った。

「クロノスってさ……唯一、雷だけに免疫がないんだ。」

お前の出番だぜ…レグルス。」

花凜が俺の髪をクシャッと触った。

「さつきから言ってるじゃん！俺がやるってさ。」

俺も笑い返した。…神と向かい合うのに、怖いとは思わない。

だって…俺はアノ神を越える自信があるから。

Inside デジエール

カルディアの奴…笑っているが…いいカードが引けたのか？

「俺は『強欲なツボ』で、カードを2枚ドロ―!」

……手札増強カードか……幸と出るか…それとも……

「よっしゃー!!」『死者へのたむけ』だぜ!!

手札を一枚捨てて、こいつで、テムエーの巨人を破壊するぜ!
んでもって……『霞の谷のファルコン』を召喚する!!」

霞の谷のファルコン 攻 2000

「で……邪魔なのが…あの”金ぴか”なんだよな……」

それは邪神トークンの事か？

「よし！なら『洗脳ブレインコントロール』…っていうのを使っぜ。まあ…LPは800払わねえと行けねえけど、その代わりに、その”金ぴか”のコントロールをもらっぜ！！」

「つく…邪神トークンが…」

「これですみだ！！2体でダイレクトアタック！！！！！！」

………

「…？なんで何もおきねえんだ？」

「…ばかッスね…こんな奴に『古代の機械巨人』を破壊されたなんて……………」

「…カルディア……………」

『霞の谷のファルコン』は、『フィールド場にいるモンスターを手札に戻さない」と攻撃することは出来ない』…と書いてないか？」

「ん？……………ああ……………確かに……………メンドクセえな…せつかくこのターンで終わると思ったのによお……………」

やっぱり読んでなかったな。

「まあいいや。この…邪神トークンってのを手札に戻して…でも、こいつはトークンだから、そのまま破壊な。

んで、ダイレクトアタックだ！！」

「うわぁ…！！」

カルディア LP 900

美闘士 3000 1000

「じゃあ、このままターンエンドってことで。」

「なめるんじゃないツスよ!!」

『天よりの宝札』で互いの手札を6枚にするツス!!!!」

どうなるか分からなくなった…手札の数だけ可能性があるからな……
それに…あの美闘士…笑っている…

「黄金聖闘士!!お前は勘違いしてるツスよ!

『古代の機械巨人』は1枚とは限らないし、それが最強の僕しもへとも限らないツス!!」

「はあ〜!?!攻撃力3000の奴が最強じゃないってどづいうことだよ!?!」

……となると…あの美闘士は、花凛が前に話していたモンスターを
入れているのか……

少々厄介だな…純粋な力勝負では、もうカルディアに勝ち目がない…

「手札から魔法カード『融合』を発動するツス。

これで同じく手札の『古代の機械巨人』と2枚の『古代の機械戦士』を融合させ……

『古代の機械究極巨人（アンティーク・ギア・アルティメット・ゴーレム）』を召喚するツス！！！！」

でかい……古代の機械巨人も相当な高さだったが……あれよりはるかにデカイ……

アテナ神殿にある『アテナ像』も高さがあると思っていたが……それを上回る……

しかも……4本足になっている……

古代の機械究極巨人 攻 4400

「……よ……4400！？反則だろ、その攻撃力！！！！」

「反則じゃないツス。」

これで形勢逆転ツスよ。『古代の機械究極巨人』で『霞の谷のファルコン』を攻撃ツス！！！！」

まずい！！！！これで……

「ハハハッ!!」

こんな楽しいところで終わってたまるかよ!!!

なんつーの? 『自分が現在生きてるって実感』があるよな、こいつ
う時ってさ!!」

カルディアが笑う。

…笑っていられる状況か? まあ……こいつらしいといえば、こいつ
らしい反応だが……

「手札から『クリボー』を捨てる。これで、戦闘ダメージを0にする。」

さっきまで…手札になかったから、おそらくは『天よりの宝札』で
引いたんだな…

「まあ良いツス。どっちにしろ、お前には何もできないツスからね。
ターンエンドツス。」

「俺のターンだぜ!!」

…これがカルディアの最後のドロ―だな……

このターンに勝たなければ、『古代の機械究極巨人』の攻撃が待っ
ている……

『聖なるバリアー・ミラーフォース』で防ごうとしても、巨人の効
果で、バトルフェイズ中の魔法・畏カードは発動することが出来な
い……

さあ…どうするつもりだ？

「俺は…魔法カード『死者転生』を発動する！

こいつで手札のカードを1枚捨てて、墓地のダーク・シムルグを手札に加えるぜ！」

「でも、仮にダーク・シムルグを召喚したとしても、勝てないッス！」

「そうかな？俺は墓地の闇属性『クリボー』と風属性『霞の谷のフアルコン』を除外して、

『ダーク・シムルグ』を召喚するぜ！！」

黒い巨鳥が場に降臨した

ダーク・シムルグ 攻 3000

「……そうか！！その手があったな。」

ピンっときた私は、いつの間にか口に出していた。

「おっ！！さすが知の聖闘士のデジエル！！
気が付いたか！？」

「当たり前だ。…お前の事だから、そんなところまで目がいくとは思わなかった。」

「おいおい…俺だって聖闘士だぜ？」

「な…なに二人で納得してるツスか!？」

やはり…状況が読めてないな……

まあ…無理もない……か…

「へっ!お前…忘れたのか？」

俺は『BF - 疾風のゲイル』ブラック・フェザーを召喚するぜ!!」

小さな緑色の頭をした鳥が現れた。

BF - 疾風のゲイル 攻 1300

「…前回、手札にあったモンスター……だけど、攻撃力じゃあ……」
「しらねえの!?!こいつはなあ…相手のモンスターの攻守を半分に
するんだぜ？」
「なにっ!?!？」

古代の機械究極巨人 攻 4400 2200

「形勢逆転……だな。
ダーク・シムルグで、古代の機械究極巨人を攻撃だ!!」

美闘士 1000 200

「だ…だけど、『古代の機械究極巨人』が破壊されたことで、効果発動するツス!
このカードが破壊されたとき、墓地から『古代の機械巨人』を特殊召喚することが出来るツス!」

……終わったな……

「しらねえの?」

カルディアは面白そうに口元をゆがませる。

「このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手はフィールド上にカードをセットする事ができないだぜ?」
「…えっ……」

美闘士の顔から表情がなくなっていく……

「さてと…まさか、こいつでとどめをさすとはな……
いけ、ゲイル！ダイレクトアタック！！！」
「う…うわぁあー！！」

美闘士 200 0

「楽しかったぜ、美闘士！」
「……………」

美闘士はうなだれる…

「……………負けた……………」
「さあ…通させてもらうぞ。」

私とカルディアは美闘士と横を通り過ぎる。

「さ…蠍の黄金聖闘士！！」

美闘士が座り込んだまま叫ぶ。
カルディアは顔だけ後ろに向けた。
美闘士は急に振り返って、カルディアに何かを投げた。
カルディアがキャッチしたのは……………鍵……………

「つ…次は必ず勝つツス！お前は運がよかつただけツス！！
それは戦利品ツス。次、僕が勝つた時には、お前から何か貰うツス
よ！？」

美闘士の目は今にも泣きそう…だったが、どこか『楽しかった後』
のような雰囲気醸し出していた。

「ああ。またやろうぜ！」

……またやろうぜ…か……

……その時まで、カードを持っているといいな。

「行くぞ、カルディア。」

「分かってるって。」

私達は奥へと進んでいく……遠くの方で、レグルスの小宇宙が高ま
るのを感じたが……今はほおっておこう。何よりの優先事項は……

「ここだな。」

「これを、さっき手に入れた鍵で開けるんだろうな……他に見張り
はいねえし。」

鍵をクルクル回すカルディア。

「だれですか!？」

目の前の牢獄にいる1人の女が声を上げた。

「…助けに来ましたよ…女神様方。」

さて…この方たちを助けたら、すぐに花凜とレグルスの応援に行かないとな…

第21話 もうこれが最後！解き明からせる謎（前書き）

この回は決闘ないです！！

次回からあります！！

第21話 もうこれが最後！解き明からせる謎

Inside レグルス

(いい？奴の隙が分かったからって、むやみに近づいたら死ぬよ)

ここから少し離れたところにいる花凜の声が脳裏に浮かぶ……

俺は先程言われたことを反芻しながらクロノスから目を離さないで動き回っていた。

「どうした？攻撃してこないなら、またこちらから行くぞ!!」

よし！クロノスが攻撃を仕掛けてきた!!

俺は一気に速度を上げた。

当然、一気に速度を上げたことで、クロノスの技は俺には当たらなかった。

一瞬…動きがとまる……

「いまだ!!!ライトニング・プラズマ!!!」

最大限に高めた小宇宙を叩きこむ。

バチバチと火花を散らす俺の小宇宙を叩きこんでいった。

「グワアアアアア!!」

物凄く苦しんでいるクロノス…俺は急いで花凜の位置まで下がった。

「よくやったね!」

「もちろん!!」

「…ふ…ふざけるな!!人間が!!!!」

クロノスが吠えている。

俺が構えなおすと……

「待ちなさい、クロノス。」

綺麗な女の人が前に立ちふさがった。

アフロディーテとは別の意味で綺麗な感じのする…綺麗って言うより高貴っていうのかなあ?よく分からないけど、とにかく女の人が前に立った。

「……何者だ……」

「……記憶…解除……」

その人は右手をクロノスに向けてそういうと、クロノスの動きが本
当に止まって……倒れ込んだ。

まるで、眠っているみたいに……

「記憶……ってことは……記憶をつかさどる女神『ムネモシユネ』!？」
「だれそれ?」

「その名の通り、記憶を操る奴……てっきりここはエピグとは関係ないと思ってたのに……」

さつきから聞く「エピグ」ってなんだろう?

「ごめんなさい……神代花凜……異世界からの来訪者……」

「よかった……^{ハトホル}神とか言わないで……しかも敵意が感じられないし……」

たしかに敵意がない……それに……なんだろう?見てくる目が敵を見る目じゃない。

俺は人の事がよく分からないけど……

助けてくれたし味方なのか?

「私がクロノスの記憶を改ざんして、アフロディーテを仕掛けたのです。」

貴方の世界とこの世界を戦わせ、これからくる聖戦を破壊するため

……
「……なんでそんなことを?」

「娘たちが人質にとらわれていたのです……が、貴方……アテナの聖闘士によって助けられたみたいなので、こうしてクロノスの記憶を解き、戦争を回避することが出来ました。」

「戦争?!」

なんかよく分からない……ようするに、俺たちは「誰か」の手のひらの上で踊らされてたってこと?

「はい……あの女神は、毎回同じように聖戦が起き、どうせアテナが勝つという決まりきった予想を変えて、どうせならもっと大きな戦いを起こそうと考えたのです。」

例えば……異世界から来たものがこの世界の神によって殺されたら……異世界の神は怒り狂うでしょう……自分の所有物が傷つけられたのですから……」

「だからアタシは狙われたのか……」

「貴方でなくてもよかったのですが……アフロディーテが選んだのがたまたま貴方だったということですね。とにかくここまで生きていてよかったです。」

ムネモシユネは微笑んだ。

「で、その本当の敵って？」

「……それは争いの女神『エリス』です。が、獅子座の聖闘士さん……貴方は彼女と戦わなくてよろしいですよ。」

「なんで？」

「これは神々の問題です。」

これからエリスを審判にかけます。そこで処置が下されるでしょう……

それから、花凜さん……貴方……気が付いていますか？」

「なにを？」

「貴方……あと戦うべき決闘者は1人なんですよ？」

「……はい！？まじで！！」

花凜がいつになく嬉しそうだ。

「はい。その決闘者は……………」

l s i d e 花凜

そう…：始まりはこの場所だった……

この場所で…：本物のマニゴールドと出会った後……：決闘をしたんだ……

アタシは決闘盤をひと撫でした。

これが最後……：これが終われば……：この扉を開けて侵入してくるものと決闘すれば……：良くも悪くもすべてが終わる……

「あゝあ！！もっと決闘したかったぜ！！」

カルディアがわめいている。

「仕方ねえだろ？それに、いい決闘仲間が出来たんだろ？」

「でもよお…アイツより花凜の方が強いぜ？」

「つたりめえだ！！アイツより強い奴なんているわけねえだろ！！！」

後ろでギヤーギヤー言い合っているカルディアとマニゴールド…慣れたこの光景も…もう見ることが出来なくなる……神代花凜として…
…この世界へ来た異邦人^{ゲスト}として見ることはなくなるのだ。

ボタン！！！！

ドアが開かれた。そこには一人の少年がいた。

「フン！！貴様がアテナ…もとい、神代 花凜か。」

「アンタが最後の決闘者…海馬瀬戸の孫、海馬青嵐！！！」

海馬はケースから決闘盤を取り出すとニヤリと笑った。

「さて……これが最後だ。」

「かすに負ける俺様ではない！！！」

「「決闘！！！！！」」

最後の決闘が幕を開けた。

第21話 もうこれが最後！ 解き明からせる謎（後書き）

…分かっていると思いますが、海馬青嵐は作者のオリキャラです……

第22話 ラストバトル！！ 黒炎と光炎がぶつかり合う時…

- side デフテロス -

…今日…アイツ…あのアテナに憑依している花凜という女が帰る日らしい…

正確に言えば、今…アテナ神殿で行われているデュエルというものに勝利したら帰るのだそうだ。

…俺と彼女があつたのは数日前の事だ。

双子の兄・アスプロスから花凜の事を聞いた俺は、どんな奴だか気になって…こっそり見に行ったのだ。するとむこうが、木の上にいる俺に気づいて話しかけてきたのがきっかけだった。

本来…隠されている存在の俺の事を彼女は知っていた。つとことは、遠くない未来で俺は大手を振るって歩けるということなのだろうか？

「もうすぐさあ、帰れるかもしれないんだよ。

だからさ、これ…やるよ、記念に。未来のモノなんて珍しいだろ？

ああ…言っとくけどこれ渡すのはアンタだけじゃないから。一応、^{ゴールド}黄金全員にそれぞれのイメージに合ったカードを渡すつもりだからさ。」

そいつって彼女は今、俺の手の中にあるカードをくれたのだが……

「……『デフテロスはイメージがシードドラゴンだから』って言うたが……」

何故シードドラゴンなんだ？俺は海とは何も関係ないぞ？」

ダイダロスのカードを見る俺……将来は「海」に関係することをするのだろうか？

side アルバファイカ

「アタシのターン、ドロー……！」

私が到着した時、丁度決闘が始まるところだったらしい。部屋に入るとマニゴールドが近づいてきた。

「おっ！珍しいじゃねえか！！」

つてめーもアスミタみたいに宮に閉じこもってるんだと思ってたぜ
「！」

「……あまり近づくな。」

私はただ……気になったから来たまでのこと。「

「…そこまで近づいてねえじゃねえか。

大股で4歩くらい距離だぜ？……つまいいか。来いよ！もっとこ
つちで見ようぜ。」

「いや…ここからでも十分見える。

悪いが、遠慮しておこう。」

「…本当にこつちに来ないのか？」

シオンの奴が寂しそうに言うが、私はそれを無視した。

チラリ…と花凜がこちらを見る……が、また手札に視線を戻してい
た。

……結局、彼らから少し離れた所の柱にもたれかかり、決闘に意識
を集中させた。

「アタシは『ホルスの黒炎竜LV4』を召喚！さらに手札から魔法
カード『レベルアップ』を2枚使ってLV4をLV8へと進化させ
る！来い！！『ホルスの黒炎竜LV8』！！！」

ホルスが一旦、炎に包まれそして…巨大化した白銀の翼をもった巨
鳥がフィールドに姿を現した。

ホルスの黒炎竜LV8 攻 3000

「…ふん…ホルスがエースカードか？」

あざ笑うように言い放つ対戦相手…海馬青嵐…

「まあね。さらにアタシはカードを3枚伏せて『天よりの宝札』を
発動！

互いの手札が6枚になるようにドローする！」

「…なあ、なんでこのタイミングで使ったんだよ？」

もつと手札が少なくなっただけからでもよかったんじゃないの？」

カルディアが隣にいるデジエルに聞いているようだ。
デジエルは少し考えてから口を開いた。

「おそらく…花凜が言っていたのだが、対戦相手の海馬青嵐という
人物は、花凜の世界でアノ決闘盤を生み出した人物の息子であり、
その会社の社長なのだそうだ…：：：若干17歳なのにな。」

「なっ!?!」

「…『念には念を…』と花凜は言っていた。
簡単に勝ちが取れそうな4軍を使えばいいのに、なぜ使っていない
のか…

それは万が一に備えて応用が利くのが一軍のホルステッキの方だから
だ。

花凜は奴の決闘を知ってはいるが、実際に相手をするのは初めてだ

そつだ…だからアノ状態から万が一……逆転されるようなことになつても慌てないようにはしておきたいのだらう。」
「なるほどのお……確か……『手札の数だけ可能性がある』つて言つていたからのお……」

童虎がフム…と納得している。

「俺のターン！」

格の違いとやらを見せてやろう。俺は『ロード・オブ・ドラゴンの支配者』を召喚する！」

「なっ!?!」

「貴様が俺の対策をしていることなど100も承知よ。

俺のデッキはパワーデッキ。ほとんどモンスターは1500以上。だが…こいつは1400……その顔から察するに、1500以上のモンスターが召喚されたときに発動し、そのモンスターを除外する罠カード…『奈落の落とし穴』だな。」

「…つく…当たりだ。」

苦笑する花凜。フンツツと鼻で青嵐は笑った。

ロード・オブ・ドラゴンの支配者 攻 1400

「さらに俺は『手札抹殺』を使い、手札をすべて捨て、同じ枚数ド

ローする。

そこで手札から捨てた三枚の『伝説の白石』の効果発動！

このカードが墓地に送られたとき、デッキから『青眼の白龍』ブルーアイズホワイトドラゴンを手

札に加える。」

三枚の青い竜が描かれたカードをこれ見ろがしに手札に加える青嵐。

「早いな…アンタもエース君を出すのかよ…」

「エース？いや…エースも出すがその前に、舞台は整えないとな。

俺は『融合』を発動！手札の三枚の青眼の白龍を融合！

現れる！『青眼の究極竜』！！！」ブルーアイズアルティメットドラゴン

3つ頭のあるドラゴンがフィールドに出現した。

そう……気高いオーラを身にまとっている……思わず見入ってしまった
いそつだ…

青眼の究極龍 攻 4500

「よ…4500!？」

「うるせえぞミロ！花凜の場には『奈落の落とし穴』があるんだぜ？
それで……」

「除外できないんだよ…マニゴールド。」

悔しそうにつぶやく花凜……

一体なぜ……？

アルデバランが心配そうな顔をして尋ねた。

「なぜだ？まさか……あの竜の効果か？」

「いや……ロード・オブ・ドラゴンの支配者の効果だ。

アレがいる限り、場のドラゴン族モンスターを対象とするカードの効果が無効にする……」

つまり、『奈落』は効かないんだ。」

「その通りよ。」

だが……ここからだ。青眼の究極龍をリリースすることで特殊召喚！」

「はあ！？まだいんのか……あれより強いのが……」

「まさか……この目で見ることにになるとはな……」

花凜がゴクリ……とツバを飲んでいる。

「『青眼の光龍』！！このカードは自分の墓地のドラゴン族モンスター1体につき300ポイントアップする。また、このカードを対象にする魔法・罫・モンスターの効果を無効にする事ができる。

いわば、万が一……ロード・オブ・ドラゴンの支配者が破壊されたときの保険だ。

さらに『死者蘇生』で究極龍を復活させる！

究極龍でホルスに攻撃だ！『アルティメットバースト』……！！」

「ホルス……！！すまん……！！」

「くははは……！！粉碎！玉砕！大喝采……！！」

いや……大喝采はないだろ……

花凜 LP 4000 2500

「計算するまでもないな……これで終わりだ！」

「させるか！速攻魔法『スケープゴート』！羊トークンを4体召喚する……！」

色とりどりの羊が現れた。

「ふん……なら、速攻魔法『融合解除』！」

これで究極龍を元の姿に戻す……舞い戻れ！青眼の白龍たちよ……！」

究極龍がまばゆい光に包まれ……三体の青い眼の龍が降臨した。

青眼の白龍 攻 3000

青眼の光龍 攻 3000 4200

「あっけない幕引きだな。」

青眼の白龍とロード・オブ・ドラゴンの支配者で雑魚を蹴散らせ！

！

「そうかな？アタシはさらに畏発動！『道連れ』！

羊トークンが破壊されたときに、道連れとしてロード・オブ・ドラゴンの支配者を墓地に送ってもらおうか？」

奈落の底へ引きずり込まれるロード・オブ・ドラゴンの支配者……

「『奈落の落とし穴』じゃなかったのか！？」

「人の言葉鵜呑みにすんなっての！

つてか、まだ1枚…残ってんでしょ…？」

得意げに笑う花凜。

「ちなみに発動させたのは、最初に青眼の白龍で羊トークンを破壊した時。」

だからロード・オブ・ドラゴンの支配者は攻撃に参加しないで終わってるから、まだ一体残ってるけど…？」

「つく…青眼の光龍で攻撃だ。」

俺は…ターンを終了する。」

「アタシのターン！」

…奇跡を起こせるのか？花凛…？あの時みたいに……

「墓地にいる三枚の闇属性モンスターがいるとき、『ダークアームド・ドラゴン』を特殊召喚する！
さらに！自分の墓地の光族と闇族のモンスターをそれぞれ一体…除外することで、降臨せよ！『カオスソルジャー開闢の使者』！！」

2体のモンスターが姿を現した。
漆黒の龍と…光と闇を纏いし戦士が…

ダークアームド・ドラゴン 攻 2800

カオスソルジャー開闢の使者 攻 3000

「さらに！！！！『貪欲なツボ』で、5枚のカードを戻し…カードを3枚引く。

アタシは『死者蘇生』を使い、来い！！『混沌の黒魔術師』！！」
「なんだよそれ！！初めて見るぞ！！？」

カルディアが前のめりになっている。

その名の通り、黒く背の高い魔術師が現れた。

混沌の黒魔術師 攻 2800

「召喚に成功した時、墓地から魔法カードを1枚…手札に加える……
んでそろったぜ!!」

アタシは再度『ホルスの黒炎竜LV4』を召喚し、『レベルアップ』
を2枚使って『ホルスの黒炎竜LV8』を特殊召喚!!」

再び白銀の鳥が現れた。

ホルスの黒炎竜LV8 攻 3000

「なんといいのか……凄いな……」

アスプロスの言うとおりだ……場にいるモンスターのすべてが……
攻撃力3000かそれに準するモノ……まあ、一体だけ強すぎる例
外がいるが……

「『強欲なツボ』でカードを2枚ドロ―。

アタシは『団結の力』をホルスの黒炎竜LV8に装備！！
団結の力は自分の場のモンスターの数×800攻撃力がUPする装
備魔法！」

「……ということは……2400UPか!？」

エルシドが目を丸くした。

ホルスの黒炎竜LV8 攻 3000 5400

「……そして、さらに、墓地の闇属性モンスターを2枚除外するこ
とで、ダークアームド・ドラゴンの効果発動！
2体の青眼の白龍を破壊する！」
「!?!?俺の青眼の白龍を……よくも……!!！」

青眼の光龍 攻 4200 4800

「……勝ったな……」

デジエルがポツリとつぶやいた。

「なぜ断言できる?」

私が尋ねてみると、少し驚いたような顔をされた。
おそらくカルディアが尋ねてくると思っただろう。

「アルバフィカの言うとおりだぜ！なんでだ？」

思った通り、カルディアも聞く。

「残るモンスター…光龍の方はホルスが片付ける。

白龍のほうは、カオスソルジャー開闢の使者で相殺して破壊できる。

…残ったモンスター…：ダークアームド・ドラゴンと混沌の黒魔術師はともに2800…

これで分かるだろ？」

「やるじゃん！花凜って！！」

レグルスがそう言い、師であるシジフォスを見上げる…が、彼は苦い顔をしていた。

「そんなことは青嵐も分かっているはず…：…なんだか嫌な予感がするな…：…」

「これで終わりだ！！ホルスの黒炎竜LV8で青眼の光龍に攻撃！
『ブラックギガフレイム』！！！！」

青嵐は……

「ふはははは！……愚かな！！
俺様に勝とうなど100万年早いわ！！
手札から『オネスト』を捨てることで、相手モンスター分の攻撃力
分：光龍の攻撃力を高める！！」
「なっ！？」

花凜から色が消えた。

「形勢逆転だな……俺の勝利の方程式はとっくの昔に完成していた
のだ……
返り討ちにしろ！『シャイニング・バースト』！！！」

黒炎と光炎がぶつかりあい……そして……

「そ……そんなあ……！！！」

花凜 LP 2500 0

第22話 ラストバトル！！ 黒炎と光炎がぶつかり合う時…（後書き）

次回完結です！次回更新はもっと早くに更新します！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2990v/>

バトルシティは245年前！？

2011年11月9日02時08分発行